

# Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC)

インストール・ガイド

リリース 1 (9.0.3)

2002 年 11 月

部品番号 : J06961-01

**ORACLE®**

---

Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System  
(SPARC) インストレーション・ガイド, リリース 1 (9.0.3)

部品番号: J06961-01

原本名: Oracle Collaboration Suite Installation Guide, Release 1 Version 9.0.3 for HP 9000 Series HP-UX,  
Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC)

原本部品番号: B10044-02

原本著者: Janelle Simmons

原本協力者: Rajesh Bansal, Steve Carbone, Will Chin, Tanya Correia, Saheli Dey, Vikas Dhamija,  
Craig Foch, Mark Kennedy, George Kotsovolos, Charles Liuson, Stephanie MacLean,  
Matthew McKerley, Beth Morgan, Product Line Engineering, Edsel delos Reyes, Daniel Shih,  
Helen Slattery, Robb Surridge, Kenneth Tang, Jennifer Waywell

Copyright © 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

\* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上記のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的のみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

---

---

# 目次

はじめに .....	ix
対象読者 .....	x
このマニュアルの構成 .....	x
関連文書 .....	xi
表記規則 .....	xii
<b>1 インストールの概要</b>	
Oracle Collaboration Suite CD Pack の内容 .....	1-2
Oracle9iAS Infrastructure のインストール .....	1-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール .....	1-3
Oracle Collaboration Suite のインストール .....	1-3
Oracle Collaboration Suite Client .....	1-5
Oracle Voicemail & Fax .....	1-5
Oracle Collaboration Suite の Interoperability Patch .....	1-6
Oracle Collaboration Suite のドキュメント .....	1-6
<b>2 インストールの準備</b>	
ハードウェア要件 .....	2-2
ランダム・アクセス・メモリーの確認 .....	2-4
スワップ領域の確認 .....	2-4
オペレーティング・システムのバージョン .....	2-4
オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ .....	2-5
オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージのダウンロード場所 .....	2-5
インストールされたパッチの確認 .....	2-6
Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須 Solaris パッチ .....	2-6

Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 Solaris パッチ .....	2-8
Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須 HP パッチ .....	2-8
Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 HP パッチ .....	2-9
Oracle Real Application Clusters をサポートするためのオペレーティング・システム要件 .....	2-10
Java Runtime Environment (JRE) パッチ .....	2-11
オペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ (Solaris のみ) .....	2-12
追加のオペレーティング・システム要件 .....	2-13
<b>多言語サポート</b> .....	2-13
<b>オンライン・ドキュメントの要件</b> .....	2-14
<b>ポートの割当て</b> .....	2-14
<b>認証ソフトウェア</b> .....	2-15
<b>リリース・ノート</b> .....	2-15
<b>環境に対するインストール前のタスク</b> .....	2-15
環境変数の設定 .....	2-16
DISPLAY .....	2-16
ホスト名ファイルの構成 .....	2-17
追加ホスト名ファイルの構成 (Solaris) .....	2-18
UNIX のアカウントおよびグループの作成 .....	2-18
Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名 .....	2-18
Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント .....	2-19
権限が付与されたグループの UNIX グループ名 .....	2-19
Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするための Oracle Real Application Clusters .....	2-20
Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する手順 .....	2-20
Solaris、HP または Linux に Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する追加手順 .....	2-21
Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に oracle ユーザーとして実行する手順 .....	2-23
Linux への Oracle Real Application Clusters のインストール .....	2-24
Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite に対するカーネル・パラメータの構成 .....	2-25
カーネル・パラメータ設定 (Solaris) .....	2-26
カーネル・パラメータ設定 (HP) .....	2-27
カーネル・パラメータ設定 (Linux) .....	2-29
Oracle Collaboration Suite Information Storage に対するカーネル・パラメータの構成 .....	2-32
カーネル・パラメータ設定 (Solaris) .....	2-32
カーネル・パラメータ設定 (HP) .....	2-34

### 3 配置

配置方法 .....	3-2
Oracle9iAS Infrastructure の配置 .....	3-2
Oracle9iAS Infrastructure の多言語サポート .....	3-3
Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置 .....	3-3
Oracle Collaboration Suite Information Storage の多言語サポート .....	3-3
Oracle Collaboration Suite の配置 .....	3-4
Oracle Collaboration Suite の多言語サポート .....	3-5
Oracle Email の配置 .....	3-6
Oracle Files の配置 .....	3-6
Oracle Ultra Search の配置 .....	3-8
Oracle Voicemail & Fax の配置 .....	3-10
Oracle Wireless & Voice の配置 .....	3-11
配置に対する推奨項目および考慮事項 .....	3-11
アップグレード .....	3-12
Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 のアップグレード .....	3-12
Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 のアップグレード .....	3-13
既存の Oracle9iAS Infrastructure の手動アップグレード .....	3-13
Oracle Internet Directory のアップグレード .....	3-13
Oracle Internet Directory をアップグレードする前のタスク .....	3-14
Oracle9iAS Infrastructure バージョン 9.0.2.0.1 の Oracle Internet Directory の アップグレード .....	3-15
Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 バージョンの Oracle Internet Directory の アップグレード .....	3-16
Oracle Internet Directory 2.1.1.x または 3.0.1.x からのアップグレード .....	3-16
アップグレードされた Oracle Internet Directory の構成 .....	3-16
Oracle Email のアップグレード .....	3-17
Oracle Email Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード手順 .....	3-17
中間層用の Oracle Email のアップグレード手順 .....	3-18
Email Store (データベース) 用の Oracle Email のアップグレード手順 .....	3-19
Oracle Ultra Search のアップグレード .....	3-20
Oracle Voicemail & Fax のアップグレード .....	3-20
Oracle Voicemail & Fax をアップグレードする前のタスク .....	3-20
9.0.2 から Oracle Collaboration Suite のバージョンへの Oracle Voicemail & Fax の アップグレード手順 .....	3-20

ダウングレード .....	3-22
Oracle Ultra Search のダウングレード .....	3-22
Oracle Ultra Search 9.0.3 から 9.0.2 へのダウングレード .....	3-22
Oracle Internet Directory のダウングレード .....	3-23
データベースのチューニング .....	3-23
Oracle Email に対する Oracle データベースの要件 .....	3-24
Oracle Files に対する Oracle データベースの要件 .....	3-26

## 4 インストール・スタート・ガイド

CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール .....	4-2
CD-ROM のマウント (Solaris) .....	4-2
Volume Management ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Solaris) .....	4-3
CD-ROM の手動マウント (Solaris) .....	4-3
CD-ROM のマウント (HP) .....	4-4
CD-ROM のマウント (Linux) .....	4-6
自動マウント・ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Linux) .....	4-6
CD-ROM の手動マウント (Linux) .....	4-7
ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール .....	4-8
Oracle Universal Installer の概要 .....	4-9
Oracle Universal Installer の前提条件の確認 .....	4-9
oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル .....	4-10
Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール .....	4-11
Oracle Universal Installer の起動 .....	4-12

## 5 Oracle Collaboration Suite のインストール

インストール前手順 .....	5-2
Oracle9iAS Infrastructure のインストール .....	5-2
Oracle9iAS Infrastructure の追加のドキュメント .....	5-8
Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール .....	5-8
既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール .....	5-11
Oracle Email のインストール後のタスク .....	5-12
Oracle Net Configuration Assistant の実行 .....	5-13
Database Configuration Assistant の実行 .....	5-13
Oracle Internet Directory の構成の確認 .....	5-14
CTXSYS ユーザー・パスワードのロック解除 .....	5-14
Oracle Files のインストール後のタスク .....	5-15

<b>Oracle Collaboration Suite のインストール</b> .....	5-15
Oracle Collaboration Suite のインストール後のタスク .....	5-19
追加のドキュメント .....	5-22

## 6 Oracle Files の構成

<b>Oracle Files の構成前のタスク</b> .....	6-2
<b>Oracle Files の構成</b> .....	6-3
新しい Oracle Files ドメインの作成 .....	6-4
既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定 .....	6-21
<b>Oracle Files の非インタラクティブな初期構成</b> .....	6-23
<b>Oracle Files ランタイムの設定</b> .....	6-24
すべての必要なプロセスの起動 .....	6-24
Oracle Files サブスクリバの作成 .....	6-26
Oracle Files のユーザー設定 .....	6-28
プロトコル・サーバーへのアクセス .....	6-29
基本操作の検証 .....	6-30

## 7 サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール

<b>非インタラクティブ・インストールの概要</b> .....	7-2
サイレント・インストール .....	7-2
非インタラクティブ・インストール .....	7-3
<b>インストール要件</b> .....	7-3
<b>サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール用のファイルの作成</b> .....	7-3
oraInst.loc ファイルの作成 .....	7-3
emtab ファイルの作成 .....	7-4
oratab ファイルの作成 .....	7-4
<b>レスポンス・ファイルの選択</b> .....	7-5
<b>レスポンス・ファイルの編集</b> .....	7-5
<b>レスポンス・ファイルの指定</b> .....	7-6
<b>root.sh スクリプトの実行</b> .....	7-7
root.sh およびサイレント・インストール .....	7-7
Oracle HTTP Server .....	7-7
異なるポート上での Oracle HTTP Server の使用 .....	7-8
root.sh および非インタラクティブ・インストール .....	7-8
<b>エラー処理</b> .....	7-8

削除 .....	7-9
非インタラクティブ・モードでの Configuration Assistant の使用 .....	7-9
レスポンス・ファイルのエラー処理 .....	7-10

## 8 削除

削除の概要 .....	8-2
Oracle コンポーネントの削除の準備 .....	8-2
Oracle コンポーネントの削除 .....	8-2

## A インストール・チェックリスト

Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト .....	A-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト .....	A-3
Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト .....	A-4
Oracle Files の構成チェックリスト .....	A-5

## B トラブルシューティング

Oracle Calendar のインストールのトラブルシューティング .....	B-2
Oracle Files のインストールのトラブルシューティング .....	B-2
データベース・オブジェクトの作成エラー .....	B-3
データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ .....	B-3
データベース・リソースが不十分なために発生する Oracle Files サーバー障害 .....	B-3
Oracle Text 検証フェーズ中の Oracle Files Configuration Assistant のハングアップ .....	B-3
\$ORACLE_HOME/ifs/files/ log/domain_name/node_name.log に書き込まれる 「Out of database cursors」メッセージ .....	B-4
低速なサーバー .....	B-4
Oracle Real Application Clusters のトラブルシューティング .....	B-5

## C デフォルトのポート番号およびポート範囲

ポート割当ての概要 .....	C-2
コンポーネントのポート番号 .....	C-2
Oracle9iAS Infrastructure のポート使用 .....	C-3
Oracle のポート使用 (コンポーネント別) .....	C-3
Oracle のポート使用 (ポート番号別) .....	C-7

## D Oracle Collaboration Suite Client のインストール

<b>Oracle Outlook Connector 3.4</b> .....	D-2
Oracle Outlook Connector のシステム要件 .....	D-2
Oracle Outlook Connector のインストール前の要件 .....	D-3
Oracle Outlook Connector のインストール .....	D-3
Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール .....	D-4
Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ .....	D-5
Oracle Outlook Connector の削除 .....	D-13
<b>Oracle CorporateTime 6.0.3 for Windows</b> .....	D-14
Oracle CorporateTime for Windows のシステム要件 .....	D-14
Oracle CorporateTime for Windows のインストール .....	D-14
Oracle CorporateTime for Windows のサイレント・インストール .....	D-15
Oracle CorporateTime for Windows の削除 .....	D-15
<b>Oracle CorporateTime 5.2.3 for Macintosh</b> .....	D-15
Oracle CorporateTime for Macintosh のシステム要件 .....	D-15
Oracle CorporateTime for Macintosh のインストール .....	D-16
Mac OS 8.6 ~ 9.2 .....	D-16
Mac OS X .....	D-16
Oracle CorporateTime for Macintosh の削除 .....	D-17
Mac OS 8.6 ~ 9.2 .....	D-17
Mac OS X .....	D-17
<b>Oracle CorporateTime 5.0.2 for Motif</b> .....	D-18
Oracle CorporateTime for Motif のシステム要件 .....	D-19
Oracle CorporateTime for Motif のインストール .....	D-19
Oracle CorporateTime for Motif の削除 .....	D-20
<b>Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition)</b> .....	D-20
Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) のシステム要件 .....	D-20
Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) のインストール .....	D-21
Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) の削除 .....	D-22
<b>Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC</b> .....	D-22
Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のシステム要件 .....	D-22
Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のインストール .....	D-23
Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC の削除 .....	D-23
<b>Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition)</b> .....	D-24
Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) のシステム要件 .....	D-24

Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) のインストール .....	D-24
Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) の削除 .....	D-26
<b>Oracle FileSync for Windows</b> .....	D-26
Oracle FileSync for Windows のインストール .....	D-26

## **E Oracle Collaboration Suite ドキュメント**

<b>Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM</b> .....	E-2
Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリの表示 .....	E-2
コンポーネント CD-ROM に含まれる <b>Oracle Collaboration Suite</b> ドキュメント .....	E-3

## **用語集**

## **索引**

---

# はじめに

このマニュアルでは、Oracle Collaboration Suite の概要、インストール前のタスク、インストールおよびインストール後のタスクについて説明します。

ここでは、次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連文書](#)
- [表記規則](#)

# 対象読者

このマニュアルは、Oracle Collaboration Suite をインストールまたは構成するすべてのユーザーを対象としています。

このマニュアルを読むには、次のいずれかのオペレーティング・システムについて理解しておく必要があります。

- Solaris
- HP 9000 Series HP-UX
- Linux Intel

# このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は次のとおりです。

## 第1章「インストールの概要」

この章では、Oracle Collaboration Suite のインストールおよび構成の概要を示し、Oracle Collaboration Suite の各インストールの機能および目的について説明します。

## 第2章「インストールの準備」

この章では、Oracle Collaboration Suite の各インストールを計画する方法について説明します。

## 第3章「配置」

この章では、特定の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをアップグレードおよびダウングレードする方法、およびそれらのコンポーネント間で発生する可能性がある競合について説明します。また、Oracle Collaboration Suite コンポーネントで既存の Oracle9i データベースを使用する場合のデータベースのチューニングについても説明します。

## 第4章「インストール・スタート・ガイド」

この章では、インストールを開始する手順（CD-ROM のマウント、Oracle Universal Installer の起動など）について説明します。

## 第5章「Oracle Collaboration Suite のインストール」

この章では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite をインストールする方法について説明します。

## 第6章「Oracle Files の構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite Search に必要な Oracle Files を構成する方法について説明します。

## 第7章「サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール」

この章では、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを実行する方法について説明します。

## 第8章「削除」

この章では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントを削除する方法について説明します。

## 付録 A 「インストール・チェックリスト」

この付録では、Oracle Collaboration Suite の各インストール用のチェックリストを示します。

## 付録 B 「トラブルシューティング」

この付録では、一般的なインストールの問題および解決策を示します。

## 付録 C 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」

この付録では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが使用するポートを示します。

## 付録 D 「Oracle Collaboration Suite Client のインストール」

この付録では、Oracle Collaboration Suite Client CD-ROM 上のコンポーネントのシステム要件、インストール手順および削除手順について説明します。

## 付録 E 「Oracle Collaboration Suite ドキュメント」

この付録では、Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM の内容について説明します。

## 用語集

# 関連文書

詳細は、次の Oracle リソースを参照してください。

- Oracle9i Application Server ドキュメント・ライブラリ、リリース 2
- Oracle9i データベース・ドキュメント・ライブラリ、リリース 2
- Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリ、バージョン 1 (9.0.3)

リリース・ノート、インストール・マニュアル、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連文書は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) に接続すれば、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。次の URL で登録できます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得済であれば、次の OTN-J Web サイトの文書セクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

## 表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文中の表記規則](#)
- [コード例中の表記規則](#)
- [Windows オペレーティング・システムの表記規則](#)

### 本文中の表記規則

本文では、特別な用語をより迅速に識別できるように、様々な表記規則を使用します。次の表に、それらの表記規則を説明し、その使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語または用語集に記載されている用語（あるいはその両方）を示します。	この句を指定すると、 <b>索引構成表</b> が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システムが提供する要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドが含まれます。また、システムが提供する列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみに、この句を指定できません。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを取ることができます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	<p>固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが提供する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子が含まれます。また、ユーザーが提供するデータベース・オブジェクトとデータベース構造と列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。</p> <p><b>注意:</b> 大文字と小文字を組み合わせて使用するプログラム要素もあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルで指定します。</p> <p>/disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを取ります。</p> <p>hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーとして接続します。</p> <p>JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。</p>
固定幅フォントの小文字のイタリック	<p>固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。</p>	<p>parallel_clause を指定できます。</p> <p>Uold_release.SQL を実行します。ここで、old_release とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。</p>

## コード例中の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL\*Plus または他のコマンドライン文を説明します。コード例は、固定幅フォントで表示され、次の例に示すとおり通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則を説明し、その使用例を示します。

規則	意味	例
[ ]	大カッコは、任意に選択する 1 つ以上の項目を囲みます。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL ( <i>digits</i> [ , <i>precision</i> ])
{ }	中カッコは、2 つ以上の項目を囲み、そのうちの 1 つの項目は必須です。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE   DISABLE}
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の 2 つ以上のオプションの選択項目を表します。いずれかのオプションを入力します。縦線は入力しないでください。	{ENABLE   DISABLE} [COMPRESS   NOCOMPRESS]

規則	意味	例
...	<p>水平の省略記号は、次のいずれかを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。</li> <li>■ コードの一部を繰り返すことができる。</li> </ul>	<pre>CREATE TABLE ... AS subquery;  SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;</pre>
.	<p>垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。</p>	<pre>SQL&gt; SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fs1/dbs/tbs_01.dbf /fs1/dbs/tbs_02.dbf . . . /fs1/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.</pre>
その他の句読点	<p>大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の句読点は、表示されているとおりに入力する必要があります。</p>	<pre>acctbal NUMBER(11,2); acct      CONSTANT NUMBER(4) := 3;</pre>
イタリック体	<p>イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。</p>	<pre>CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name</pre>
大文字	<p>大文字は、システムが提供する要素を示します。これらの用語は、ユーザー定義の用語と区別するために大文字で示されます。用語が大カッコ内にかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、これらの用語は大/小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。</p>	<pre>SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;</pre>
小文字	<p>小文字は、ユーザー定義のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名、ファイル名などです。</p> <p><b>注意:</b> 大文字と小文字を組み合わせて使用するプログラム要素もあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<pre>SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;</pre>

## Windows オペレーティング・システムの表記規則

次の表に、Windows オペレーティング・システムの表記規則を説明し、その使用例を示します。

規則	意味	例
「スタート」>	プログラムを起動する方法を示します。	Database Configuration Assistant を起動するには、「スタート」>「プログラム」>「Oracle - HOME_NAME」>「Configuration and Migration Tools」>「Database Configuration Assistant」を選択します。
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字のうち左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロンの (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 ( ) およびダッシュ (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用ネーミング規則が使用されていることとなります。	C:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
C:¥>	現在のハードディスク・ドライブの Windows コマンド・プロンプトを表します。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。プロンプトは作業中のサブディレクトリを示します。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトのうち二重引用符 (") には、エスケープ文字として、特殊文字の円記号 (¥) が必要な場合があります。カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥"  C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。  ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_ NAMETNSListener



# 1

---

---

## インストールの概要

この章では、Oracle Collaboration Suite CD Pack の内容の概要を示し、Oracle Collaboration Suite の3つのインストール・タイプの配置方法について説明します。インストールを実行する前にこの章を読んでおくことをお勧めします。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite CD Pack の内容](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite Client](#)
- [Oracle Voicemail & Fax](#)
- [Oracle Collaboration Suite の Interoperability Patch](#)
- [Oracle Collaboration Suite のドキュメント](#)

## Oracle Collaboration Suite CD Pack の内容

Oracle Collaboration Suite CD Pack には、次の CD-ROM セットが含まれています。

- [Oracle9iAS Infrastructure](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite Client](#)
- [Oracle Voicemail & Fax](#)
- [Oracle Collaboration Suite](#) の Interoperability Patch
- [Oracle Collaboration Suite](#) のドキュメント

次の項では、これらの CD-ROM セットについて説明します。

## Oracle9iAS Infrastructure のインストール

Oracle Collaboration Suite とともにインストールされるすべての中間層アプリケーション (Oracle Files、Oracle Calendar など) を使用するには、[Oracle9iAS Infrastructure](#) のインストールが前提条件となります。最初に [Oracle9iAS Infrastructure](#) をインストールする必要があります。

---

---

**注意：** Oracle Collaboration Suite CD Pack に含まれている [Oracle9iAS Infrastructure](#) をインストールするか、または既存の [Oracle9iAS Infrastructure](#) を使用できます。Oracle Collaboration Suite を使用するには、最初に既存の [Oracle9iAS Infrastructure](#) をアップグレードする必要があります。詳細は、3-12 ページの「[アップグレード](#)」を参照してください。

---

---

[Oracle9iAS Infrastructure](#) は、次のコンポーネントで構成されます。

- [Oracle9iAS Metadata Repository](#)  
[Oracle Collaboration Suite](#) インスタンスの実行に必要なメタデータおよびスキーマを含む事前作成済データベースです。このリポジトリは、[Oracle9iAS Infrastructure](#) をインストールするたびにインストールおよび構成されます。
- [Oracle Internet Directory](#)  
分散したユーザーおよびネットワーク・リソースに関する情報を共有可能にするディレクトリ・サービスです。[Oracle Internet Directory](#) は、[Lightweight Directory Access Protocol](#) バージョン 3 を実装します。

- Oracle9iAS Single Sign-On

複数のアカウントおよび Oracle Collaboration Suite アプリケーションへのアクセスを可能にする、企業規模のユーザー認証プロセスです。

- Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager コンソールを使用して、システム管理タスクを処理し、ネットワーク間のこれらのタスクの分散を管理します。Oracle Enterprise Manager コンソールおよびその 3 層アーキテクチャを Oracle Enterprise Manager Web Site と併用すると、Oracle Collaboration Suite のみでなく、Oracle 環境全体を管理できます。

- J2EE and Web Cache

J2EE and Web Cache をインストールすると、**Oracle HTTP Server** および **Oracle9iAS Containers for J2EE** が構成されます。これらのコンポーネントは、Oracle9iAS Infrastructure によって内部的に使用されます。

---

**注意：** J2EE and Web Cache のインフラストラクチャ・インストールを使用したカスタマ・アプリケーションの配置はサポートされていません。

---

## Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール

Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールには、中間層アプリケーションでの使用のためにチューニング済の Oracle9i リリース 2 (9.2) 初期データベース (次の 1-3 ページ「[Oracle Collaboration Suite のインストール](#)」を参照) が含まれます。これらの中間層アプリケーションのいずれかを構成および使用する場合は、まず Oracle Collaboration Suite 用に Oracle9iAS Infrastructure をインストールまたはアップグレードする必要があります。Oracle9iAS Infrastructure をインストールした後、Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールします。

**参照：** Oracle Collaboration Suite での既存の Oracle9i データベースの使用については、3-23 ページの「[データベースのチューニング](#)」を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle Collaboration Suite をインストールすると、企業内通信、コンテンツ管理およびコンテキスト管理のための統合ソリューションが提供されます。これによって、デスクトップ・コンピュータ、ノート型コンピュータ、携帯情報端末 (PDA)、FAX、電話および Web クライアントのユーザーが共同作業を行い、日常の業務を遂行できます。

Oracle Collaboration Suite をインストールするには、次の操作を実行しておく必要があります。

- Oracle9iAS Infrastructure のインストール
- ネットワーク上での Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On コンポーネントの構成（個別のコンピュータ上で構成することをお勧めします）
- Oracle Email および Oracle Files 用にチューニング済のデータベースを含む、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール

Oracle Collaboration Suite は、次の中間層アプリケーションで構成されます。

- Oracle Calendar

デスクトップ・クライアント、Web およびすべてのモバイル端末を介したカレンダーリング、スケジューリングおよび個人情報管理（PIM）機能を提供します。スケーラブルなカレンダー・アーキテクチャによって、企業全体での高度なグループ・カレンダーの使用およびリソース・スケジューリングが可能になります。

- Oracle Email

信頼性が高くスケーラブルで安全なメッセージ・システムです。整理統合されたメール・ストアを使用することによって管理、ハードウェアおよびソフトウェアのコストを削減します。Oracle9i データベースを電子メール用の単一のメッセージ・ストアとして使用し、様々な種類の情報のアクセス、格納および管理に Oracle のメリットを利用します。

- Oracle Files

スケーラブルで信頼性の高い統合ファイル・サーバーを介した共同作業およびファイルの共有をサポートする、コンテンツ管理アプリケーション。高度な Web ベースのユーザー・インタフェースおよび業界標準プロトコルを提供します。これによって、ユーザーはワークスペース内または企業内の他のユーザーと様々な種類のファイルを簡単に共有できます。Oracle Files は、Oracle9i データベースを使用してコンテンツを格納します。

- Oracle Ultra Search

企業向け検索エンジンを提供します。この検索エンジンによって、企業ユーザーは、イントラネットまたはエクストラネット内の有用な情報を検索できます。Oracle Ultra Search は、Web ページ、Oracle9i データベースなどのデータ・ソースの統合検索を行うための検索機能を提供します。

- Oracle Wireless & Voice

社外にいる従業員による、社内情報へのあらゆる場所、あらゆるデバイスからのフル・アクセスを可能にします。

- Oracle Collaboration Suite Web Client

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供する。この Web クライアントは、基礎となる Oracle9iAS Infrastructure を使用して、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、および大規模な共同作業用に設計されたファイル・サーバーである

Oracle Files に格納されたコンテンツにアクセスするための、安全なシングル・サインオン環境を提供する。

- Oracle9iAS Portal

Web データベース・アプリケーションおよびコンテンツ・ドリブン Web サイトを構築、配置および監視するための完全なソリューションです。Oracle9iAS Portal を使用すると、簡単に使用可能な HTML ベースのインタフェースを介して、データベース・オブジェクトを作成および表示できます。

すべての中間層アプリケーションが、Oracle Collaboration Suite をインストールするたびにインストールされます。Oracle Collaboration Suite のインストール中に、Oracle Calendar、Oracle Email、Oracle Files、Oracle9iAS Portal および Oracle Wireless & Voice を構成できます。オプションで、これらのアプリケーションをインストール後に構成することもできます。

## Oracle Collaboration Suite Client

Oracle Collaboration Suite Client は、次のコンポーネントで構成されます。

- Oracle Outlook Connector 3.4
- Oracle CorporateTime 6.0.3 for Windows
- Oracle CorporateTime 5.2.3 for Macintosh
- Oracle CorporateTime 5.0.2 for Motif
- Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm, Windows Edition
- Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC
- Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm, Macintosh Edition
- Oracle FileSync for Windows

**参照：** インストール方法については、[付録 D 「Oracle Collaboration Suite Client のインストール」](#) を参照してください。

## Oracle Voicemail & Fax

この CD-ROM は、Windows 2000 に Oracle Voicemail & Fax をインストールします。

Oracle Voicemail & Fax は、信頼性が高く、高スケーラブルなボイスメールおよび FAX のシステムです。このシステムによって、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージの格納および取出しを集中管理し、安全に実行できます。Oracle Voicemail & Fax は、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージに Oracle Email のメッセージ・ストアを使用します。

**参照：** インストール方法については、『Oracle Voicemail & Fax Administrator's Guide』を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite の Interoperability Patch

この CD-ROM には、Oracle9i Application Server に付属する既存のバージョン 9.0.2.0.0 の Oracle9iAS Infrastructure を、Oracle Collaboration Suite で使用可能なバージョンにアップグレードするためのパッチが含まれています。アップグレードするかわりに、Oracle Collaboration Suite CD Pack に含まれている Oracle9iAS Infrastructure を使用することもできます。

**参照：**

- 3-13 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 のアップグレード](#)」を参照してください。
- 3-12 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 のアップグレード](#)」を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite のドキュメント

この CD-ROM には、Oracle Collaboration Suite のドキュメント・ライブラリが含まれています。このドキュメントは、CD-ROM から参照するか、またはハードディスク・ドライブにコピーできます。

**参照：** 付録 E「[Oracle Collaboration Suite ドキュメント](#)」を参照してください。

---

## インストールの準備

この章では、Oracle Collaboration Suite の各インストールを計画する方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- ハードウェア要件
- オペレーティング・システムのバージョン
- オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ
- 多言語サポート
- オンライン・ドキュメントの要件
- ポートの割当て
- 認証ソフトウェア
- リリース・ノート
- 環境に対するインストール前のタスク

## ハードウェア要件

表 2-1 に、Oracle Collaboration Suite の各インストールに対するハードウェアの最低要件を示します。

**表 2-1 Oracle Collaboration Suite のハードウェア要件**

要件	値
Solaris CPU <sup>1</sup>	SPARC プロセッサ
HP CPU <sup>1</sup>	HP-UX 11.0 用 HP 9000 Series HP-UX プロセッサ (64 ビット)
Linux CPU <sup>1</sup>	Pentium II 233MHz 以上 (32 ビット)
モニター	256 色カラー表示機能
/var/tmp のディレクトリ領域	Oracle Collaboration Suite: 33MB Oracle9iAS Infrastructure: 7MB Oracle Collaboration Suite Information Storage: 34MB
スワップ領域	2GB
メモリー	512MB 以上  <b>注意:</b> アプリケーションのタイプおよびシステム上のユーザー数に応じて、追加のメモリーを割り当ててください。  HP に Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールする場合は、追加のメモリーが必要です。Hyper Messaging Protocol (HMP) を実装したクラスタに Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、HMP を使用する Oracle シャドウ・プロセスごとに 0.3MB の追加メモリーが必要です。
ディスク領域 (Solaris)	Oracle Collaboration Suite: 1.84GB Oracle9iAS Infrastructure: 3.96GB Oracle Collaboration Suite Information Storage: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Email の <b>Email Store</b>: 3.26GB (ソフトウェアおよび最初のデータベース・インスタンス用)。同じ Oracle ホームに追加のデータベース・インスタンスをインストールするたびに 1.28GB を追加します。</li> <li>■ Oracle Files の <b>Files Store</b>: 1.76GB (ソフトウェアおよび最初のデータベース・インスタンス用)。同じ Oracle ホームに追加のデータベース・インスタンスをインストールするたびに 1.28GB を追加します。</li> </ul>

表 2-1 Oracle Collaboration Suite のハードウェア要件 (続き)

要件	値
ディスク領域 (HP)	Oracle Collaboration Suite: 4.8GB Oracle9iAS Infrastructure: 5.9GB <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Email の <b>Email Store</b>: 4.2GB (ソフトウェアおよび最初のデータベース・インスタンス用)。同じ Oracle ホームに追加のデータベース・インスタンスをインストールするたびに 1.5GB を追加します。</li> <li>■ Oracle Files の <b>Files Store</b>: 4.3GB (ソフトウェアおよび最初のデータベース・インスタンス用)。同じ Oracle ホームに追加のデータベース・インスタンスをインストールするたびに 1.5GB を追加します。</li> </ul>
ディスク領域 (Linux)	Oracle Collaboration Suite: 2.1GB Oracle9iAS Infrastructure: 4.2GB Oracle Collaboration Suite Information Storage: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Email の <b>Email Store</b>: 3.6GB (ソフトウェアおよび最初のデータベース・インスタンス用)。同じ Oracle ホームに追加のデータベース・インスタンスをインストールするたびに 1.8GB を追加します。</li> <li>■ Oracle Files の <b>Files Store</b>: 3.8GB (ソフトウェアおよび最初のデータベース・インスタンス用)。同じ Oracle ホームに追加のデータベース・インスタンスをインストールするたびに 1.8GB を追加します。</li> </ul>

<sup>1</sup> Oracle Text で Oracle Files のドキュメントまたは Oracle Email の電子メール・メッセージを索引付けする場合は、CPU を増設することをお勧めします。

---

**注意：** オペレーティング・システムに関係なく、ディスク領域は単一のディスクで使用可能である必要があります。Oracle Collaboration Suite は、複数のディスクにまたがったインストールをサポートしません。

---



---

**注意：** HP-UX 上の Oracle Real Application Clusters 環境で、クラスタの相互接続に HP 社の Hyper Messaging Protocol (HMP) を使用するには、アダプタ・カード A6386a およびファイバ・ケーブル A7525a に加えて、HP 社独自の HyperFabric スイッチ (製品番号 A6384a、ファイバ・ベースの HyperFabric2 スイッチ) が必要です。

---

## ランダム・アクセス・メモリーの確認

次のコマンドを使用して、Solaris にインストールされたランダム・アクセス・メモリーの量を確認します。

```
prompt> /usr/sbin/prtconf | grep "Memory size"
```

## スワップ領域の確認

表 2-2 に、現在システム上に構成されているスワップ領域の量を確認するコマンドを示します。プラットフォームに応じて、表 2-2 に示すいずれかのコマンドを入力します。

**表 2-2 スワップ領域の確認**

プラットフォーム	コマンド
Solaris	prompt> /usr/sbin/swap -l
HP	prompt> /usr/sbin/swapinfo -a
Linux	prompt> /sbin/swapon -s

入力したコマンドの出力に示された BLOCKS 列の値を 2 で割ります。

## オペレーティング・システムのバージョン

表 2-3 に、各プラットフォームに必要なオペレーティング・システムのバージョン、および現行のオペレーティング・システムのバージョンを確認するコマンドを示します。

**表 2-3 オペレーティング・システムのバージョンおよび要件**

プラットフォーム	オペレーティング・システム要件	コマンド
Solaris	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Solaris 2.6、Solaris 7 および Solaris 8<sup>1</sup></li></ul>	prompt> uname -a
HP	<ul style="list-style-type: none"><li>■ HP-UX 11.0 PA-RISC (64 ビット)</li><li>■ JDK 1.3.1<sup>2</sup></li><li>■ /usr/ccs/bin ディレクトリに実行ファイル make、ar、ld、nm および cc が存在している必要があります。</li></ul>	prompt> uname -a
Linux	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Red Hat Advanced Server 2.1 ディストリビューション。カーネル 2.4.9 および glibc 2.2.4-25 が必要です。</li><li>■ XFree86 Development 3.3.3.1 以上</li><li>■ Open Motif 2.1.30</li><li>■ JDK 1.3.1 (今回のリリースに付属)</li></ul>	prompt> uname -a

<sup>1</sup> Oracle Files は、Solaris 8 のみで認証されます。

<sup>2</sup> JDK 使用の前提条件となるすべてのパッチもインストールする必要があります。これらのパッチは、HP 社の Web サイトから入手可能です。

## オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ

オペレーティング・システムによって、パッチおよびパッケージのインストールが必要な場合があります。次の表に示すいくつかのパッチには、依存パッチが存在します。これらのパッチは、あわせてインストールする必要があります。詳細は、パッチおよびパッケージに付属の `readme` ファイルを参照してください。特定のパッチまたはパッケージをダウンロードする場合は、依存性を確認し、必要に応じて依存パッチまたは依存パッケージをダウンロードします。

この項の内容は次のとおりです。

- オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージのダウンロード場所
- インストールされたパッチの確認
- Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須 Solaris パッチ
- Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 Solaris パッチ
- Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須 HP パッチ
- Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 HP パッチ
- Oracle Real Application Clusters をサポートするためのオペレーティング・システム要件
- Java Runtime Environment (JRE) パッチ
- オペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ (Solaris のみ)
- 追加のオペレーティング・システム要件

## オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージのダウンロード場所

表 2-4 に、各プラットフォーム用のオペレーティング・システムのパッチをダウンロードする場所を示します。

表 2-4 オペレーティング・システムのパッチのダウンロード場所

プラットフォーム	ダウンロード場所
Solaris	<a href="http://sunsolve.sun.com/">http://sunsolve.sun.com/</a> からダウンロード
HP	パッチ・バンドル: <a href="http://www.software.hp.com/SUPPORT_PLUS">http://www.software.hp.com/SUPPORT_PLUS</a> からダウンロード 個別のパッチ: <a href="http://itresourcecenter.hp.com">http://itresourcecenter.hp.com</a> からダウンロード
Linux	なし

## インストールされたパッチの確認

表 2-5 に、各プラットフォームに特定のパッチがインストールされているかどうかを確認するコマンドを示します。

**表 2-5 インストールされたパッチを確認するコマンド**

プラットフォーム	コマンド
Solaris	prompt> showrev -p   grep <i>six_digit_patch_number</i>
HP	prompt> /usr/sbin/swlist -l patch
Linux	prompt> rpm -qa

## Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須 Solaris パッチ

表 2-6 に、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite をインストールするために、Solaris にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチを示します。

**表 2-6 Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite**

オペレーティング・システム	パッチ
Solaris 2.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最新の推奨パッチ・クラスタ</li> <li>■ リンカー・パッチ: 107733-09 以上</li> <li>■ /usr/lib/libthread.so.1 パッチ: 105568-23 以上</li> <li>■ libaio、libc、watchmalloc パッチ: 105210-38 以上</li> <li>■ X Input &amp; Output Method パッチ: 106040-17 以上</li> <li>■ OpenWindows 3.6:Xsun パッチ: 105633-59 以上<sup>1</sup></li> <li>■ 中国語の TrueType フォント: 106409-01 以上<sup>2</sup></li> <li>■ SunOS 5.6: ISO 8859-01 ロケールで発生した致命的エラーによる ssJDK1.2.1_03 の失敗: 108091-03 以上<sup>3</sup></li> <li>■ CDE 1.2:libDtSvc パッチ (推奨): 105669-10 以上</li> <li>■ Motif 1.2.7: ランタイム・ライブラリ・パッチ: 105284-45 以上</li> <li>■ SunOS 5.6: カーネル更新パッチ (必須): 105181-30 以上</li> <li>■ patchadd および patchrm パッチ: 106125-1 以上</li> <li>■ /kernel/drv/mm パッチ: 106429-02 以上</li> <li>■ C++ 共有ライブラリ・パッチ: 105591-12 以上</li> <li>■ ユーロ・サポート・パッチ: 106842-09 以上および 106841-01 以上</li> </ul>

表 2-6 Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite (続き)

オペレーティング・パッチ  
システム

Solaris 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最新の推奨パッチ・クラスタ</li> <li>■ Libthread パッチ: 106980-17 以上</li> <li>■ カーネル更新パッチ: 106541-17 以上</li> <li>■ /kernel/fs/sockfs パッチ: 109104-04 以上</li> <li>■ /usr/lib/fs/fsck パッチ: 107544-03 以上</li> <li>■ Motif ランタイム・ライブラリ・パッチ: 107081-37 以上</li> <li>■ X Input &amp; Output Method パッチ: 107636-08 以上</li> <li>■ OpenWindows 3.6.1 Xsun パッチ: 108376-29 以上<sup>1</sup></li> <li>■ CDE Windows マネージャ・パッチ: 107226-18 以上</li> <li>■ CDE 1.3 libDT Widget パッチ: 108374-05 以上</li> <li>■ zh.GBK ロケールでの不正なフォントの置換用パッチ: 107153-01 以上</li> <li>■ リンカー・パッチ: 106950-16 以上</li> <li>■ C++ 用の共有ライブラリのパッチ: 106300-10 以上および 106327-11 以上</li> <li>■ Open Windows 3.6.1 libX+ パッチ: 107656-07 以上</li> <li>■ CDE 1.3: dtsession パッチ: 107702-09 以上</li> </ul>
Solaris 8	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 最新の推奨パッチ・クラスタ</li> <li>■ Xsun パッチ: 108652-37 以上</li> <li>■ CDE dtwm パッチ: 108921-13 以上</li> <li>■ Motif 2.1 パッチ: 108940-37 以上</li> <li>■ Portal および Wireless のパッチ: 112138-01 以上</li> </ul>

<sup>1</sup> このパッチは、Asian ロケールでのみ必要です。<sup>2</sup> このパッチは、Swing アプリケーションで繁体字中国語文字を表示するためにのみ必要です。<sup>3</sup> このパッチは、ISO 8859-1 または ISO 8859-15 キャラクタ・コードを使用するロケールでのみ必要です。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 Solaris パッチ

Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするために、Solaris にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチはありません。

## Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用の必須 HP パッチ

表 2-7 に、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite をインストールするために、HP にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチを示します。

**表 2-7 Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite**

パッチ	クラスタウェア・パッチ
■ December 2000 Patch Bundle	■ MC/ServiceGuard
■ PHSS_23377	■ 11.09 OPS Edition
■ PHCO_23770	■ PHCO_23919
■ PHKL_23226	
■ PHCO_23092	
■ PHCO_23792	
■ PHCO_23963	
■ PHCO_24148	
■ PHKL_18543	
■ PHKL_23226	
■ PHKL_23409	
■ PHKL_24826	
■ PHKL_24943	
■ PHKL_24971	
■ PHNE_21731	
■ PHNE_23456	
■ PHNE_23833	
■ PHSS_23440	
■ PHSS_17535	
■ PHSS_23546	
■ PHSS_23800	
■ PHKL_25188	
■ PHSS_23823	

## Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 HP パッチ

表 2-8 に、Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするために、HP にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチを示します。

**表 2-8 Oracle Collaboration Suite Information Storage**

---

### パッチ

---

- September 2001 Quality Pack
  - PHCO\_23792
  - PHCO\_24148
  - PHKL\_24268
  - PHKL\_24729
  - PHKL\_25475
  - PHKL\_25525
  - PHNE\_24715
  - PHSS\_23670
  - PHSS\_24301
  - PHSS\_24303
  - PHSS\_24627
  - PHSS\_22868
-

## Oracle Real Application Clusters をサポートするためのオペレーティング・システム要件

表 2-9 に、Oracle Real Application Clusters をサポートするために必要なオペレーティング・システムのパッケージおよびパッチを示します。

**表 2-9 Oracle Real Application Clusters 用のパッチおよびパッケージ**

プラットフォーム	パッケージおよびパッチ
Solaris	racpatch
HP	<ul style="list-style-type: none"><li>■ MC/ServiceGuard A.11.13 OPS Edition</li><li>■ PHSS_25915</li><li>■ Oracle Real Application Clusters 環境で Oracle インスタンスのインスタンス間通信に lowfat プロトコルが使用されている場合は、PHNE_26177 が必要です。lowfat プロトコルは、Hyperfabric インターコネクトと呼ばれる特別なハードウェアに実装された、待機時間が短く高帯域幅のプロトコルです。詳細は、PHNE_26177 に付属のドキュメントを参照してください。</li></ul>
Linux	なし

---

---

**注意：** Sun Cluster の場合、racpatch をインストールしてください (2-21 ページの「Solaris、HP または Linux に Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する追加手順」を参照)。

---

---

## Java Runtime Environment (JRE) パッチ

表 2-10 に、必須または推奨の JRE パッチを示します。

表 2-10 JRE パッチ

プラットフォーム	パッチ	必須または推奨
Solaris 2.6 (5.6)	106040-11 X Input and Output Method パッチ	必須
	105181-15 カーネル・パッチ	必須
	105284-25 Motif ランタイム・ライブラリ・パッチ	推奨
	105490-07 動的リンカー・パッチ	推奨
	106409-01 中国語の TrueType フォント・パッチ (1)	推奨
	105633-21 OpenWindows 3.6:Xdun パッチ (1)	推奨
	105568-13 Libthread パッチ	推奨
	105210-19 LibC パッチ	推奨
	105669-07 CDE 1.2:libDTSvc パッチ (dtmail)	推奨
Solaris 7 (5.7)	107636-01 X Input and Output Method パッチ	必須
	106980-05 Libthread パッチ	推奨
	107607-01 Motif fontlist、fontset、libxm	推奨
	107078-10 Open Windows 3.6.1 Xsun パッチ (1)	推奨
Solaris 8	なし	なし
HP	PHCO_23792	推奨
	PHCO_24148	推奨
	PHKL_25475	推奨
	PHNE_23456	推奨
	PHNE_24034	推奨
	PHSS_24303	推奨
Linux	なし	なし

## オペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ (Solaris のみ)

表 2-11 に、Solaris に必要なオペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージを示します。

**表 2-11 Solaris に必要なオペレーティング・システム・パッケージおよびフォント・パッケージ**

パッケージ・タイプ	必要なパッケージ
オペレーティング・システム	SUNWarc、SUNWbtool、SUNWhea、SUNWlibm、SUNWlibms、SUNWsprot および SUNWtoo
Java 用のフォント・パッケージ	すべてのロケールで SUNWilof および SUNWxwfont が必要です。ユーザーのロケールで使用されているフォント・スタイルをサポートするには、追加のフォント・パッケージを入手する必要がある場合があります。Solaris のフォント・パッケージのリストについては、 <a href="http://java.sun.com/j2se/1.3/font-requirements.html">http://java.sun.com/j2se/1.3/font-requirements.html</a> を参照してください。

オペレーティング・システムのパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> pkginfo -p package_name
```

ここで、`package_name` は、確認するパッケージの名前です。

## 追加のオペレーティング・システム要件

表 2-12 に、すべてのプラットフォームに必要な追加のソフトウェアを示します。

**表 2-12 追加のオペレーティング・システム要件**

ソフトウェア	要件
X サーバーおよびウィンドウ・マネージャ	<p>UNIX オペレーティング・システムでサポートされている X サーバーを使用します。ユーザーの UNIX オペレーティング・システムでサポートされている、Sun 社製品がサポートするウィンドウ・マネージャを使用します。</p> <p>Hummingbird Exceed には、システム固有のウィンドウ・マネージャを使用します。</p> <p>WRQ Reflections には、リモート・ウィンドウ・マネージャを使用可能にします。</p> <p>X Window System がローカル・システムで適切に動作しているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre>prompt&gt; xclock</pre> <p>モニターに時計が表示されます。</p>
必要な実行ファイル	<p>実行ファイル <code>make</code>、<code>ar</code>、<code>ld</code> および <code>nm</code> が存在している必要があります。</p>

## 多言語サポート

Oracle Collaboration Suite のユーザー・インタフェースは、英語、ポルトガル語（ブラジル）、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、簡体字中国語、スペイン語および繁体字中国語の 10 言語で使用できます。

### 注意：

- 今回のリリースでは、Oracle Calendar は英語でのみ使用可能です。
- 今回のリリースでは、Oracle Calendar は、ASCII 以外のユーザー ID をサポートしていません。
- Oracle Outlook Connector は、英語、フランス語およびドイツ語のみをサポートしています。
- 今回のリリースでは、Oracle CorporateTime は英語でのみ使用可能です。

**参照：** 多言語サポートのインストールについては、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。

## オンライン・ドキュメントの要件

Web ブラウザまたは Portable Document Format (PDF) ビューアを使用して、Oracle Collaboration Suite のドキュメントをオンラインで表示できます。

表 2-13 に、Oracle Collaboration Suite のオンライン・ドキュメントを表示するための要件を示します。

**表 2-13 オンライン・ドキュメントの要件**

要件	項目
オンライン・リーダー	次のいずれかのソフトウェアが必要です。 HTML <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Netscape Navigator 4.7 以上</li> <li>■ Microsoft Internet Explorer 5.0 以上</li> </ul> PDF <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Acrobat Reader 3.0 以上</li> <li>■ Acrobat Reader 3.0 with Search 以上</li> <li>■ Acrobat Exchange 3.0 以上</li> <li>■ PDFViewer Web ブラウザ・プラグイン 1.0 以上</li> </ul>
ライブラリ全体の HTML の検索およびナビゲーション	アクティブなインターネット接続
ディスク領域	310MB

**参照：** 付録 E 「Oracle Collaboration Suite ドキュメント」を参照してください。

## ポートの割当て

インストール後、Oracle Universal Installer は、Oracle Collaboration Suite コンポーネントのインストール中に割り当てられたポートを示す `portlist.ini` という名前のファイルを作成します。インストール・プロセスで、ポートの競合が自動的に検出され、そのコンポーネントに割り当てられた範囲で代替ポートが選択されます。このファイルは、次の場所にあります。

```
$ORACLE_HOME/install/portlist.ini
```

**参照：** 付録 C 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照してください。

## 認証ソフトウェア

多くの Oracle Collaboration Suite コンポーネントに、Web ブラウザが必要です。すべての Oracle Collaboration Suite のインストールで、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle9i データベースが必要です。

## リリース・ノート

Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、各 Oracle Collaboration Suite のインストール CD-ROM の doc ディレクトリの『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』を読んでおくことをお勧めします。Oracle Collaboration Suite ドキュメントの詳細は、[付録 E 「Oracle Collaboration Suite ドキュメント」](#) を参照してください。

## 環境に対するインストール前のタスク

この項の内容は次のとおりです。

- [環境変数の設定](#)
- [ホスト名ファイルの構成](#)
- [UNIX のアカウントおよびグループの作成](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするための Oracle Real Application Clusters](#)
- [Linux への Oracle Real Application Clusters のインストール](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite に対するカーネル・パラメータの構成](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage に対するカーネル・パラメータの構成](#)

## 環境変数の設定

表 2-14 に、環境変数を設定および解除する方法を示します。

表 2-14 環境変数の設定および解除

タスク	C シェル	Bourne/Korn シェル
環境変数の設定	<code>prompt&gt; setenv VARIABLE value</code>	<code>prompt&gt; VARIABLE=value;export VARIABLE</code>
環境変数の解除	<code>prompt&gt; unsetenv VARIABLE value</code>	<code>prompt&gt; unset VARIABLE value</code>

**注意：** 環境パラメータ `LD_LIBRARY_PATH`、`ORACLE_HOME`、`TMP`、`TMPDIR` および `TNS_ADMIN` を設定する必要はありません。

## DISPLAY

Oracle Universal Installer を起動する前に、環境変数 `DISPLAY` を設定し、Oracle Universal Installer を表示する X サーバーを参照します。環境変数 `DISPLAY` のフォーマットは次のとおりです。

```
hostname:display_number.screen_number
```

Oracle Collaboration Suite で Oracle Universal Installer、Web アプリケーションおよび管理ツール用のグラフィックスを適切に作成するには、実行中の X サーバーが必要です。オペレーティング・システムとともにインストールされたフレーム・バッファ用 X サーバーでは、ログインしたまま、フレーム・バッファを常時実行しておく必要があります。この操作を行わない場合は、X Virtual Frame Buffer (XVFB)、Virtual Network Computing (VNC) などの仮想フレーム・バッファを使用する必要があります。

Oracle Universal Installer は、アプリケーションおよび管理ツールのインストール・プロセスで同じ X サーバーを使用するようにこのインスタンスを構成します。この X サーバーを常時実行させるか、またはインストールの完了後に常時実行している他の X サーバーを使用するように Oracle Collaboration Suite を再構成する必要があります。

### 参照：

- 環境変数 `DISPLAY` の詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

## リモート・コンピュータからのインストール

環境変数 `DISPLAY` を設定すると、他のワークステーションから Oracle Universal Installer をリモートで実行できます。Oracle Universal Installer を起動するシステムで、`DISPLAY` をローカル・ワークステーションのシステム名または IP アドレスに設定します。

---

**注意：** PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする PC 用の X エミュレータを使用してインストールを実行できます。PC 用の X エミュレータを PseudoColor ビジュアルを使用するように設定後、Oracle Universal Installer を起動します。カラー・モデルまたはビジュアルの設定を変更する方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

---

Oracle Universal Installer の起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」、「Can't open display」などの Xlib エラーが発生した場合は、ローカル・ワークステーションで表 2-15 に示すコマンドを実行します。

**表 2-15 環境変数 `DISPLAY` のコマンド**

シェル・タイプ	Oracle Universal Installer が実行されているサーバーの場合	ワークステーション上のセッションの場合
C シェル	<code>prompt&gt; setenv DISPLAY hostname:0.0</code>	<code>prompt&gt; xhost +server_name</code>
Bourne/Korn シェル	<code>prompt&gt; DISPLAY=hostname:0.0;export DISPLAY</code>	<code>prompt&gt; xhost +server_name</code>

## ホスト名ファイルの構成

Oracle Universal Installer では、完全修飾されたホスト名の情報がコンピュータの構成ファイルに含まれている必要があります。完全修飾されたホスト名には、システム名およびドメイン名の両方が含まれます。

リストに示すファイルにホスト名の情報が適切に構成されていない場合は、Oracle Collaboration Suite のインストール中にランタイム・エラーが発生する場合があります。

`/etc/hosts` が次のフォーマットであることを確認します。

```
IP_ADDRESS FULLY_QUALIFIED_HOSTNAME SHORT_HOSTNAME ALIASES
```

次に、適切に構成された `/etc/hosts` ファイルの例を示します。

```
148.87.9.44 oasdocs.us.oracle.com oasdocs oracleinstall
```

## 追加ホスト名ファイルの構成 (Solaris)

Solaris にインストールする場合は、次の追加ファイルに完全修飾されたホスト名を構成する必要があります。

- /etc/nodename
- /etc/inet/hosts
- /etc/hostname\*
- /etc/net/ticlts/hosts
- /etc/net/ticots/hosts
- /etc/net/ticotsord/hosts
- /etc/inet/ipnodes

---

---

**注意：** ホスト名は、これらの各ファイルに 1 つ以上含まれる場合があります。ホスト名が出現するたびにドメイン情報を追加する必要があります。例外は /etc/hosts ファイルおよび /etc/inet/hosts ファイルのみです。これらのファイルでは、ドメイン情報を追加する必要があるのは、Internet Protocol (IP) アドレスの直後の 1 回のみです。

---

---

## UNIX のアカウントおよびグループの作成

インストール・プロセスでは、専用の UNIX アカウントおよび複数の専用のグループが必要です。詳細は、次の項を参照してください。

- [Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名](#)
- [Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント](#)
- [権限が付与されたグループの UNIX グループ名](#)

---

---

**注意：** 同じホストに Oracle Collaboration Suite を追加でインストールする場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用する必要があります。

---

---

### Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名

admintool または groupadd ユーティリティを使用して、oinstall などのグループ名を作成します。oinstall グループは、Oracle Universal Installer の oraInventory ディレクトリを所有します。インストールを実行する oracle ユーザー・アカウントでは、oinstall グループをプライマリ・グループに設定する必要があります。

これらのユーティリティの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

## Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント

oracle アカウントは、システムの Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウントです。このアカウントを使用して Oracle Universal Installer を実行する必要があります。

表 2-16 に示すプロパティを持つ oracle アカウントを作成します。

表 2-16 Oracle アカウントのプロパティ

変数	プロパティ
Login Name	アカウントにアクセスする名前を選択します。このマニュアルでは、この名前を oracle アカウントと呼びます。
Group Identifier	このマニュアルでは、oinstall グループを使用します。
Home Directory	他のユーザーのホーム・ディレクトリと一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。
Login Shell	デフォルトのシェルは、C、Bourne または Korn シェルのいずれかです。

**注意：** oracle アカウントは、Oracle ソフトウェアのインストールおよびメンテナンスのみに使用します。Oracle Universal Installer と関係のない目的でこのアカウントを使用しないでください。root を oracle アカウントとして使用しないでください。

## 権限が付与されたグループの UNIX グループ名

Oracle9iAS Infrastructure のインストールおよび Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールには、権限が付与された次の 2 つのグループが必要です。

- データベース・オペレータ・グループ
- データベース管理者グループ

Oracle Collaboration Suite のインストールでは、これらの権限が付与されたグループは必要ありません。

Oracle マニュアルでは、これらのグループをそれぞれ OSOPER および OSDBA と呼びます。データベースでは、オペレーティング・システムの認証にこれらのグループが使用されます。この動作は、データベースが停止し、データベースの認証が使用不可の場合に必要です。

これらのグループの権限は、単一の UNIX グループ、または対応する 2 つの UNIX グループのいずれかに付与されます。権限を付与するグループを選択するには、次の 2 つの方法があります。

- Oracle Universal Installer の起動前に oracle アカウントが dba グループのメンバーである場合、dba には OSOPER および OSDBA の両方の権限が付与されます。
- oracle アカウントが dba グループのメンバーでない場合、Oracle Universal Installer にこれらの権限を付与するグループ名を入力するためのプロンプトが表示されます。

表 2-17 に、OSOPER および OSDBA グループの権限を示します。

**表 2-17 OSOPER および OSDBA グループの権限**

グループ	権限
OSOPER	ユーザーに STARTUP、SHUTDOWN、ALTER DATABASE OPEN/MOUNT、ALTER DATABASE BACKUP、ARCHIVE LOG および RECOVER の実行を許可します。また、RESTRICTED SESSION 権限が含まれます。
OSDBA	ADMIN OPTION および OSOPER ロールを含むすべてのシステム権限が含まれます。CREATE DATABASE および時間ベースのリカバリを許可します。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールするための Oracle Real Application Clusters

Oracle Real Application Clusters は、Oracle Collaboration Suite Information Storage がインストールされている場合のみサポートされ、個別にライセンスが必要です。Oracle Real Application Clusters をインストールするには、次のインストール前手順を実行します。

### Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する手順

1. root ユーザーとしてログインします。
2. クラスタ内のすべてのノードの /etc/group ファイルに OSDBA グループが定義されていることを確認します。単一のデータベースにアクセスする UNIX クラスタのすべてのノードで、OSDBA グループの名前と数、および OSOPER グループ（指定する場合）が同じである必要があります。OSDBA グループのデフォルトの UNIX グループ名は、dba です。

3. クラスタの各ノード上に `oracle` アカウントを作成し、このアカウントを次のとおり設定します。
  - `ORAINVENTORY` グループをプライマリ・グループにします。
  - `dba` グループをセカンダリ・グループにします。
  - Oracle ソフトウェアのインストールおよび更新のみに使用します。
  - リモート・ディレクトリへの書込み権限を付与します。
4. Oracle ソフトウェアのディレクトリ構造の最上位として機能するように各ノード上にマウント・ポイント・ディレクトリを作成し、このディレクトリを次のとおり設定します。
  - 各ノード上のマウント・ポイントに第1ノードのマウント・ポイントと同じ名前を設定します。
  - `oracle` アカウントに、読み込み、書込みおよび実行権限を付与します。
5. `oracle` アカウントの `.rhosts` ファイルまたは `/etc/hosts.equiv` ファイルのいずれかに、Oracle Universal Installer を実行するノード上のクラスタに含まれるすべてのノード（ローカル・ノードを含む）のエントリを追加し、ユーザー等価関係を設定します。
6. すべてのノード上で `oracle` ユーザーとしてリモート・コマンドを実行し、ユーザー等価関係を確認します。たとえば、次のとおり入力します。
  - Solaris および Linux:

```
prompt> rsh another_host pwd
```
  - HP:

```
prompt> remsh another_host pwd
```
7. すべてのノード間で小さいファイルをコピーして、RCP 等価関係を確認します。たとえば、次のとおり入力します。

```
prompt> rcp /tmp/dummy_file another_host:/tmp/dummy_file
```
8. これは、Oracle Universal Installer によってクラスタのすべての選択されたノード上に Oracle ソフトウェアをインストールするために必要な手順です。

### Solaris、HP または Linux に Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する追加手順

Solaris、HP または Linux に Oracle Real Application Clusters をインストールする場合、root ユーザーとして追加手順を実行する必要があります。ご使用のプラットフォームに該当する項を参照してください。

## 追加の root ユーザー情報 (Solaris)

1. Oracle Collaboration Suite Information Storage CD-ROM セットのディスク 1 に含まれている、Sun Cluster ソフトウェア用の Oracle パッチを適用します。パッチをインストールするには、CD-ROM の racpatch ディレクトリに含まれている README.udlm ファイルに記載された説明に従ってください。このパッチによって、Oracle Real Application Clusters をインストールする前に必要な Cluster Membership Monitor (CMM) が提供されます。
2. Cluster Management Software を再起動し、CMM を起動します。

- a. 最初のノードで次のコマンドを入力します。

```
prompt> cd /opt/SUNWcluster/bin
prompt> scadmin startcluster cluster_name
```

- b. クラスタの他の各ノードで次のコマンドを実行します。

```
prompt> cd /opt/SUNWcluster/bin
prompt> scadmin startnode cluster_name
```

**参照：** scadmin コマンドの詳細は、Sun Cluster 3.0 のドキュメントを参照してください。

## 追加の root ユーザー情報 (HP)

次のコマンドを入力し、MC/ServiceGuard を起動します。

```
prompt> /usr/sbin/cmruncl
```

### 参照：

- Oracle Real Application Clusters の構成の詳細は、HP 社の『Configuring OPS Clusters with MC/ServiceGuard OPS Edition』を参照してください。
- Hyper Messaging Protocol (HMP) を使用した Oracle Real Application Clusters のメモリー要件、インストールおよびインストール後に発生するいくつかの問題については、Oracle Technology Network で入手可能な『Oracle9i Release Notes Release 2 (9.2.0.1.0) for HP 9000 Series HP-UX』(部品番号 A97350-01) を参照してください。

## 追加の root ユーザー情報 (Linux)

1. CONFIG\_WATCHDOG\_NOWAYOUT パラメータを Y に設定します。このパラメータは、ほとんどのカーネルで、デフォルトで Y に設定されています。詳細は、Linux の共通ドキュメントを参照してください。
2. 適切なマージンを設定して watchdog モジュールをロードします。

```
insmod softdog soft_margin=10
```

**参照:** `soft_margin` の値を計算する方法については、Oracle Technology Network で入手可能な『Oracle9i Administrator's Reference Release 2 (9.2.0.1.0) for UNIX Systems: AIX-Based Systems, Compaq Tru64 UNIX, HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Sun Solaris』(部品番号 A97297-01) を参照してください。

3. 各ノード上の `/etc/hosts` ファイルに必要な情報を追加します。次の情報 (ローカル・ノードのパブリック IP アドレスのエントリおよびローカル・ノードを含む各ノードのプライベート IP アドレスのエントリ) が示されている必要があります。

```
public_IP_address local_hostname_with_domain local_hostname_alias
private_IP_address cluster_node_private_hostname
private_IP_address cluster_node1_private_hostname
private_IP_address cluster_node2_private_hostname
.....
```

4. 共有ストレージに 4MB の RAW パーティションを作成します。このパーティションは、Cluster Manager によって quorum パーティションとして使用されます。クラスタの各サーバー上の quorum パーティションを、`/dev/raw1` などの同じデバイスにバインドします。

## Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に oracle ユーザーとして実行する手順

1. oracle アカウントとしてログインします。  
HP でインストール前手順を実行する場合は、次のコマンドを入力し、MC/ServiceGuard が実行していることを確認します。  

```
prompt> /usr/sbin/cmviewcl
```
2. Cluster Membership Monitor (CMM) が実行されていることを確認します。表 2-18 に、各プラットフォームに対する適切なコマンドを示します。

**表 2-18 Cluster Membership Monitor が実行されていることを確認するためのコマンド**

プラットフォーム	コマンド
Solaris	<pre>prompt&gt; ps -ef   grep clustd</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プロセス・リストに <code>clustd</code> プログラムが表示された場合は、<code>clustd</code> が実行されています。</li> <li>■ プロセス・リストに <code>clustd</code> プログラムが表示されない場合は、Cluster Membership Monitor を再起動します。</li> </ul>
HP	<pre>prompt&gt; /usr/sbin/cmviewcl</pre>

表 2-18 Cluster Membership Monitor が実行されていることを確認するためのコマンド (続き)

プラットフォーム	コマンド
Linux	<pre>prompt&gt; ps -efl   egrep 'watchdogd   oracm'</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プロセス・リストにすべての watchdogd および oracm プログラムが表示された場合は、Oracle Cluster Management Software が実行されています。</li> <li>■ プロセス・リストに表示されない watchdogd および oracm プログラムが存在する場合は、Oracle Cluster Management Software を再起動します。</li> </ul>

3. クラスタの各ノードへのリモート・ログイン (rlogin) を実行し、oracle アカウントのユーザー等価関係を確認します。

パスワードを入力するためのプロンプトが表示された場合、oracle アカウントにはユーザー等価関係が存在しません。クラスタに含まれるすべてのノード上の oracle ユーザーに同じ属性が付与されていることを確認します。Oracle Universal Installer では、rcp コマンドを使用して、ユーザー等価関係が存在しないリモート・ディレクトリに Oracle 製品をコピーすることはできません。

ユーザー等価関係を設定していない場合は、2-20 ページの「[Oracle Real Application Clusters をインストールする場合に root ユーザーとして実行する手順](#)」に示す手順 6 を実行する必要があります。

4. データベース・サーバー構成の情報リポジトリとして、1 つ以上の共有構成ファイルを作成します。プラットフォームで Cluster File System がサポートされている場合、この手順はスキップします。

UNIX プラットフォーム上で、Server Management (SRVM) 構成に 100MB 以上の共有 RAW デバイスを作成します。Oracle Universal Installer の「共有構成ファイル名」ページに、この共有ファイルの名前を入力するためのプロンプトが表示されます。または、環境変数 SRVM\_SHARED\_CONFIG を、Oracle Universal Installer によって構成ファイルの取出しが可能な共有 RAW デバイスのフルパス名に設定します。

**参照：** 共有構成ファイルの設定の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。

## Linux への Oracle Real Application Clusters のインストール

Oracle Real Application Clusters をインストールする前に、Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD-ROM に付属の Oracle Cluster Manager をインストールおよび構成します。Oracle Universal Installer を使用して Oracle Cluster Manager をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Universal Installer を起動します。

2. Oracle Real Application Clusters オプションのインストール先の Oracle ホーム・ディレクトリを入力します。
3. 「使用可能な製品」画面から製品名「**Oracle Cluster Manager**」を選択します。
4. 「Private Node Names Information」画面でプライベート・ノード名のリストを入力します。
5. 「Public Node Names Information」画面でパブリック・ノード名のリストを入力します。
6. Watchdog タイマーの値を入力します。

これによって、ノードに **Oracle Cluster Manager** がインストールされます。インストールが完了すると、インストールで選択されたクラスタのすべてのノード上で、root ユーザーとして `cmstart.sh` スクリプトを実行するかどうかを確認する画面が表示されます。このスクリプトを実行すると、すべてのノード上で **Oracle Cluster Manager** が起動されます。

Oracle Cluster Manager のインストール後、Oracle Universal Installer を再起動し、必要に応じて、他の Oracle コンポーネントをインストールします。

**参照：** Oracle Cluster Manager を起動および構成する方法の詳細は、『Oracle9i Administrator's Reference Release 2 (9.2.0.1.0)』を参照してください。

## Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite に対するカーネル・パラメータの構成

Oracle9iAS Metadata Repository のインストールおよび Oracle Collaboration Suite のインストールでは、システムのカーネル・パラメータを構成する必要があります。この要件を満たすことは、本番環境に特に重要です。カーネル・パラメータの設定を再確認し、Oracle9iAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory の要件を満たしていることを確認します。これらの要件を満たしていない場合、インストール中のエラーまたはインストール後の操作エラーが発生する場合があります。

カーネルの設定を変更した場合、カーネルの変更を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。

ご使用のプラットフォームに該当するカーネル・パラメータの表を参照してください。

- [カーネル・パラメータ設定 \(Solaris\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(HP\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(Linux\)](#)

---



---

**注意：** これらのカーネル・パラメータ設定に関する推奨項目は、環境に Oracle Calendar が構成されていないことを前提としています。Oracle Calendar を構成する場合、カーネル・パラメータ設定の一部を変更する必要があります。詳細は、『Oracle Calendar Server 管理者ガイド』の付録 C を参照してください。

---



---

## カーネル・パラメータ設定 (Solaris)

Solaris の場合、`ipcs` コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーおよびセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

バックアップ・コピーの作成後、`vi` などのテキスト・エディタを使用して、`/etc/system` ファイルのカーネル・パラメータ設定を変更します。すでに他のプログラム用のカーネルを Oracle9i で必要なレベル以上に変更している場合は、その設定を変更しないでください。レベルが低すぎる場合は、表に示すレベル以上になるように変更します。設定を変更した場合は、`/etc/system` ファイルを保存し、システムを再起動します。

### 例 2-1 /etc/system への設定例 (Solaris)

```
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10

set semsys:seminfo_semmni=100
set semsys:seminfo_semmns=256
set semsys:seminfo_sems1=256
set semsys:seminfo_semmu=4096

set rlim_fd_max=1024
set rlim_fd_cur=1024
```

表 2-19 に、カーネルおよびデフォルト設定を示します。

**表 2-19 カーネル・パラメータ設定 (Solaris)**

カーネル	設定	定義
<code>rlim_fd_cur</code>	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの数。
<code>rlim_fd_max</code>	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの最大数。
<code>semmni</code>	100	システム全体のセマフォ・セットの最大数。

表 2-19 カーネル・パラメータ設定 (Solaris) (続き)

カーネル	設定	定義
semms	256	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールのみに適用される最小推奨値です。  semms パラメータは、各 Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍およびデータベース数の 10 倍を加えた値に設定する必要があります。
semms1	256	初回のインストールのみに適用される最小推奨値。semms1 パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの initsid.ora PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
shmmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。4GB = 4294967295 バイトです。
shmmn	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。
shmmni	100	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	10	1 つのプロセスでアタッチ可能な共有メモリー・セグメントの最大数。

## カーネル・パラメータ設定 (HP)

HP の場合、System Administrator's Menu (SAM) を使用して、アプリケーションに必要な HP カーネルを構成できます。表 2-20 に示すパラメータは、HP 上で Oracle Collaboration Suite の一般的なインスタンスを実行する一般ユーザーのための推奨値です。アプリケーションの要件および作業中のシステムの種類に応じて値を変更する必要がある場合があります。表 2-20 を参照し、システムの共有メモリーおよびセマフォのカーネル・パラメータが Oracle Collaboration Suite 用に正しく設定されているかどうかを確認します。ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

表 2-20 に、HP 上の単一のデータベース・インスタンスで Oracle Collaboration Suite を実行するための推奨値を示します。

表 2-20 カーネル・パラメータ設定 (HP)

カーネル	パラメータ設定	定義
KSI_ALLOC_MAX	(NPROC * 8)	割当て可能なキュー信号のシステム全体での制限。

表 2-20 カーネル・パラメータ設定 (HP) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
MAX_THREAD_PROC	256	各プロセスに使用可能なカーネル・スレッドの最大数。アプリケーションの要求に応じて、値を増やす必要がある場合があります。デフォルト値または小さい値に設定すると、特定のアプリケーションでメモリー不足エラーが発生する場合があります。
MAXDSIZ	1073741824 バイト	32 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
MAXDSIZ_64	2147483648 バイト	64 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
MAXSSIZ	134217728 バイト	32 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ (バイト)。
MAXSSIZ_64BIT	1073741824	64 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ (バイト)。
MAXSWAPCHUNKS	16384	スワップ・チャンクの最大数。ここで、SWCHUNK はスワップ・チャンク・サイズ (1KB ブロック) です。SWCHUNK は、デフォルトで 2048 です。システム上に構成可能なスワップ領域の最大量を指定します。
MAXUPRC	$((NPROC * 9) / 10)$	ユーザー・プロセスの最大数。
MSGMAP	$(MSGTQL + 2)$	メッセージ・マップ・エントリの最大数。
MSGMNI	NPROC	メッセージ・キュー識別子の数。
MSGSEG	32767	メッセージに使用可能なセグメントの数。
MSGTQL	NPROC	メッセージ・ヘッダーの数。
NCALLOUT	$(NPROC + 16)$	保留中のタイムアウトの最大数。
NCSIZE	$((8 * NPROC + 2048) + VX\_NCSIZE)$	i ノードに必要な Directory Name Lookup Cache (DNLC) 領域。VX_NCSIZE は、デフォルトで 1024 です。
NFILE	$(15 * NPROC + 2048)$	オープン・ファイルの最大数。
NFLOCKS	4096	システム上で使用可能なファイル・ロックの最大数。
NINODE	$(8 * NPROC + 2048)$	オープン i ノードの最大数。

表 2-20 カーネル・パラメータ設定 (HP) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
NKTHREAD	$((NPROC * 7) / 4) + 16$	システムによってサポートされるカーネル・スレッドの最大数。
NPROC	4096	プロセスの最大数。
SEMMAP	$(SEMMNI + 2)$	セマフォ・マップ・エントリの最大数。
SEMMNI	4096	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
SEMMNS	$(SEMMNI * 2)$	システム上のセマフォの最大数。SEMMNS のデフォルト値は 128 ですが、ほとんどの場合、Oracle Collaboration Suite ソフトウェアには小さすぎます。
SEMMNU	$(NPROC - 4)$	セマフォの UNDO 構造の数。
SEMVMX	32768	セマフォの最大値。
SHMMAX	使用可能な物理メモリー	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。SHMMAX は、共有メモリー・セグメントに SGA 全体を保持することが可能な値を設定する必要があります。設定値が小さい場合、複数の共有メモリー・セグメントが作成され、パフォーマンスが低下する場合があります。
SHMMNI	512	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
SHMSEG	32	1 つのプロセスでアタッチ可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
VPS_CEILING	64	システムで選択されたページ・サイズの最大値 (KB)。

## カーネル・パラメータ設定 (Linux)

Linux の場合、`ipcs` コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびこれらの識別番号と所有者のリストを取得します。`/proc` ファイル・システムを使用して、カーネル・パラメータを変更できます。`/proc` ファイル・システムを使用してカーネル・パラメータを変更するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. `/proc/sys/kernel` ディレクトリに移動します。

3. `cat` または `more` ユーティリティを使用して、`sem` ファイルの現行のセマフォ・パラメータ値を確認します。たとえば、`cat` ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat sem
```

出力に、`SEMMSL`、`SEMMNS`、`SEMOPM` および `SEMMNI` パラメータの値が、この順序で示されます。出力の表示の例は次のとおりです。

```
250 32000 32 128
```

4. 次のコマンド構文を使用して、パラメータ値を変更します。

```
prompt> echo SEMMSL_value SEMMNS_value SEMOPM_value SEMMNI_value > sem
```

前述の例に示す入力順序で、パラメータ変数をシステムの値に置き換えます。次に例を示します。

```
prompt> echo 100 32000 100 100 > sem
```

5. `cat` または `more` ユーティリティを使用して、現行の共有メモリー・パラメータを確認します。たとえば、`cat` ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat shared_memory_parameter
```

前述の例で、`shared_memory_parameter` 変数は、`SHMMAX` または `SHMMNI` パラメータのいずれかになります。パラメータ名は、小文字で入力する必要があります。

6. `echo` ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。

たとえば、`SHMMAX` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 2147483648 > shmmax
```

たとえば、`SHMMNI` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 4096 > shmmni
```

たとえば、`SHMALL` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 2097152 > shmall
```

7. システムの起動中にこれらの値を初期化するスクリプトを作成し、システムの初期化ファイルにこのスクリプトを含めます。

**参照：** スクリプト・ファイルおよび初期化ファイルの詳細は、システム・ベンダーのドキュメントを参照してください。

8. 次のコマンドを使用して、File Handles を設定します。

```
prompt> echo 65536 > /proc/sys/fs/file-max
prompt> ulimit -n 65536
```

9. Sockets を /proc/sys/net/ipv4/ip\_local\_port\_range に設定します。

```
prompt> echo 1024 65000 > /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
```

10. ulimit -u を使用して、Process を設定します。これによって、各ユーザーのプロセス数を取得できます。次に例を示します。

```
ulimit -u 16384
```

表 2-21 に、Linux 上の単一のデータベース・インスタンスで Oracle Collaboration Suite を実行するために必要な最小値を示します。

表 2-21 カーネル・パラメータ設定 (Linux)

カーネル	パラメータ設定	定義
SEMMNI	100	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
SEMMNS	256	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールのみに適用される最小推奨値です。SEMMNS パラメータは、各 Oracle データベースの <code>initSID.ora PROCESSES</code> パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍およびデータベース数の 10 倍を加えた値に設定する必要があります。
SEMOPM	100	1 回の <code>semop</code> のコールに対する操作の最大数。
SEMMSL	100	初回のインストールのみに適用される、各 ID に対するセマフォの最小推奨数。SEMMSL パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの <code>initSID.ora PROCESSES</code> パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
SHMMAX	2147483648	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。SMP カーネルの場合は、2GB です。推奨サイズは、RAM の半分のサイズです。
SHMMIN	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。

表 2-21 カーネル・パラメータ設定 (Linux) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
SHMMNI	100	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
SHMSEG	4096	1つのプロセスでアタッチ可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
SHMVMX	32767	セマフォの最大値。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage に対するカーネル・パラメータの構成

Oracle Collaboration Suite Information Storage は、プロセス間通信のために、共有メモリー、スワップ・メモリー、セマフォなどの UNIX リソースを広範囲にわたって使用します。パラメータの設定が Oracle Collaboration Suite Information Storage に対して不十分な場合は、インストールおよびインスタンスの起動中に問題が発生します。メモリーに格納可能なデータの量が多いほど、データベースの動作が速くなります。また、UNIX カーネルでメモリー内のデータをメンテナンスすると、ディスクの I/O アクティビティが減少します。

カーネル・パラメータの設定を再確認し、Oracle Collaboration Suite Information Storage の要件を満たしていることを確認します。要件を満たしていない場合は、インストール中にエラーが発生するか、またはインストール後に操作エラーが発生する場合があります。Oracle Collaboration Suite Information Storage の一般的な環境に対して推奨されるカーネル・パラメータ要件を次に示します。カーネル・パラメータを、アプリケーションの要件を満たすレベルにチューニング済の場合は、継続してそれらの値を使用します。カーネル設定を変更する場合は、カーネルの変更を有効にするためにシステムを再起動する必要があります。

ご使用のプラットフォームに該当するカーネル・パラメータの表を参照してください。

- [カーネル・パラメータ設定 \(Solaris\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(HP\)](#)
- [カーネル・パラメータ設定 \(Linux\)](#)

### カーネル・パラメータ設定 (Solaris)

Solaris の場合、`ipcs` コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーおよびセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

バックアップ・コピーの作成後、`vi` などのテキスト・エディタを使用して、`/etc/system` ファイルのカーネル・パラメータ設定を変更します。すでに他のプログラム用のカーネルを Oracle Collaboration Suite Information Storage で必要なレベル以上に変更している場合は、その設定を変更しないでください。レベルが低すぎる場合は、表に示すレベル以上になるように変更します。設定を変更した場合は、`/etc/system` ファイルを保存し、システムを再起動します。

**例 2-2 /etc/system への設定例 (Solaris)**

```

set shmsys:shminfo_shrmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shrmin=1
set shmsys:shminfo_shrmmi=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10

set semsys:seminfo_semmni=100
set semsys:seminfo_semms=256
set semsys:seminfo_semmsl=256
set semsys:seminfo_semmnu=4096

set rlim_fd_max=1024
set rlim_fd_cur=1024

```

表 2-22 に、Solaris 上の単一のデータベース・インスタンスで Oracle Collaboration Suite Information Storage を実行するために必要な最小値を示します。

**表 2-22 カーネル・パラメータ設定 (Solaris)**

カーネル	パラメータ設定	定義
rlim_fd_cur	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの数。
rlim_fd_max	1024	各プロセス用のオープン・ファイルの最大数。
semmni	100	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
semms	1024	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールのみに適用される最小推奨値です。  semms パラメータは、各 Oracle データベースの <code>initsid.ora</code> PROCESSES パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍およびデータベース数の 10 倍を加えた値に設定する必要があります。
semmsl	256	初回のインストールのみに適用される最小推奨値。semmsl パラメータは、システム上に存在するすべての Oracle データベースの <code>initsid.ora</code> PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値に設定する必要があります。
shrmax	4294967295	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。 4GB = 4294967295 バイトです。
shrmin	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。

表 2-22 カーネル・パラメータ設定 (Solaris) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
shmmni	100	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
shmseg	10	1つのプロセスでアタッチ可能な共有メモリー・セグメントの最大数。

## カーネル・パラメータ設定 (HP)

HP の場合、System Administrator's Menu (SAM) を使用して、アプリケーションに必要な HP カーネルを構成できます。表 2-23 に示すパラメータは、HP 上で Oracle Collaboration Suite Information Storage の一般的な単一のデータベース・インスタンスを実行する一般ユーザーのための推奨値です。アプリケーションの要件および作業中のシステムの種類に基づいて値を変更する必要がある場合があります。次の表を参照して、システムの共有メモリーおよびセマフォのカーネル・パラメータが Oracle Collaboration Suite Information Storage 用に正しく設定されているかどうかを確認します。ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリーとセマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

表 2-23 に示すパラメータは、HP 上の単一のデータベース・インスタンスで Oracle Collaboration Suite Information Storage を実行する場合の推奨値です。

表 2-23 カーネル・パラメータ設定 (HP)

カーネル	パラメータ設定	定義
KSI_ALLOC_MAX	(NPROC * 8)	割当て可能なキュー信号のシステム全体での制限。
MAX_THREAD_PROC	256	各プロセスに使用可能なカーネル・スレッドの最大数。アプリケーションの要求に応じて、値を増やす必要がある場合があります。デフォルト値または小さい値に設定すると、特定のアプリケーションでメモリー不足エラーが発生する場合があります。
MAXDSIZ	1073741824 バイト	32 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
MAXDSIZ_64	2147483648 バイト	64 ビット・システムでの最大データ・セグメント・サイズ (バイト)。この値の設定値が小さすぎると、プロセスでメモリー不足が発生する場合があります。
MAXSSIZ	134217728 バイト	32 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ (バイト)。

表 2-23 カーネル・パラメータ設定 (HP) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
MAXSSIZ_64BIT	1073741824	64 ビット・システムでの最大スタック・セグメント・サイズ (バイト)。
MAXSWAPCHUNKS	16384	スワップ・チャンクの最大数。ここで、SWCHUNK はスワップ・チャンク・サイズ (1KB ブロック) です。SWCHUNK は、デフォルトで 2048 です。システム上に構成可能なスワップ領域の最大量を指定します。
MAXUPRC	$((NPROC * 9) / 10)$	ユーザー・プロセスの最大数。
MSGMAP	$(MSGTQL + 2)$	メッセージ・マップ・エントリの最大数。
MSGMNI	NPROC	メッセージ・キュー識別子の数。
MSGSEG	32767	メッセージに使用可能なセグメントの数。
MSGTQL	NPROC	メッセージ・ヘッダーの数。
NCALLOUT	$(NPROC + 16)$	保留中のタイムアウトの最大数。
NCSIZE	$(NPROC + 16) + VX\_NCSIZE)$	i ノードに必要な Directory Name Lookup Cache (DNLC) 領域。 VX_NCSIZE は、デフォルトで 1024 です。
NFILE	$(NPROC * 8)$	オープン・ファイルの最大数。
NFLOCKS	4096	システム上で使用可能なファイル・ロックの最大数。
NINODE	$(NPROC + 16)$	オープン i ノードの最大数。
NKTHREAD	$((NPROC * 7) / 4) + 16)$	システムによってサポートされるカーネル・スレッドの最大数。
NPROC	4096	プロセスの最大数。
SEMMAP	$(SEMMNI + 2)$	セマフォ・マップ・エントリの最大数。
SEMMNI	4096	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
SEMMNS	$(SEMMNI * 2)$	システム上のセマフォの最大数。SEMMNS のデフォルト値は 128 ですが、ほとんどの場合、Oracle Collaboration Suite Information Storage には小さすぎます。
SEMMNU	$(NPROC - 4)$	セマフォの UNDO 構造の数。
SEMVMX	32768	セマフォの最大値。

表 2-23 カーネル・パラメータ設定 (HP) (続き)

カーネル	パラメータ設定	定義
SHMMAX	使用可能な物理メモリー	1つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。  SHMMAXは、共有メモリー・セグメントにSGA全体を保持することが可能な値を設定する必要があります。設定値が小さい場合、複数の共有メモリー・セグメントが作成され、パフォーマンスが低下する場合があります。
SHMMNI	512	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
SHMSEG	32	1つのプロセスでアタッチ可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
VPS_CEILING	64	システムで選択されたページ・サイズの最大値 (KB)。

## カーネル・パラメータ設定 (Linux)

Linuxの場合、`ipcs` コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリー・セグメントとセマフォ・セット、およびこれらの識別番号と所有者のリストを取得します。

`/proc` ファイル・システムを使用してカーネル・パラメータを変更するには、次の手順を実行します。

1. `root` ユーザーとしてログインします。
2. `/proc/sys/kernel` ディレクトリに移動します。
3. `cat` または `more` ユーティリティを使用して、`sem` ファイルの現行のセマフォ・パラメータ値を確認します。たとえば、`cat` ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat sem
```

出力に、`SEMMSL`、`SEMMNS`、`SEMOPM` および `SEMMNI` パラメータの値が、この順序で示されます。出力の表示の例は次のとおりです。

```
250 32000 32 128
```

前述の出力例で、250は`SEMMSL`パラメータの値、32000は`SEMMNS`パラメータの値、32は`SEMOPM`パラメータの値、128は`SEMMNI`パラメータの値を示します。

4. 次のコマンド構文を使用して、パラメータ値を変更します。

```
prompt> echo SEMMSL_value SEMMNS_value SEMOPM_value SEMMNI_value > sem
```

前述の例に示す入力順序で、パラメータ変数をシステムの値に置き換えます。次に例を示します。

```
prompt> echo 100 32000 100 100 > sem
```

5. `cat` または `more` ユーティリティを使用して、現行の共有メモリー・パラメータを再確認します。たとえば、`cat` ユーティリティを使用して、次のコマンドを入力します。

```
prompt> cat shared_memory_parameter
```

前述の例で、`SHARED_MEMORY_PARAMETER` 変数は、`SHMMAX` または `SHMMNI` パラメータのいずれかになります。パラメータ名は、小文字で入力する必要があります。

6. `echo` ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。たとえば、`SHMMAX` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 2147483648 > shmmax
```

7. `echo` ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。たとえば、`SHMMNI` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 4096 > shmmni
```

8. `echo` ユーティリティを使用して、共有メモリー・パラメータを変更します。たとえば、`SHMALL` パラメータを変更するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> echo 2097152 > shmall
```

9. システムの起動中にこれらの値を初期化するスクリプトを作成し、システムの `init` ファイルにこのスクリプトを含めます。

---

---

**参照：** スクリプト・ファイルおよび `init` ファイルの詳細は、システム・ベンダーのドキュメントを参照してください。

---

---

10. `ulimit -n` および `/proc/sys/fs/file-max` を使用して、File Handles を設定します。

```
prompt> echo 65536 > /proc/sys/fs/file-max
prompt> ulimit -n 65536
```

11. Sockets を `/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range` に設定します。

```
prompt> echo 1024 65000 > /proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
```

12. `ulimit -u` を使用して、`Process limit` を設定します。これによって、各ユーザーのプロセス数を取得できます。

```
ulimit -u 16384
```

表 2-24 に、Linux 上の単一のデータベース・インスタンスで Oracle Collaboration Suite Information Storage を実行するために必要な最小値を示します。

**表 2-24 カーネル・パラメータ設定 (Linux)**

カーネル	パラメータ設定	定義
SEMMNI	100	システム全体のセマフォ・セットの最大数。
SEMMNS	256	システム上のセマフォの最大数。この設定値は、初回のインストールのみに適用される最小推奨値です。  SEMMNS パラメータは、各 Oracle データベースの <code>initsid.ora PROCESSES</code> パラメータの値を合計し、その値にこのパラメータの最大値の 2 倍およびデータベース数の 10 倍を加えた値に設定する必要があります。
SEMOPM	100	1 回の <code>semop</code> のコールに対する操作の最大数。
SEMMSL	100	初回のインストールのみに適用される最小推奨値。
SHMMAX	2147483648	1 つの共有メモリー・セグメントの最大許容サイズ。 SMP カーネルの場合は、2GB です。推奨サイズは、RAM の半分のサイズです。
SHMMIN	1	単一の共有メモリー・セグメントの最小許容サイズ。
SHMMNI	100	システム全体の共有メモリー・セグメントの最大数。
SHMSEG	4096	1 つのプロセスでアタッチ可能な共有メモリー・セグメントの最大数。
SHVMX	32767	セマフォの最大値。

この章では、特定の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをアップグレードおよびダウングレードする方法、およびそれらのコンポーネント間で発生可能性がある競合について説明します。また、Oracle Collaboration Suite コンポーネントで既存の Oracle9i データベースを使用する場合のデータベースのチューニングについても説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [配置方法](#)
- [アップグレード](#)
- [ダウングレード](#)
- [データベースのチューニング](#)

## 配置方法

この項では、次の3つの Oracle Collaboration Suite インストールの様々な配置方法を説明し、配置に対する推奨項目を示します。

- [Oracle9iAS Infrastructure の配置](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置](#)
- [Oracle Collaboration Suite の配置](#)
- [配置に対する推奨項目および考慮事項](#)

**参照：** Oracle9i Application Server と Oracle Collaboration Suite の互換性の詳細は、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』の付録 A の「Oracle9i Application Server と Oracle Collaboration Suite の互換性」を参照してください。

### Oracle9iAS Infrastructure の配置

通常、Oracle9iAS Infrastructure の配置では、1つ以上の Oracle Management Server がインストールされ、ネットワーク内に1つの Oracle9iAS Single Sign-On インスタンスおよび1つの Oracle Internet Directory インスタンスが含まれます。

別々のホスト上に Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On を構成する場合、インストール中に表示される「構成オプションの選択」画面で次の手順を実行します。

1. インストール中に、最初のホスト (Host 1) 上の Oracle Internet Directory の構成を選択し、Oracle9iAS Single Sign-On の構成を選択解除します。
2. インストール中に、2番目のホスト (Host 2) 上の Oracle9iAS Single Sign-On の構成を選択し、Oracle Internet Directory の構成を選択解除します。
3. インストール中に、Host 2 上の Oracle9iAS Single Sign-On の構成が Host 1 上の Oracle Internet Directory の構成を指すように設定します。

複数のホスト上に Oracle Internet Directory をインストールしてディレクトリ・レプリケーション・ネットワークを構成する場合は、Oracle Internet Directory インスタンスのいずれか1つのみで Oracle9iAS Single Sign-On を構成します。Oracle Internet Directory の残りのインスタンスは、Oracle9iAS Single Sign-On の構成に関連付けしないでください。

**参照：** 次の URL で入手可能な『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

## Oracle9iAS Infrastructure の多言語サポート

Oracle9iAS Infrastructure の多言語サポートを有効にするには、次の手順を実行して、Oracle9iAS Infrastructure を構成します。

1. インストール開始時に、すべての言語変換をインストールします。
2. インストール中に、UTF8 をインフラストラクチャ・データベースのキャラクタ・セットとして選択します。
3. インストール後に、Oracle9iAS Single Sign-On の言語変換を有効にします。

### 参照：

- 2-13 ページの「[多言語サポート](#)」を参照してください。
- すべての言語変換のインストールについては、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。
- 5-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」を参照してください。
- Oracle9iAS Single Sign-On の言語変換の有効化については、『[Oracle Collaboration Suite リリース・ノート](#)』を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置

顧客データとインタラクトするいくつかの Oracle Collaboration Suite コンポーネントでは、メタデータ・スキーマの格納に情報ストレージ・データベースが使用されます。同じタイプの複数の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールする場合、同じ情報ストレージ・データベースまたは異なる情報ストレージ・データベースを使用できます。単一のデータベース・インスタンスで、異なる Oracle Collaboration Suite コンポーネントのメタデータ・スキーマおよびデータを保持できます。

Oracle Email は、Oracle9i リリース 2 (9.2) 以上のデータベースに接続する必要があります。Oracle Files は、Oracle9i リリース 1 (9.0.1) 以上のデータベースに接続する必要があります。**Email Store** には、Oracle Email に必要なすべてのコンポーネントが含まれます。

**Files Store** には、Oracle Files に必要なすべてのコンポーネントが含まれます。既存のデータベースを使用する場合は、データベースが Oracle Email または Oracle Files の要件を満たしていることを確認します (3-23 ページの「[データベースのチューニング](#)」を参照)。

また、Oracle Files では、Oracle Files のコンテンツ承認機能およびコンテンツ・ルーティング機能にアクセスするために、Oracle Workflow が必要です。3-6 ページの「[Oracle Files と Oracle Workflow 2.6.2 の依存性](#)」を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage の多言語サポート

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースの多言語サポートを有効にするには、インストールの開始時に、すべての言語変換をインストールしてデータベースを構成します。インストール中に、UTF8 キャラクタ・セットが自動的に設定されます。

### 参照：

- 2-13 ページの「[多言語サポート](#)」を参照してください。
- すべての言語変換のインストールについては、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。
- 5-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール](#)」を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite の配置

すべての Oracle Collaboration Suite 中間層のインストールには、Oracle9iAS Infrastructure が必要です。Oracle Collaboration Suite を使用するには、Oracle Collaboration Suite CD Pack に含まれる Oracle9iAS Infrastructure を使用するか、または既存の Oracle9iAS Infrastructure バージョン 9.0.2.0.0 または 9.0.2.0.1 をアップグレードします。

Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をネットワーク上にインストールおよび構成している必要があります。また、すべての中間層アプリケーションに別々の Oracle9iAS Metadata Repository を使用することをお勧めします。既存の Oracle9iAS Infrastructure が存在する場合は、3-12 ページの「[アップグレード](#)」を参照してください。

すべての Oracle Collaboration Suite 中間層アプリケーションで同じ Oracle9iAS Metadata Repository を共有できますが、通常は、Oracle Internet Directory と同じ Oracle9iAS Metadata Repository は共有しないでください。

同じホスト上に単一または複数の Oracle Collaboration Suite 中間層のインスタンスをインストールできます。Oracle Email では、単一のホストで構成できるのは一度のみであることに注意してください。ただし、Oracle Collaboration Suite 中間層を Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームまたは既存の Oracle9iAS 中間層の Oracle ホームにインストールすることはできません。

Oracle Collaboration Suite は、Oracle9iAS Portal および Oracle Ultra Search を含む複数の中間層アプリケーションで構成されます。Oracle9iAS Portal および Oracle Ultra Search は、次のいずれかに接続できます。

- Oracle9i データベース
- Oracle9iAS Metadata Repository (通常、Oracle Internet Directory とは共有されません)

Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されるか、または Oracle9i データベースに格納できます。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle Internet Directory で使用されるリポジトリ以外の Oracle9iAS Metadata Repository に格納する必要があります。

Oracle Email コンポーネントは、Oracle Email の受信ボックス内のボイスメールおよび FAX を格納するために、Oracle9i リリース 2 (9.2) のデータベースに接続する必要があります。

Oracle Email、Oracle Files および Oracle Calendar を除くすべての Oracle Collaboration Suite 中間層アプリケーションの情報は、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されます。

---

---

**注意：** Oracle Collaboration Suite 中間層は、1 つ以上のホスト上に単一または複数のインスタンスとしてインストールできます。複数の Oracle Collaboration Suite 中間層を単一のホスト上にインストールする場合、Oracle Email はそのホスト内に 2 つ以上構成しないでください。

---

---

---

---

**注意：** 今回のバージョンの Oracle Collaboration Suite に対応する Oracle9iAS 中間層のアップグレードはサポートされていません。

---

---

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite の多言語サポート](#)
- [Oracle Email の配置](#)
- [Oracle Files の配置](#)
- [Oracle Ultra Search の配置](#)
- [Oracle Voicemail & Fax の配置](#)
- [Oracle Wireless & Voice の配置](#)

## Oracle Collaboration Suite の多言語サポート

Oracle Collaboration Suite 中間層の多言語サポートを有効にするには、次の手順を実行して、Oracle Collaboration Suite を構成します。

1. インストール開始時に、すべての言語変換をインストールします。
2. インストール後に、Oracle9iAS Portal の言語変換を有効にします。

### 参照：

- 2-13 ページの「[多言語サポート](#)」を参照してください。
- すべての言語変換のインストールについては、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。
- 5-15 ページの「[Oracle Collaboration Suite のインストール](#)」を参照してください。
- Oracle9iAS Portal の言語変換の有効化については、『[Oracle Collaboration Suite リリース・ノート](#)』を参照してください。

## Oracle Email の配置

Oracle Collaboration Suite 中間層をインストールして Oracle Email を構成する前に、次の考慮点を確認します。

- 単一のコンピュータに 1 つのみの Oracle Email インスタンスを構成します。
- 既存の Oracle9i データベースが存在する場合は、3-24 ページの「[Oracle Email に対する Oracle データベースの要件](#)」を参照してください。

## Oracle Files の配置

Oracle Collaboration Suite 中間層をインストールして Oracle Files を構成する前に、次の考慮点を確認します。

- Oracle Files は、Solaris 8 のみでサポートされています。Oracle Files は、Linux および HP-UX でもサポートされています。
- 3-7 ページの「[要件の確認および配置タイプの選択](#)」を参照してください。
- Oracle Files の構成時に、Oracle Files と Oracle Workflow を統合するには、Oracle Files Configuration Assistant を実行する前に、Oracle Workflow をインストールし、構成する必要があります。3-6 ページの「[Oracle Files と Oracle Workflow 2.6.2 の依存性](#)」および『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』の第 3 章を参照してください。
- Linux に Oracle Files をインストールする場合は、Oracle Text パッチを適用する必要があります。3-7 ページの「[Linux に対する Oracle Files の要件](#)」を参照してください。
- 既存の Oracle9i データベースが存在する場合は、3-26 ページの「[Oracle Files に対する Oracle データベースの要件](#)」を参照してください。

**参照：** Oracle Files については、『Oracle Files 管理ガイド』の「Oracle Files の概要」を参照してください。

**Oracle Files と Oracle Workflow 2.6.2 の依存性** Oracle Files と Oracle Workflow を統合すると、Oracle Files のコンテンツ承認機能およびコンテンツ・ルーティング機能にアクセスできるようになります。Oracle Files の構成中に、Oracle Files と Oracle Workflow を自動的に統合するには、Oracle Files Configuration Assistant を実行する前に、Oracle Workflow をインストールし、構成する必要があります。その後、Oracle Files の構成中に「**Integrate with Workflow**」オプションを選択する必要があります。

Oracle Workflow がインストールおよび構成されていない場合は、Oracle Files の構成プロセス中に警告画面が表示されます。Oracle Workflow を自動的に統合するには、Oracle Files を構成する前に、Oracle Workflow をインストールおよび構成する必要があります。構成後に Oracle Workflow を手動で統合することはできますが、お薦めしません。構成後の手順として Oracle Workflow と Oracle Files を統合する方法については、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

**参照：** Oracle Workflow の構成手順については、『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』の第3章を参照してください。

**Linux に対する Oracle Files の要件** Oracle Files をサポートする Oracle データベースが Linux 上で実行されている場合は、Oracle Text にエラーが発生するため、Oracle Files をインストールする前にデータベースにパッチを適用する必要があります。リリース 1 (9.0.1) データベースの場合は、Bug#2037255 用のパッチを適用します。リリース 2 (9.2) データベースの場合は、Bug#2446892 用のパッチを適用します。

**要件の確認および配置タイプの選択** ハードウェア資源を評価し、適切な配置パスを選択します。

- Oracle Files の本番環境のための複数コンピュータへの配置
- Oracle Files の評価を目的とした単一コンピュータへの配置

**参照：** 第2章「インストールの準備」を参照してください。

### Oracle Files の本番環境のための複数コンピュータへの配置

Oracle Files は、Oracle Collaboration Suite によってサポートされる中間層アプリケーション・サーバー・ソフトウェアとして実行するように設計されています。パフォーマンスを最適化するには、データベースを1つのコンピュータ上で実行し、Oracle Collaboration Suite 中間層アプリケーションを別のコンピュータ上で実行する必要があります。

また、Oracle Files のユーザー資格証明の管理に Oracle Internet Directory を使用する必要があるため、3つ目のコンピュータに Oracle9iAS Infrastructure をインストールおよび構成する必要があります。

### Oracle Files の評価を目的とした単一コンピュータへの配置

コンピュータが3-26ページの「Oracle Files に対する Oracle データベースの要件」に示すすべてのハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たしている場合、Oracle Files を単一のコンピュータにインストールできます。この構成では十分なパフォーマンスが得られない可能性があるため、単一コンピュータへの配置は、評価を目的とする場合にのみサポートされます。

1. Oracle ホームに Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1) 以上をインストールおよび構成します。
2. Oracle Collaboration Suite をインストールし、異なる Oracle ホームに Oracle Files を構成します。
3. Oracle Files Configuration Assistant を使用して、6-3 ページの「Oracle Files の構成」に示す説明に従って Oracle Files を構成します。

## Oracle Ultra Search の配置

Oracle Ultra Search には Oracle Text が必要です。Oracle Text は、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Information Storage インストールでインストールされます。既存の Oracle9i データベースを使用する場合は、Oracle Text がインストールおよび構成されていることを確認します。

Oracle Ultra Search の索引付け機能を使用する場合は、個別の Oracle9iAS Metadata Repository をインストールおよび構成することをお勧めします。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されます。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle Internet Directory が使用するリポジトリ以外の Oracle9iAS Metadata Repository に格納します。

Oracle Collaboration Suite 中間層をインストールして Oracle Ultra Search を構成する前に、次の考慮点を確認します。

- 十分な RAM
- 十分なディスク領域
- ソフトウェア要件
- パフォーマンス・ファクタおよびサイズ指定のガイドライン

**十分な RAM** Ultra Search 索引付けエンジンは、Oracle 内で実行します。そのため、大規模な Oracle インストールの実行が可能な量のメモリーがシステムに搭載されていることが重要です。Oracle インスタンスのシステム・グローバル領域は、50MB 以上である必要があります。

**参照：**『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイド およびリファレンス』を参照してください。

Ultra Search の Web クローラは、同じホスト上で個別の Java プロセスとして実行されます。Web クローラ専用のメモリーとして 50MB を割り当てます。

Ultra Search の管理ツールは、J2EE 1.2 の標準 Web アプリケーションです。この管理ツールは、Ultra Search のサーバー・コンポーネントとは別のホスト上にインストールして実行できます。このコンポーネントを Ultra Search のサーバー・コンポーネントと同じホスト上で実行することもできますが、拡張性が制限される場合があります。いずれの方法を選択する場合も、J2EE エンジンに十分なメモリーを割り当てます。Oracle9iAS Containers for J2EE と Oracle HTTP Server を併用することをお勧めします。Oracle HTTP Server、および J2EE エンジンを実行する JDK に十分なメモリーを割り当てます。

**十分なディスク領域** 顧客のニーズは多種多様であるため、特定の量のディスク領域を推奨することはできません。一般的なガイドラインとして、次の最小要件があります。

- 各リモート・クローラ・ホストに、Ultra Search のサーバー・コンポーネントをインストールするために必要な量と同量のディスク領域を割り当てます。

- ホスト上の RAM に応じて、できるだけ大規模な一時表領域を作成します。
- Ultra Search インスタンス・ユーザー用に、索引付けするデータの総量と同じサイズの表領域を作成します。たとえば、クロールおよび索引付けするデータの総量が 10GB であると推定した場合、Ultra Search インスタンス・ユーザー用に 10GB 以上の表領域を作成します。この表領域を Ultra Search インスタンス・ユーザーのデフォルトの表領域として割り当てる必要があります。

---

**注意：** Ultra Search インスタンス・ユーザーは、明示的に作成する必要のあるデータベース・ユーザーです。クロールおよび索引付けプロセスの一部として収集および処理されるすべてのデータが、このユーザーのスキーマに格納されます。

---

**ソフトウェア要件** Ultra Search 中間層コンポーネントは、Web アプリケーションです。そのため、Web サーバーを実行する必要があります。Oracle HTTP Server と JServ、または Oracle HTTP Server と Oracle9iAS Containers for J2EE を使用することをお勧めします。

**パフォーマンス・ファクタおよびサイズ指定のガイドライン** この項では、一般的な小規模、中規模または大規模な組織のリポジトリ間で均一な検索を行うための、Oracle Ultra Search に対するハードウェア要件について説明します。

クロールおよび索引付けのパフォーマンスは、検索するドキュメントの数、ドキュメントの平均サイズ、ドキュメントの種類（これらのドキュメントをシステム固有のフォーマットから INSO に変換する必要がある場合もない場合も）などの要因によって異なります。

問合せのパフォーマンスは、任意の短い時間間隔（たとえば 15 分間）に連続して同時に問合せを実行するユーザーの数によって異なります。また、問合せのパフォーマンスは、データ・セットのサイズおよびコンピュータ・リソース（CPU およびメモリー）によっても異なります。

表 3-1 に、小企業、中企業および大企業の定義を示します。

**表 3-1 小企業、中企業および大企業のパフォーマンス・ファクタ**

パフォーマンス・ファクタ	小企業	中企業	大企業
企業イントラネット内のドキュメントの数	50000	500000	2500000
ドキュメントの平均サイズ (KB)	50	50	50
同時に検索を実行するユーザー	<10	<10	<10

表 3-2 に、小企業、中企業および大企業のハードウェア構成例を示します。

**表 3-2 小企業、中企業および大企業向けのサイズ指定のガイドライン**

層	小企業	中企業	大企業
データベース (Oracle9iAS Metadata Repository または Oracle9i リリース 1 (9.0.1) 以上のデー タベース)	2GB の RAM が搭載さ れた SUN Ultra 60 (1 台)	4 つの CPU が搭載され た SUN Enterprise 450 (または同等のサー バー)	16 の CPU が搭載され た HP Superdome  48GB の RAM  500GB の空きディスク
Oracle Collaboration Suite 中間層	10GB の空きディスク 領域	2GB の RAM が搭載さ れた Windows 2000 Server	2GB の RAM が搭載さ れた Windows 2000 Server

**注意：** 小規模な構成の場合は、データベース層および Oracle Collaboration Suite 中間層の両方が同じコンピュータ上にインストールされます。前述のハードディスク領域の要件には、ソフトウェアのインストールに必要な領域は含まれていません。ハードディスク領域の要件については、2-2 ページの「ハードウェア要件」を参照してください。

## Oracle Voicemail & Fax の配置

Oracle Voicemail & Fax には、電話サービス用の Windows 2000 Computer Telephony (CT) Server が必要です。

**参照：** ハードウェア要件とソフトウェア要件、およびインストールの方法については、『Oracle Voicemail & Fax Administrator's Guide』を参照してください。

## Oracle Wireless & Voice の配置

中間層に Oracle Wireless & Voice を構成すると、Oracle9iAS Metadata Repository の Oracle Wireless & Voice スキーマが自動的にアップグレードされます。Oracle Wireless & Voice の構成時に、同じ Oracle9iAS Infrastructure を指す 9.0.2.2 より前の Oracle9iAS 中間層が存在する場合、すべての既存の Oracle9iAS 中間層に Oracle Wireless & Voice 9.0.2.2.0 パッチを適用する必要があります。このパッチは、Oracle Collaboration Suite Interoperability Patch CD-ROM 内の `wireless_9022` ディレクトリにあります。

Oracle Wireless & Voice 中間層を Oracle Collaboration Suite CD Pack からインストールする場合、アップグレードは不要です。

## 配置に対する推奨項目および考慮事項

推奨項目は次のとおりです。

- Oracle Collaboration Suite の 3 つのインストールを、次の順序で異なる Oracle ホームにインストールします。
  - Oracle9iAS Infrastructure
  - Oracle Collaboration Suite Information Storage
  - Oracle Collaboration Suite
- パフォーマンスを最適化するために、Oracle Collaboration Suite および Oracle9iAS Infrastructure を個別のホスト上にインストールします。
- Oracle Collaboration Suite および Oracle Collaboration Suite Information Storage を個別のホスト上にインストールします。
- 同じホストに追加の Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールおよび構成する場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用します。

別のホスト上に存在する Oracle9iAS Metadata Repository に接続することによって、広範囲で使用されるコンポーネントのパフォーマンスを最適化できます。コンポーネントを独自のリポジトリに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をサポートする（オプションで Oracle Management Server のサポートも含む）ために、Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
2. 中間層アプリケーションを含む Oracle Collaboration Suite をインストールします。
3. Oracle Internet Directory または Oracle9iAS Single Sign-On を構成せずに、2 番目の Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
4. Oracle Enterprise Manager Web Site で Oracle Collaboration Suite のこのインスタンスを参照し、Oracle9iAS Instance Home Page に移動します。
5. 「Configure Schema」を選択します。

「Configure Schema」ページから、選択されたアプリケーション用のデータベースおよびスキーマを選択できます。

**参照：** このタスクの実行の詳細は、Enterprise Manager Web Site のオンライン・ヘルプの「Configuring the Schema for an Oracle9iAS Component」を参照してください。

## アップグレード

この項では、既存の Oracle コンポーネントを Oracle Collaboration Suite で動作するようにアップグレードする方法について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 のアップグレード](#)
- [既存の Oracle9iAS Infrastructure の手動アップグレード](#)
- [Oracle Internet Directory のアップグレード](#)
- [Oracle Email のアップグレード](#)
- [Oracle Ultra Search のアップグレード](#)
- [Oracle Voicemail & Fax のアップグレード](#)

---

---

**注意：** ソフトウェアをアップグレードする前に、関連するデータ・ファイルをバックアップしておくことをお勧めします。

---

---

## Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 のアップグレード

Oracle Collaboration Suite を Oracle9iAS Infrastructure と同じ Oracle ホームにインストールするのみで、Oracle9iAS Infrastructure バージョン 9.0.2.0.1 を Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードできます。インストール時に、Oracle9iAS 9.0.2.0.1 がインストールされていることが検出されます。次に、Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー・アカウント、Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー・パスワードおよび Oracle9iAS Metadata Repository の SYS パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。次に、Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームに存在するすべての Oracle プロセスを停止するように求められます。

**参照：**

- 3-14 ページの「[Oracle プロセスの停止](#)」を参照してください。
- 5-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」を参照してください。

## Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 のアップグレード

Oracle Collaboration Suite 用の Oracle9iAS 9.0.2.0.1 を Oracle9iAS 9.0.2.0.0 と同じ Oracle ホームに直接インストールすることはできません。Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 を Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードするには、Oracle Collaboration Suite Interoperability Patch CD を使用します。インストール時に、Oracle9iAS 9.0.2.0.0 がインストールされていることが検出されます。次に、Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー・アカウント、Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー・パスワードおよび Oracle9iAS Metadata Repository の SYS パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。次に、Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームに存在するすべての Oracle プロセスを停止するように求められます。

---

**注意：** Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 をアップグレードするには、パッチが必要です。Oracle9iAS Interoperability Patch CD に含まれるパッチを適用します。

---

**参照：** 3-14 ページの「[Oracle プロセスの停止](#)」を参照してください。

## 既存の Oracle9iAS Infrastructure の手動アップグレード

Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 または 9.0.2.0.1 のアップグレードに失敗した場合、アップグレード・パッチを Oracle9iAS Metadata Repository に手動で再適用できます。パッチを手動で適用するには、次の手順を実行します。

1. 次のとおり入力して、SQL\*Plus を使用し、SYS としてリポジトリに接続します。

```
prompt> sqlplus /NOLOG
SQL> CONNECT sys/password
```

2. 次のとおり入力して、OCSPatch.sql スクリプトを実行します。

```
SQL> @$ORACLE_HOME/oneoffs/admin/OCSPatch.sql;
```

Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームに構成済バージョンの Oracle Internet Directory が含まれている場合は、3-16 ページの「[アップグレードされた Oracle Internet Directory の構成](#)」に示す構成手順を実行する必要があります。

## Oracle Internet Directory のアップグレード

既存の Oracle Internet Directory を Oracle Collaboration Suite で使用する場合は、Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードする必要があります。Oracle Collaboration Suite アプリケーションは Oracle9iAS のアーキテクチャと一貫性がありますが、Oracle Internet Directory でいくつかのエラーの修正およびスキーマの変更を行う必要があります。Oracle Collaboration Suite のバージョンの Oracle9iAS Infrastructure に付属している Oracle Internet Directory では、これらの修正および変更がすでに行われています。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Internet Directory をアップグレードする前のタスク](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure バージョン 9.0.2.0.1 の Oracle Internet Directory のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 バージョンの Oracle Internet Directory のアップグレード](#)
- [Oracle Internet Directory 2.1.1.x または 3.0.1.x からのアップグレード](#)
- [アップグレードされた Oracle Internet Directory の構成](#)

### Oracle Internet Directory をアップグレードする前のタスク

後で現行の Oracle Internet Directory のバージョンにダウングレードできるようにしておくことをお勧めします。Oracle Collaboration Suite のバージョンの Oracle Internet Directory へのアップグレードが失敗した場合、元のソフトウェアおよびデータベースをリストアできます。

**参照：** 3-23 ページの「[Oracle Internet Directory のダウングレード](#)」を参照してください。

**Oracle プロセスの停止** Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームに存在するすべての Oracle プロセスを停止します。

1. Oracle Management Server を実行している場合は、次のとおり入力して停止します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oemctl stop oms
```
2. Oracle Management Server を使用している場合は、次のとおり入力して Intelligent Agent を停止します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/agentctl stop agent
```
3. Enterprise Manager Web Site の Instance Home Page を使用して、Oracle9iAS Infrastructure のインスタンスを停止します。
  - a. 次の URL の Enterprise Manager Web Site に移動します。

```
http://hostname:1810
```
  - b. `ias_admin` およびインストール中に設定したパスワードを使用してログインします。
  - c. 「**Standalone Instances**」セクションの「**名前**」列のインフラストラクチャ・リンクを選択して、Oracle9iAS Infrastructure の Instance Home Page に移動します。
  - d. Instance Home Page の「**一般**」セクションで「**すべて停止**」をクリックします。

4. 次のとおり入力して、メタデータ・リポジトリのインスタンスを停止します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/sqlplus /NOLOG
SQL> CONNECT sys/sys_password AS SYSDBA
SQL> SHUTDOWN
SQL> QUIT
```

5. 次のとおり入力して、メタデータ・リポジトリのリスナーを停止します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/lsnrctl STOP
```

6. 次のとおり入力して、Enterprise Manager Web Site を終了します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/emctl STOP
```

**Oracle インストールのバックアップ** Oracle インストールをバックアップします。

1. Oracle データベースをバックアップします。
2. Oracle ホームをバックアップします。
3. oraInventory ディレクトリに存在する Oracle Universal Installer Inventory をバックアップします。これは、ダウングレードをサポートするために必要な手順です。
  - a. oraInventory ディレクトリに移動します。
  - b. Inventory サブディレクトリとそのすべての内容を他のディレクトリにコピーします。たとえば、Inventory.bak です。
  - c. Oracle Universal Installer Inventory をリストアするには、oraInventory.bak を oraInventory にコピーします。

## Oracle9iAS Infrastructure バージョン 9.0.2.0.1 の Oracle Internet Directory のアップグレード

現行の Oracle Internet Directory のバージョンが Oracle9iAS 9.0.2.0.1 のバージョンである場合は、Oracle Collaboration Suite CD Pack を使用して、Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードできます。詳細は、3-12 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 のアップグレード](#)」を参照してください。

---

---

**注意：** 現行の Oracle Internet Directory バージョン 9.0.2.0.1 が、以前に 2.1.1.x または 3.0.1.x からアップグレードされている場合は、構成タスクを手動で実行する必要があります。3-16 ページの「[アップグレードされた Oracle Internet Directory の構成](#)」を参照してください。

---

---

**参照：** インストール方法は、5-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」を参照してください。

### Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 バージョンの Oracle Internet Directory のアップグレード

現行の Oracle Internet Directory のバージョンが Oracle9iAS 9.0.2.0.0 のバージョンである場合は、Oracle Collaboration Suite Interoperability Patch CD を使用して、Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードできます。詳細は、3-13 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 のアップグレード](#)」を参照してください。

---

**注意：** 現行の Oracle Internet Directory バージョン 9.0.2.0.0 が、以前に 2.1.1.x または 3.0.1.x からアップグレードされている場合は、構成タスクを手動で実行する必要があります。3-16 ページの「[アップグレードされた Oracle Internet Directory の構成](#)」を参照してください。

---

**参照：** インストール方法は、5-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」を参照してください。

### Oracle Internet Directory 2.1.1.x または 3.0.1.x からのアップグレード

現行の Oracle Internet Directory がバージョン 9.0.2 より前 (2.1.1.x または 3.0.1.x) である場合は、まず Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 の CD-ROM を使用してバージョン 9.0.2 にアップグレードする必要があります。

Oracle Internet Directory を 9.0.2 にアップグレードした後、Oracle Collaboration Suite CD Pack を使用して、Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードできます。

**参照：** 『Oracle9i Application Server: Migrating from Oracle9i Application Server 1.0.2.2』の「Oracle Internet Directory の移行」を参照してください。

### アップグレードされた Oracle Internet Directory の構成

Oracle Universal Installer では、構成ツールは自動的に起動されません。Oracle Internet Directory を Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレードした後、次の手順を実行する必要があります。

1. 次のスクリプトを実行します。

```
sqlplus> ods/ods_password @$ORACLE_HOME/ldap/admin/oidimarc.sql;
```

2. テキスト・エディタで次のスクリプトを開きます。

```
$ORACLE_HOME/bin/patchca
```

3. patchca スクリプトの `OID_SID` 文字列を正しい `ORACLE_SID` に置き換えます。
4. 次のコマンドを実行して、patchca スクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/patchca super_user_DN super_user_password
```

---

**注意：** Oracle Collaboration Suite への Oracle9iAS 中間層の今回のバージョンのアップグレードはサポートされていません。Delegated Administration Service (DAS) が Oracle9iAS 中間層に配置されている場合、Oracle Collaboration Suite に対する DAS のエラーの修正は Oracle9iAS 中間層には適用できません。ただし、新しい Oracle Collaboration Suite 中間層に配置された DAS では、エラーの修正が行われています。

---

---

**注意：** Oracle Internet Directory 2.1.1.x または 3.0.1.x からのアップグレード中に `$ORACLE_HOME/config/ias.properties` ファイルが廃棄されます (削除はされません)。同じコンピュータ上の異なる `$ORACLE_HOME` に 2 番目の Oracle9iAS Infrastructure がインストールされている場合、この 2 番目のインストールによって作成されたデータベースが、廃棄された `ias.properties` ファイルのデータベース情報に一致する可能性があります。/var/opt/oracle/oratab が削除されている場合は、Oracle Universal Installer が誤って 2 番目の Oracle9iAS Infrastructure データベースを Oracle Internet Directory データベースとして識別し、構成ツールに障害が発生します。/var/opt/oracle/oratab に `ORACLE_SID:$ORACLE_HOME` の情報が正しく反映されている必要があります。

---

## Oracle Email のアップグレード

Oracle Email のアップグレードは、次の 3 つのシステムに関連します。

- [Oracle Email Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード手順](#)
- [中間層用の Oracle Email のアップグレード手順](#)
- [Email Store \(データベース\) 用の Oracle Email のアップグレード手順](#)

### Oracle Email Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード手順

1. Oracle Internet Directory パッチのインストール手順に従って、Oracle9iAS の Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.x を Oracle Collaboration Suite のバージョンの Oracle Internet Directory にアップグレードします。この手順によって、電子メール用の新しい **LDAP** スキーマ・オブジェクトが作成されます。
2. 電子メールの管理者がベース・ユーザーの電子メール属性を変更できるように、アクセス制御リスト (ACL) を変更します。

- a. oidadmin を実行し、cn=orcladmin として接続します。
  - b. cn=Common, cn=Products, cn=OracleContext エントリへ移動します。
  - c. 共通のコンテナから orclsubscribersearchbase 属性の値を取得します。
  - d. \$ORACLE\_HOME/oes/bin の下に存在する emailaci.ldif をバックアップし、次のテキストを使用して再作成します。

```
dn: %SUBSCRIBER_SEARCHBASE%
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to attr=(mail) by
group="cn=EmailAdminsGroup, cn=EMailServerContainer, cn=Products, cn=OracleContext"
(write)
```
  - e. emailaci.ldif スクリプトの %SUBSCRIBER\_SEARCHBASE% を、手順 c で取得した orclsubscribersearchbase の値に置き換えます。
  - f. 次のとおり入力して、emailaci.ldif をロードします。

```
ldapmodify -v -a -Dcn=orcladmin -w orcladmin_password -h ldap_host -p ldap_port -f emailaci.ldif
```
3. targetdn 属性を索引付けします。これによって、Oracle Collaboration Suite のバージョンの Oracle Email に必要な属性を検索できます。
    - a. データベースの所有者として、Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory がインストールされているコンピュータにログインします。
    - b. Oracle Internet Directory サーバーを停止します。
    - c. 次のとおり入力して、targetdn に対し、catalog.sh を実行します。

```
$ORACLE_HOME/ldap/bin/catalog.sh -connect infrastructure_connectstr -add -attr targetdn
```
    - d. Oracle Internet Directory サーバーを再起動します。

### 中間層用の Oracle Email のアップグレード手順

アップグレードを実行する中間層が、以前のバージョンの Oracle Email がインストールされていないコンピュータにインストールされている場合、新しく中間層がインストールされるため、アップグレードのための特別な手順は不要です。

---

---

**注意：** 中間層のアップグレードによって、システムの他の中間層が停止することはありません。

---

---

アップグレードを実行する中間層が、以前のバージョンの Oracle Email がインストールされたコンピュータにインストールされている場合は、次の手順を実行します。

1. アップグレード前の中間層に存在するすべてのサーバーを停止します。
2. 異なる Oracle ホームに新しい Oracle Collaboration Suite 中間層をインストールします。
3. `$ORACLE_HOME/oes/bin` に存在する `renameorahomeforumprocs.sh` スクリプトを実行します。
4. `$ORACLE_HOME/oes/bin` に存在する `UpgradeUMOIDFrom9021.sh` スクリプトを実行します。
5. アップグレード前の中間層を削除します。この手順はオプションです。

---

---

**注意：** 今回のリリースの Oracle Collaboration Suite では、1 台のコンピュータに複数の Oracle Email 中間層は保存できません。

---

---

6. 次のとおり入力して、`$ORACLE_HOME/network/admin` の下に存在する `listener.ora` をバックアップします。

```
$ cd $ORACLE_HOME/network/admin
$ cp listener.ora listener.ora.backup
```
7. `$ORACLE_HOME` を新しくインストールされた Oracle Collaboration Suite に設定します。
8. 次のとおり入力して、新しい `listener.ora` を、同じコンピュータ上に存在する既存の Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の Oracle ホームの `listener.ora` と置き換えます。

```
$ cp iasv2_oracle_home_directory/network/admin/listener.ora listener.ora
```

## Email Store (データベース) 用の Oracle Email のアップグレード手順

次の手順は、各メール・ストアに対して 1 回のみ実行する必要があります。次の手順では Email Store が停止します。

1. すべての電子メール・サーバーを停止します。
2. Email Store の Oracle ホームに Oracle Email スキーマをインストールします。このコンポーネントは、`umbackend.tar` に含まれます。
3. SQL\*Plus を起動します。
4. SYSTEM ユーザーとして接続します。
5. `$ORACLE_HOME/oes/install/sql` に存在する `umupg903_system.sql` を実行します。
6. `es_mail` として接続します。
7. `$ORACLE_HOME/install/sql` に存在する `umupg903_es_mail.sql` を実行します。
8. すべての電子メール・サーバーを再起動します。

## Oracle Ultra Search のアップグレード

既存の Oracle9i データベースから Oracle Ultra Search をアップグレードする場合は、『Oracle Ultra Search User's Guide』の「インストール後の作業とアップグレードに関する情報」を参照してください。

既存の Oracle9iAS Infrastructure から Oracle Ultra Search をアップグレードする場合は、『Oracle Ultra Search Release Notes』を参照してください。

## Oracle Voicemail & Fax のアップグレード

Oracle Voicemail & Fax をアップグレードするには、次の手順を実行します。

- [Oracle Voicemail & Fax をアップグレードする前のタスク](#)
- [9.0.2 から Oracle Collaboration Suite のバージョンへの Oracle Voicemail & Fax のアップグレード手順](#)

### Oracle Voicemail & Fax をアップグレードする前のタスク

アップグレードが失敗した場合のために、Windows 2000 CT Server および Oracle Collaboration Suite 中間層コンピュータ上に存在するファイル（表 3-3 を参照）をバックアップしておくことをお勧めします。

表 3-3 バックアップするファイル

Windows 2000 CT Server	中間層
orclcont.dll	\$ORACLE_HOME/um/xml 内の XML ファイル
sc_vsto.cfg	\$ORACLE_HOME/um/jlib 内のすべての jar ファイル
\$ORACLE_HOME\um (ディレクトリ全体)	

### 9.0.2 から Oracle Collaboration Suite のバージョンへの Oracle Voicemail & Fax のアップグレード手順

この一連の手順は、Oracle Email および中間層を、すでに Oracle Collaboration Suite のバージョンにアップグレード済であることを前提としています。次の 2 箇所ですべてアップグレードを実行する必要があります。

- [Windows 2000 CT Server](#)
- [Oracle Collaboration Suite 中間層](#)

**Windows 2000 CT Server** Oracle Voicemail & Fax では、Windows 2000 コンピュータ上で 1 つのみの Oracle ホームがサポートされます。そのため、アップグレード中に元の Oracle ホームのファイルが上書きされ、新しい Oracle ホームは作成されません。

1. Dialog Container Manager を起動します。「スタート」>「プログラム」>「Dialogic CT Media Applications」>「Container Manager」を選択します。  
このプログラムは、すべての既存の CT Server コンピュータで使用可能です。
2. ルート・コンテナ下で、「outbox\$」で始まるすべてのコンテナ・ファイルを削除します。
3. Windows 2000 CT Server 上に Oracle Collaboration Suite のバージョンの Oracle Voicemail & Fax をインストールします。Oracle Universal Installer によってすべてのファイルが最新のバージョンに更新および構成されます。

**参照：**『Oracle Voicemail & Fax Administrator's Guide』を参照してください。

**Oracle Collaboration Suite 中間層** 既存の中間層をアップグレードする手順は、新しくインストールされた中間層をアップグレードする手順とは異なります。

Oracle Collaboration Suite 中間層が新しいコンピュータにインストールされている場合は、次の手順を実行します。

1. Voicemail & Fax Infrastructure Configuration Tool を起動します。
2. Voicemail & Fax EMD Configuration の中間層および CT Server プロセス部分を実行します。
3. Voicemail & Fax Infrastructure Configuration Tool で、Oracle Internet Directory Configuration の中間層部分のみを実行します。
4. 次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/um/scripts/upgrade_promptsmenu_xml.sh
```

このスクリプトによって、Oracle Collaboration Suite のプロンプトおよびメニュー用の新しい XML ファイルがロードされます。

5. 次のスクリプトを実行して、Oracle Voicemail & Fax の Oracle Internet Directory エントリの Oracle ホームを変更します。

```
$ORACLE_HOME/um/scripts/changeOracleHomeForVMail.sh middle_tier_host_name  
middle_tier_old_oracle_home middle_tier_new_oracle_home
```

Oracle Collaboration Suite 中間層が既存の中間層にインストールされている場合は、次の手順を実行します。

1. Voicemail & Fax Infrastructure Configuration Tool を起動します。
2. Voicemail & Fax EMD Configuration の CT Server プロセス部分のみを実行します。
3. 次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/um/scripts/upgrade_promptsmenu_xml.sh
```

このスクリプトによって、Oracle Collaboration Suite のプロンプトおよびメニュー用の新しい XML ファイルがロードされます。

4. 次のスクリプトを実行して、Oracle Voicemail & Fax の Oracle Internet Directory エントリの Oracle ホームを変更します。

```
$ORACLE_HOME/um/scripts/changeOracleHomeForVMail.sh middle_tier_host_name  
middle_tier_old_oracle_home middle_tier_new_oracle_home
```

この手順は、Oracle ホームが変更されていない場合は不要です。

## ダウングレード

この項では、次のコンポーネントをダウングレードする方法を説明します。

- [Oracle Ultra Search のダウングレード](#)
- [Oracle Internet Directory のダウングレード](#)

---

---

### 注意：

- ソフトウェアをダウングレードする前に、関連するデータ・ファイルをバックアップしておくことをお勧めします。
  - Oracle Email、Oracle Files および Oracle Wireless & Voice では、ダウングレードがサポートされていません。
- 
- 

## Oracle Ultra Search のダウングレード

Oracle Ultra Search 9.0.3 では、9.0.2 へのダウングレードのみがサポートされています。Oracle Ultra Search 1.0.3 へのダウングレードはサポートされていません。

ダウングレードは、サーバー・コンポーネントのみで実行できます。中間層でのダウングレードはサポートされていません。

### Oracle Ultra Search 9.0.3 から 9.0.2 へのダウングレード

1. 異なるディレクトリに保存済のすべての Ultra Search 9.0.2 ファイルを \$ORACLE\_HOME/ultrasearch ディレクトリにコピーします。ダウングレードの前に、この手順を実行する必要があります。
2. Ultra Search 9.0.3 の管理ツールにログインします。
3. すべての Ultra Search インスタンスで、すべてのクローラ同期スケジュール（存在する場合）を停止および無効化します。
4. 9.0.2 の PL/SQL パッケージを Oracle9iAS Metadata Repository に再ロードします。

- a. 次のとおり入力して、WKSYS としてデータベースに接続します。

```
prompt> sqlplus wksys/password
```

- b. 次のスクリプトを実行します。

```
SQL> @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0pkh.sql;  
SQL> @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0plb.sql;
```

5. 次のとおり入力して、9.0.2 の PL/SQL の Java スタアド・パッケージを Oracle9iAS Metadata Repository に再ロードします。

```
SQL> @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0loadjava.sql ORACLE_HOME_  
Path/ultrasearch/lib
```

## Oracle Internet Directory のダウングレード

この項では、Oracle Collaboration Suite とともに使用するために実行した Oracle Internet Directory のアップグレードに失敗した場合、Oracle Internet Directory をリリース 9.0.2.0.1 にダウングレードする方法を説明します。元のソフトウェアおよびデータベースは、次のダウングレード手順を実行してリストアできます。

1. Oracle データベースを含む Oracle Internet Directory の Oracle ホームに存在するすべてのプロセスを停止します。
2. Oracle ホームおよび Oracle Inventory をクリーンアップします。
3. 3-13 ページの「[Oracle Internet Directory のアップグレード](#)」で実行したバックアップの順序で、Oracle Inventory、Oracle ホームおよび Oracle データベースをリストアします。

Oracle Universal Installer インベントリをリストアするには、バックアップ・ファイルを oraInventory にコピーします。

4. Oracle データベースおよびすべてのプロセスを起動します。

## データベースのチューニング

この項では、Oracle Email および Oracle Files のデータベース要件について説明します。Oracle Email および Oracle Files をインストールおよび構成する前に、既存のデータベースを適切に構成しておく必要があります。

---

---

**注意：** Email Store または Files Store を Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール CD-ROM からインストールすると、この項で説明するすべての要件を満たすチューニング済のデータベースが提供されます。

---

---

今回のリリースの Oracle Collaboration Suite の場合、多言語サポートを有効にするために、データベースで UTF8 キャラクタ・セットを使用する必要があります。次の SQL コマンドを使用して、キャラクタ・セットを確認します。

```
SQL> SELECT * FROM nls_database_parameters WHERE parameter = 'nls_characterset';
```

Oracle Email データベース (Email Store) および Oracle Files データベース (Files Store) には、一意の初期化パラメータが必要です。各データベースには、異なるパラメータが必要です。3-25 ページの表 3-4 または 3-26 ページの表 3-5 で説明するパラメータを参照してください。

パラメータ値を確認するには、SQL\*Plus を使用してデータベースに接続し、v\$parameter ビューを問い合わせます。次に例を示します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/sqlplus /NOLOG
SQL> CONNECT system/password AS SYSDBA
Connected.
SQL> SELECT name, value FROM v$parameter WHERE name = 'processes';
```

processes パラメータの値が表示されます。他のパラメータ値を確認するには、processes を適切なパラメータ名に置き換えて、前述のコマンドを再実行します。

**参照：** パラメータ設定の変更については、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。このマニュアルは、次の URL で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp>

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Email に対する Oracle データベースの要件](#)
- [Oracle Files に対する Oracle データベースの要件](#)

### Oracle Email に対する Oracle データベースの要件

---

---

**注意：** Email Store を Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール CD-ROM からインストールすると、この項で説明するすべての要件を満たすチューニング済のデータベースが提供されます。

---

---

データベースに電子メール・データを格納するには、Oracle Email をインストールする前に Oracle9i リリース 2 (9.2) のデータベースを構成する必要があります。

表 3-4 に示すパラメータを使用して、Email Store を構成します。これらのパラメータは、Oracle Email のインストールおよびパフォーマンスに影響します。

表 3-4 Oracle Email の情報ストアに対する初期化パラメータ

パラメータ	値
AQ_TM_PROCESSES	1
COMPATIBLE	9.2.0.0.0
DB_BLOCK_SIZE	8192
DB_CACHE_SIZE	16777216
DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT	32
DISPATCHERS	(PROTOCOL=TCP) (SERVICE={SID}XDB)
DML_LOCKS	200
FAST_START_MTTR_TARGET	300
HASH_AREA_SIZE	1048576
HASH_JOIN_ENABLED	TRUE
JAVA_POOL_SIZE	41943040
JOB_QUEUE_PROCESSES	10
LARGE_POOL_SIZE	8388608
OPEN_CURSORS	300
PGA_AGGREGATE_TARGET	33554432
PROCESSES	150
QUERY_REWRITE_ENABLED	TRUE
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE
SHARED_POOL_SIZE	50331648
SORT_AREA_SIZE	1048576
STAR_TRANSFORMATION_ENABLED	TRUE
TIMED_STATISTICS	TRUE
UNDO_MANAGEMENT	AUTO
UNDO_RETENTION	10800
UNDO_TABLESPACE	UNDOTBS1

**参照：** 5-12 ページの「Oracle Email のインストール後のタスク」を参照してください。

## Oracle Files に対する Oracle データベースの要件

---

**注意：** Files Store を Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール CD-ROM からインストールすると、この項で説明するすべての要件を満たすチューニング済のデータベースが提供されます。

---

**Files Store** にデータを格納するには、Oracle Files をインストールする前に、リリース 1 (9.0.1) 以上のデータベースを構成する必要があります。

表 3-5 に示すパラメータを使用して、Files Store を構成します。これらのパラメータは、Oracle Files のインストールおよびパフォーマンスに影響します。

また、既存の Oracle データベースが次の要件を満たす必要もあります。

- Oracle9i データベース・サーバー リリース 1 (9.0.1) 以上で、インストール・タイプは Enterprise Edition または Standard Edition である。
- Oracle JVM 9.0.1 以上 (Enterprise Edition または Standard Edition の Oracle データベース・サーバーの一部として含まれている) がインストールされている。次のコマンドを使用して、Oracle JVM がインストールされているかどうかを確認します。

```
SQL> SELECT count(*) FROM all_objects WHERE object_name = 'dbms_java';
```

COUNT が 3 に等しい場合、Oracle JVM がインストールされています。

- Oracle Text 9.0.1 以上 (Enterprise Edition または Standard Edition の Oracle データベース・サーバーに含まれている) がインストールされている。これは、全文検索に必要です。
- Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.3 がインストールされている (Oracle Files Configuration Assistant にも Thin ドライバが必要)。Oracle Files を構成した後、Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.3 または Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.3 をオプションで使用できます。
- 初期化パラメータ値が、3-26 ページの表 3-5 に示す初期化パラメータ要件を満たしている。
- USERS 表領域に 450MB 以上の空き領域が存在する (USERS 表領域を使用して Oracle Files オブジェクトを格納する場合) か、または構成中に作成された表および索引を格納するためのカスタム表領域に十分な空き領域が存在する。

**表 3-5 Oracle Files データベースに対する初期化パラメータ**

パラメータ	値
AQ_TM_PROCESSES	1
COMPATIBLE	9.2.0.0.0
DB_BLOCK_SIZE	8192

表 3-5 Oracle Files データベースに対する初期化パラメータ (続き)

パラメータ	値
DB_CACHE_SIZE	16777216
DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT	32
FAST_START_MTTR_TARGET	300
HASH_AREA_SIZE	1048576
HASH_JOIN_ENABLED	TRUE
LARGE_POOL_SIZE	8388608
JAVA_POOL_SIZE	33554432
JOB_QUEUE_PROCESSES	4
OPEN_CURSORS	300
PGA_AGGREGATE_TARGET	33554432
PROCESSES	150
QUERY_REWRITE_ENABLED	TRUE
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE
SESSION_MAX_OPEN_FILES	50
SHARED_POOL_SIZE	50331648
SORT_AREA_SIZE	1048576
STAR_TRANSFORMATION_ENABLED	TRUE
TIMED_STATISTICS	TRUE
UNDO_MANAGEMENT	AUTO
UNDO_RETENTION	10800
UNDO_TABLESPACE	UNDOTBS1



---

## インストール・スタート・ガイド

この章では、Oracle Collaboration Suite の 3 つのインストールを開始する手順について説明します。インストール・プロセスを正常に実行するには、この章に示す手順に従う必要があります。

この章の内容は次のとおりです。

- [CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [Oracle Universal Installer の概要](#)
- [Oracle Universal Installer の起動](#)

## CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール

表 4-1 に、Oracle Collaboration Suite の 3 つのインストールが収録されている CD-ROM の数を示します。

**表 4-1 各インストール用の CD-ROM**

インストール	CD-ROM の数
Oracle9iAS Infrastructure	3
Oracle Collaboration Suite Information Storage	2
Oracle Collaboration Suite	2
Oracle Collaboration Suite Interoperability	1
Oracle Collaboration Suite Client	1

Oracle CD-ROM は、Rockridge 拡張機能付きの ISO 9660 フォーマットで作成されています。CD-ROM から直接インストールするか、または CD-ROM のコンテンツをコピーしてシステムのハードディスク・ドライブからインストールするかを選択できます。Oracle Universal Installer を起動する前に、インストール方法に応じて必要な手順を完了する必要があります。

CD-ROM の自動マウントがサポートされないオペレーティング・システムの場合は、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。CD-ROM をマウントまたはアンマウントするには、root 権限が必要です。CD-ROM は、ドライブから取り出す前にアンマウントする必要があります。

必要に応じて、インストール中に次のマウント手順を参照してください。

- [CD-ROM のマウント \(Solaris\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(HP\)](#)
- [CD-ROM のマウント \(Linux\)](#)

### CD-ROM のマウント (Solaris)

1 枚目の CD-ROM をマウントしてインストールを開始します。後続のディスクのマウントを求められた場合は、マウントします。次の手順を実行して、CD-ROM をマウントします。

この項の内容は次のとおりです。

- [Volume Management ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント \(Solaris\)](#)
- [CD-ROM の手動マウント \(Solaris\)](#)

## Volume Management ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Solaris)

Volume Management ソフトウェア (Solaris にデフォルトでインストールされています) を使用する場合、CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入すると、`/cdrom/volume_name` ディレクトリに自動的にマウントされます。4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。

Volume Management ソフトウェアがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
$ ps -e | grep vold
```

Volume Management ソフトウェアがインストールされている場合、出力は次のようになります。

```
404 ? 16:03 vold
```

- Volume Management ソフトウェアを実行している場合、CD-ROM は自動的にマウントされます。後続の CD-ROM をアンマウントするには、次のコマンドを使用します。

```
$ cd /  
$ eject
```

これらのコマンドを入力した後、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。

- 行が戻されない場合は、Volume Management ソフトウェアが実行されていないため、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。4-3 ページの「[CD-ROM の手動マウント \(Solaris\)](#)」に進みます。

後続の CD-ROM をマウントするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

```
$ cd /  
$ eject
```

2. 次の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、Oracle Universal Installer の「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。
3. 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM の手動マウント (Solaris)

CD-ROM を手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. 適切なインストールの 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、必要に応じて、次のコマンドを使用して CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

- マウント・ポイント・ディレクトリに CD-ROM ドライブをマウントし、次のコマンドを使用して root アカウントを終了します。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

正しい `device_name` が不明な場合は、システム管理者に問い合わせてください。通常、`device_name` は `/dev/dsk/c0t6d0s0` です。次に例を示します。

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -r -F hfsfs /dev/dsk/c0t6d0s0 /cdrom
# exit
```

現行の作業ディレクトリが CD-ROM 上に存在している場合に Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順を実行して 2 枚目の CD-ROM をマウントします。

- システムのルート・ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用して root ユーザーとしてログインします。

```
$ cd /
$ su root
```

- 次のコマンドを使用して、CD-ROM をアンマウントします。

```
# umount cdrom_mount_point_directory
```

- CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

- 2 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを使用してマウントします。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
```

- Oracle Universal Installer の「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。

- 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM のマウント (HP)

開始する適切なインストールの 1 枚目の CD-ROM をマウントします。後続のディスクのマウントを求められた場合は、マウントします。次の手順を実行して、Oracle CD-ROM を手動でマウントします。

- CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。

2. root ユーザーとしてログインし、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリが存在しない場合は、次のコマンドを使用して作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のコマンドを使用して、デバイス名を確認します。

```
$ ioscan -fun -C disk
```

出力は次のようになります。

```
disk    10 10/12/5.2.0  sdisk      CLAIMED   DEVICE    TOSHIBA CD-ROM
XM-5701TA /dev/dsk/c4t2d0  /dev/rdisk/c4t2d0
```

4. /etc/pfs\_fstab ファイルに CD-ROM デバイスのエントリが存在しない場合は、追加する必要があります。root ユーザーとして、システム・エディタを使用し、次のフォーマットに従って /etc/pfs\_fstab ファイルに行を追加します。

```
device_file mount_point filesystem_type translation_method
```

前述のフォーマットで、最初のエントリは CD-ROM デバイス、2 番目のエントリはマウント・ポイント、3 番目のエントリはマウントする CD-ROM が Rockridge 拡張機能付き ISO 9660 フォーマットであることを示します。

この例での *device\_file* は、/etc/pfs\_fstab です。/etc/pfs\_fstab というパスを持つ CD-ROM デバイスの場合、次のとおり入力します。

```
/dev/dsk/c4t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 1 0
```

5. 次のコマンドを使用して、root ユーザーとしてログインします。

```
$ su root
```

6. 次のコマンドを入力します。

```
# nohup /usr/sbin/pfs_mountd &
# nohup /usr/sbin/pfsd &
```

7. 次のコマンドを入力して、CD-ROM をマウントします。

```
# /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```

8. root アカウントからログアウトします。

```
# exit
```

現行の作業ディレクトリが CD-ROM 上に存在する場合に Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順を実行して 2 枚目の CD-ROM をマウントします。

1. システムのルート・ディレクトリに移動し、root ユーザーとしてログインします。

```
$ cd /  
$ su root
```

2. CD-ROM をアンマウントするには、次のコマンドを使用します。

```
# /usr/sbin/pfs_umount /SD_CDROM
```

3. CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

4. 必要な CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを使用してマウントします。

```
# /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```

5. 「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。
6. 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM のマウント (Linux)

開始する適切なインストールの 1 枚目の CD-ROM をマウントします。後続のディスクのマウントを求められた場合は、マウントします。次の手順を実行して、CD-ROM をマウントします。

- [自動マウント・ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント \(Linux\)](#)
- [CD-ROM の手動マウント \(Linux\)](#)

### 自動マウント・ソフトウェアを使用した CD-ROM のマウント (Linux)

自動マウント・ソフトウェアを使用する場合、CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入すると、CD-ROM が自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。

自動マウント・ソフトウェアがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
$ ps -aux | grep automount
```

自動マウント・ソフトウェアがインストールされている場合、出力は次のようになります。

```
root 628 0.0 0.2 1148 588 ? S 17:32 0:00 /usr/sbin/automount /misc file  
/etc/auto.misc
```

前述の出力で、`/etc/auto.misc` エントリは、CD-ROM がマウントされる `/misc` ファイルの下のディレクトリを定義します。

- 自動マウント・ソフトウェアが適切に実行および構成されている場合、CD-ROM は自動的にマウントされます。4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」に進みます。
- 行が戻されない場合は、自動マウント・ソフトウェアが実行されていないため、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。「[CD-ROM の手動マウント \(Linux\)](#)」に進みます。

後続の CD-ROM をマウントするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して、CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

```
$ cd /  
$ eject
```

2. 次の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、Oracle Universal Installer の「インストール」ダイアログ・ボックスで正しいマウント・ポイントを入力します。
3. 「OK」をクリックして続行します。

## CD-ROM の手動マウント (Linux)

Oracle CD-ROM を手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、必要に応じて、次のコマンドを使用して CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
$ su root  
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のコマンドを使用して、CD-ROM ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントします。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
```

4. root アカウントを終了します。

```
# exit
```

正しい `device_name` が不明な場合は、システム管理者に問い合わせてください。通常、`device_name` は `/dev/cdrom` です。次に例を示します。

```
$ su root  
# mkdir /cdrom  
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /cdrom  
# exit
```

現行の作業ディレクトリが CD-ROM 上に存在する場合に Oracle Universal Installer を実行するには、2 枚目の手順を実行して次の CD-ROM をマウントします。

1. システムのルート・ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用して root ユーザーとしてログインします。

```
$ cd /  
$ su root
```

2. 次のコマンドを使用して、CD-ROM をアンマウントします。

```
# umount cdrom_mount_point_directory
```

3. CD-ROM を CD-ROM ドライブから取り出します。

4. 2 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを使用してマウントします。

```
# mount cdrom_mount_point_directory
```

5. Oracle Universal Installer の「インストール」画面で正しいマウント・ポイントを入力します。

6. 「OK」をクリックして続行します。

## ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール

各 CD-ROM のコンテンツをシステムのハード・ドライブにコピーすると、インストール中に CD-ROM をマウントおよびアンマウントする必要がなくなります。他のアプリケーションによって使用されていないファイル・システムおよび十分なディスク領域が必要です。

1. システムのハード・ドライブに各 CD-ROM をコピーします。1 枚目の CD-ROM を Disk1 という名前のディレクトリにコピーし、2 枚目の CD-ROM を Disk2 という名前のディレクトリにコピーします（セットに含まれる一連の CD-ROM の数に応じて以下同様にコピーします）。
2. Oracle Universal Installer を起動します。Oracle Universal Installer によって各 CD-ROM のコンテンツが自動的に検出されるため、インストール中に CD-ROM の位置の入力を求めるプロンプトは表示されません。

### 参照：

- プラットフォームに対するハードディスク要件については、2-2 ページの「[ハードウェア要件](#)」を参照してください。
- CD-ROM のマウントおよびアンマウントについては、4-2 ページの「[CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

## Oracle Universal Installer の概要

Oracle Collaboration Suite は、Oracle Universal Installer を使用して、インストール・プロセスを手順ごとにガイドします。Oracle Universal Installer の機能は次のとおりです。

- Oracle Collaboration Suite インストール・オプションの説明
- 事前設定された環境変数および構成設定の検出
- インストール中の環境変数および構成の設定
- Oracle Collaboration Suite 製品の削除

この項では、Oracle Universal Installer の次の機能について説明します。

- [Oracle Universal Installer の前提条件の確認](#)
- [oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)
- [Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール](#)

## Oracle Universal Installer の前提条件の確認

Oracle Universal Installer は、インストール前にコンピュータを自動的にチェックして、システムが動作要件を満たしていることを確認します。表 4-2 に、実行される前提条件の確認を示します。

**表 4-2 Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認**

前提条件の確認	参照
Oracle ホームのインストールに十分なディスク領域があるかどうかの確認	2-2 ページの表 2-1 「Oracle Collaboration Suite のハードウェア要件」
TMP (/var/tmp) 変数の確認および十分なスワップ領域があるかどうかの確認	2-2 ページの表 2-1 「Oracle Collaboration Suite のハードウェア要件」
インストール・ホストに十分な RAM が搭載されているかどうかの確認	2-2 ページの表 2-1 「Oracle Collaboration Suite のハードウェア要件」
1 つの Oracle9iAS Infrastructure がインストールされているかどうかの確認	第 1 章 「インストールの概要」
/etc/hosts ファイルの確認	2-17 ページの 「ホスト名ファイルの構成」
パッチが適用されていないバージョン 9.0.2.0.0 の Oracle9iAS Infrastructure が検出された場合における Oracle9iAS Infrastructure のインストールの禁止	3-13 ページの 「Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 のアップグレード」
Solaris の動作環境が 32 ビット、バージョン 2.6 以上であるかどうかの確認	2-4 ページの 「オペレーティング・システムのバージョン」

表 4-2 Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認（続き）

前提条件の確認	参照
モニターに 256 色カラー表示機能があるかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」
正しい Solaris カーネル・パッチがインストールされているかどうかの確認	2-4 ページの「ランダム・アクセス・メモリーの確認」
CPU の動作要件の確認	2-2 ページの表 2-1 「Oracle Collaboration Suite のハードウェア要件」

**参照：** Oracle Collaboration Suite の各インストール用のインストール・チェックリストは、付録 A 「インストール・チェックリスト」を参照してください。

## oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル

Oracle Universal Installer をコンピュータ上で初めて実行すると、oraInventory ディレクトリが作成されます。oraInventory ディレクトリには、Oracle Universal Installer がコンピュータ上にインストールした製品のインベントリ、および他のインストール情報が保持されます。インストール済の Oracle 製品が存在する場合は、すでに oraInventory ディレクトリが存在している可能性があります。

Oracle Universal Installer を所有する UNIX グループには、oraInventory ディレクトリへの書き込み権限が付与されている必要があります。この権限なしで Oracle Universal Installer を実行すると失敗します。詳細は、2-18 ページの「Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名」を参照してください。

表 4-3 に示すとおり、oraInventory の位置は、オペレーティング・システムによって異なります。

表 4-3 oraInventory の位置

プラットフォーム	oraInventory の位置
Solaris	/var/opt/oracle/oraInst.loc
HP 9000 Series HP-UX	/var/opt/oracle/oraInst.loc
Linux Intel	/etc/oraInst.loc

最新のインストールに関するログ・ファイルの位置を次に示します。

```
/your_base_directory/oraInventory/logs/installActionstodays_date_time.log
```

ここで、`your_base_directory` 識別子はインストール・ファイルの位置を示し、`today's_date_time` はインストールの日時を示します。

oraInventory ディレクトリまたはこのディレクトリの内容を削除、または手動で変更しないでください。Oracle Universal Installer で、システム上にインストールした製品を検出できなくなる可能性があります。

---

---

**注意：** \$ORACLE\_HOME/install ディレクトリ内の make.log ファイルには、インストール中に実行されたすべてのファイル作成操作が記録されます。また、make.log ファイルには、インストール中に発生したすべてのリンク・エラーも記録されます。make.log ファイルは削除または変更しないでください。

---

---

## Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール

同じホスト上に後続の Oracle Collaboration Suite または Oracle9iAS Infrastructure をインストールする場合は、次の手順を実行することをお勧めします。

- [第2章「インストールの準備」](#)に示すインストール前タスクを再確認します。
- 後続の Oracle Collaboration Suite をインストールする場合は、/var/opt/oracle ディレクトリを削除または変更しないでください。
- Oracle Enterprise Manager Web Site を停止します。詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- インストールの開始時に、事前にインストールされた他のすべての Oracle Collaboration Suite インスタンスが実行されていることを確認します。
- 最初にインストールした Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームとは別の Oracle ホームを指定します。
- 後続の Oracle Collaboration Suite のインストールに同じ oraInventory ディレクトリを使用します。
- [第3章「配置」](#)を参照して、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが問題なく共存していることを確認します。

**参照：** 4-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

## Oracle Universal Installer の起動

---

---

**注意：** Oracle Universal Installer は、オラクル社が提供する Java Runtime Environment (JRE) を自動的にインストールします。この JRE では、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle アシスタントを実行する必要があります。JRE を変更する場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターが提供するパッチを使用してください。Oracle Universal Installer は、Linux および Solaris 上に JDK 1.3.1 もインストールします。HP では、Oracle Universal Installer によって、JDK 1.3.1 のダウンロード位置またはインストール位置を入力するためのプロンプトが表示されます。

---

---

**参照：** この項で説明するインストール手順中に入力する情報については、Oracle Universal Installer のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Universal Installer を起動して、Oracle Collaboration Suite の各インストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. 第 2 章「インストールの準備」に示すすべての要件を満たしていることを確認します。
2. 付録 A「インストール・チェックリスト」に示す各インストールのインストール・チェックリストを出力し、確認を完了します。確認する値の多くは、他のインストールを完了するためにも必要です。
3. oracle ユーザーとしてログインします。

---

---

**注意：**

- Oracle Universal Installer の起動時に root ユーザーとしてログインしていないことを確認します。root ユーザーとしてログインしている場合は、Oracle Collaboration Suite を管理する権限が root ユーザーのみに付与されます。
  - Oracle Universal Installer の起動時に `mount_point` を作業ディレクトリとして使用しないでください。使用すると、インストール手順を実行中に 1 枚目の CD-ROM を取り出せなくなり、2 枚目の CD-ROM を挿入できません。
  - 同じホスト上に追加の Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールおよび構成する場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用することをお勧めします。
- 
- 

4. 適切なインストールの 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。

5. オペレーティング・システムに応じて、4-2 ページの「[CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)」に示すインストール用の CD-ROM をマウントします。
6. Oracle Universal Installer を起動するディレクトリに移動します。次の表に、ディレクトリを移動するためのコマンドを示します。

コンポーネント	入力コマンド
Oracle9iAS Infrastructure	<code>\$mount_point_directory/ocs_infr_cd1</code>
Oracle Collaboration Suite	<code>\$mount_point_directory/ocs_mt_cd1</code>
Oracle Collaboration Suite Information Storage	<code>\$mount_point_directory/ocs_stor_cd1</code>
Oracle Collaboration Suite Interoperability	<code>\$mount_point_directory/ocs_interop</code>
Oracle Collaboration Suite Client	<code>\$mount_point_directory/ocs_clients</code>

7. 次のいずれかのコマンドを入力して、Oracle Universal Installer を起動します。
  - `./runInstaller`
  - `./runInstallerNLS`

---

**注意：** `runInstallerNLS` コマンドを入力すると、10 種類の言語をサポートするユーザー・インタフェースがインストールされます。サポートされる言語のリストは、2-13 ページの「[多言語サポート](#)」を参照してください。`runInstaller` コマンドを入力すると、英語のみをサポートするユーザー・インタフェースがインストールされます。

---

8. Oracle Universal Installer の起動後、「ようこそ」画面が表示されます。
9. 「次へ」をクリックします。  
このコンピュータに最初に Oracle ソフトウェアをインストールした場合は、「インベントリの場所」画面が表示されます。
10. インストール・ファイルのベース・ディレクトリの位置を確認します。詳細は、4-10 ページの「[oralInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

---

---

**注意：** クラスタに Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールする場合、「クラスタ・ノードの選択」画面が表示されます。Oracle ソフトウェアをインストールするノードを選択します。Oracle Real Application Clusters ソフトウェアは、Oracle Universal Installer が実行されるノード上にインストールされ、クラスタ内の選択された他のノードにコピーされます。デフォルトでは、常に、ローカル・ノードが選択されません。

クラスタ上に Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite はインストールしないでください。クラスタ上には Oracle Collaboration Suite Information Storage のみをインストールできます。

---

---

**参照：** Oracle Real Application Clusters のインストールの詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』(Oracle Technology Network Japan で入手可能) を参照してください。

11. 「次へ」をクリックします。  
「UNIX グループ名」画面が表示されます。
12. oinstall グループを指定します。このグループのメンバーには、システム上の Oracle ソフトウェアを更新する権限が付与されます。oraInventory ファイルの所有者として指定するグループが不明な場合は、2-18 ページの「[Oracle Universal Installer インベントリ用の UNIX グループ名](#)」を参照してください。
13. 「次へ」をクリックします。  
次の場合は、「Oracle Universal Installer」画面が表示されます。
  - /etc ディレクトリが存在しないか、あるいは HP または Linux 上の oracle ユーザーによる書込みが不可能な場合
  - /var/opt/oracle/ ディレクトリが存在しないか、または oracle ユーザーによるこのディレクトリへの書込みが不可能な場合
14. root ユーザーとして、別のターミナル・ウィンドウで /tmp/OraInstall/orainstRoot.sh スクリプトを実行します。スクリプトの実行の終了後、「再試行」をクリックしてインストールを続行します。  
「ファイルの場所」画面が表示されます。
15. Oracle インストールのソース・パス、インストール先の名前およびインストール先のパスを確認します。ソース・パスは、インストールするコンポーネント用の product.jar ファイルの位置を示します。インストール先の名前はインスタンス名を示し、インストール先のパスは Oracle ホームの位置を示します。
16. 「次へ」をクリックします。
17. [第 5 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)に進みます。

---

---

# Oracle Collaboration Suite のインストール

この章では、Oracle Collaboration Suite のインストール手順を説明します。この章に示す順序で手順を実行することをお勧めします。

- [インストール前手順](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite のインストール](#)

---

---

**注意：** この章で説明するインストール手順を開始するには、まず、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」で説明するインストール手順を完了しておく必要があります。

---

---

## インストール前手順

まず、4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」で説明されている次のインストール手順を完了していることを確認します。

- [第2章「インストールの準備」](#)で説明されているインストール計画のすべての要件を満たしている。
- [付録 A「インストール・チェックリスト」](#)に示す各インストールのインストール・チェックリストを出力し、確認を完了している。
- Oracle Universal Installer を起動し、適切な CD-ROM をマウント、取出しできる。
- Oracle Universal Installer の初期インストール画面の指示に従っている。

これらの手順の完了後、この章で説明するインストール手順を開始できます。

## Oracle9iAS Infrastructure のインストール

4-14 ページの手順 16 で、「ファイルの場所」画面の「[次へ](#)」を選択すると、次のいずれかの画面が表示されます。

- 既存の Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 または 9.0.2.0.1 をアップグレードする場合は、「Specify Oracle Internet Directory Connection Information」画面が表示されるので、手順 1 に進みます。
  - 新しい Oracle9iAS Infrastructure をインストールする場合は、「構成オプションの選択」画面が表示されるので、手順 7 に進みます。
1. Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー名とパスワードを入力します。
  2. 「[次へ](#)」をクリックします。  
「Oracle Infrastructure Database」画面が表示されます。
  3. 既存の Oracle9iAS Infrastructure の SYS パスワードを入力します。  
デフォルトの SYS パスワードは、change\_on\_install です。
  4. 「[次へ](#)」をクリックします。  
「9iAS Infrastructure データベースの停止」画面が表示されます。
  5. すべての既存の Oracle9iAS Infrastructure プロセスを停止します。
  6. 「[次へ](#)」をクリックします。
    - 既存の Oracle9iAS Infrastructure をアップグレードする場合は、「サマリー」画面が表示されるので、手順 21 に進みます。
    - 新しいインフラストラクチャをインストールする場合は、「構成オプションの選択」画面が表示されるので、手順 7 に進みます。

7. 要件を満たす構成を選択します。

この画面には、「**デフォルト**」および「**選択の指定**」のラベルが付いた2つのオプションが表示されます。

- 「**デフォルト**」をクリックすると、Oracle9iAS Metadata Repository、Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On がインストール・プロセスの最後に自動的にインストールおよび構成されます。手順 8 に進みます。
- 「**選択の指定**」をクリックすると、要件を満たすインストールが構成されます。既存の Oracle Internet Directory または Oracle9iAS Single Sign-On Server を使用する場合は、選択を解除します。Oracle Management Server を構成する場合は、これを選択します。詳細は、3-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure の配置](#)」を参照してください。手順 8 に進みます。

この手順で Oracle9iAS Infrastructure コンポーネントを選択した場合、Oracle Universal Installer は、このコンポーネントをインストールした後、起動および構成します。この手順でコンポーネントを選択解除した場合、Oracle Universal Installer は、このコンポーネントをインストールしますが、構成または起動しません。このコンポーネントを後で使用する場合は、Oracle Enterprise Manager Web Site を起動して、コンポーネントを構成します。

---

---

**注意：**

- Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On は、インストールする必要があります。これらのコンポーネントは、ネットワーク上に構成する必要があります。
  - Oracle9iAS Metadata Repository は、常に、Oracle9iAS Infrastructure のインストール中に自動的に構成および起動されます。選択の解除はできません。
- 
- 

8. 「**次へ**」をクリックします。

- Oracle Internet Directory を構成せず、Oracle9iAS Metadata Repository または Oracle Management Server (あるいはその両方) を構成した場合は、「既存の Oracle9iAS Single Sign-On」画面が表示されます。手順 9 に進みます。
- Oracle Internet Directory を構成せず、Oracle9iAS Single Sign-On を構成した場合は、「既存の Oracle Internet Directory」画面が表示されます。手順 10 に進みます。

9. Oracle9iAS Infrastructure のインストールで使用する Oracle9iAS Single Sign-On の既存のインスタンスの**ホスト名**および**ポート**番号を入力します。手順 11 に進みます。

---

---

**注意：** Oracle9iAS Single Sign-On をインストールしていない場合は、「構成の選択」画面に戻り、Oracle9iAS Single Sign-On のデフォルトの構成オプションを選択します。手順 13 に進みます。

---

---

10. Oracle9iAS Infrastructure のインストールで使用する Oracle Internet Directory の既存のインスタンスの**ホスト名**、**ポート**番号、ユーザー名およびパスワードを入力します。手順 11 に進みます。

---

---

**注意：** Oracle Internet Directory をインストールしていない場合は、「構成の選択」画面に戻り、Oracle Internet Directory のデフォルトの構成オプションを選択します。手順 13 に進みます。

---

---

11. 「次へ」をクリックします。

- このホスト上の異なる Oracle ホームで、インストール済の Oracle9iAS Infrastructure を検出した場合は、「インスタンス名の作成」画面が表示されます。手順 12 に進みます。
- このホストに最初に Oracle9iAS Infrastructure をインストールした場合は、「インスタンス名および ias\_admin パスワードの作成」画面が表示されます。手順 13 に進みます。

12. 一意のインスタンス名およびこのホストの既存の ias\_admin パスワードを入力して、インストールを続行します。インスタンス名には、英数字およびアンダースコア文字のみを使用する必要があります。手順 14 に進みます。

インストール後に ias\_admin ユーザーのパスワードを忘れた場合は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』に示す手順を参照してパスワードを再設定できます。

13. 必要な情報を入力します。入力後、手順 14 に進みます。

- Oracle9iAS Infrastructure のインストールの一意の**インスタンス名**を入力します。インスタンス名には、英数字およびアンダースコア文字のみを使用する必要があります。インスタンス名は、このホストで Oracle9iAS Infrastructure のインストールを識別するために使用されます。
- Oracle9iAS Infrastructure のインスタンスの **ias\_admin パスワード**を入力し、確認のためにパスワードを再入力します。ias\_admin パスワードは、5 文字以上の英数字で構成されている必要があります。また、1 文字以上の数字を含める必要があります。

ias\_admin パスワードを使用すると、インストール・ホスト全体での Oracle9iAS Infrastructure のすべてのインスタンスの管理、管理ツールの実行および Oracle Enterprise Manager Web Site へのアクセスが可能になります。また、将来のインストールを簡単に実行できます。

---

---

**注意：** このインストールの一部として Oracle Internet Directory を構成する場合は、デフォルトで、デフォルトの管理ユーザー `orcladmin` に `ias_admin` ユーザーと同じパスワードが割り当てられます。

---

---

14. 「次へ」をクリックします。

「権限付きオペレーティング・システム・グループ」画面が表示されます。

この画面は、`oracle` アカウントが `dba` グループのメンバーでない場合にのみ表示されます。

15. Oracle9iAS Metadata Repository をインストールするためのデータベース管理者およびオペレータ・グループの名前を入力します。権限付きグループの名前の詳細は、2-19 ページの「[権限が付与されたグループの UNIX グループ名](#)」を参照してください。

16. 「次へ」をクリックします。

「データベース・キャラクタ・セット」画面が表示されます。

17. 使用するデータベース・キャラクタ・セットを選択します。

■ Default character set

インストールするオペレーティング・システムの言語に基づきます。データを1つの言語で格納する場合、デフォルトのデータベース・キャラクタ・セットを使用します。

■ Unicode as the character set

複数の言語グループを格納できます。

■ 次のキャラクタ・セットから選択

「ヘルプ」をクリックして、使用可能な一般的キャラクタ・セットのリストを表示します。

---

---

**注意：**

- 多言語サポートをインストールする場合は、UTF8 キャラクタ・セットを選択します。
  - デフォルトのキャラクタ・セットに含まれない文字を使用する必要がある場合は、問題が発生する可能性があります。
- 
-

18. 「次へ」をクリックします。

HP-UX 上にインストールする場合は、「Choose JDK Home Directory」画面が表示されます。

19. JDK 1.3.1 をインストールするディレクトリのフルパスを入力します。

20. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。

21. 「サマリー」画面を確認します。この画面には、インストール開始前のすべての設定が表示されます。これらの設定には、インストール元、インストール先、インストール・タイプ、製品の言語、インストール・ファイルのサイズおよび Oracle9iAS Infrastructure コンポーネントのリストが含まれます。これらの設定を変更するには、「戻る」をクリックして、それぞれの画面に戻ります。

---

---

**注意：** 十分なディスク領域が存在しない場合は、「必要な領域」の下に赤色で表示されます。

---

---

22. 「インストール」をクリックして、インストール・プロセスを開始します。

製品のインストール中に、「インストール」画面が表示されます。「インストール」画面には、ファイルのコピー、リンク付けなどの操作、選択した項目および進行状況 (%) および計算の実行を含む、インストール操作が表示されます。この画面には、インストール・ログのフルパスが表示されます。

「取消」をクリックすると、インストール・プロセスが中断されます。その後、個々のコンポーネントのインストールを停止するか、または製品全体のインストールを停止するかを選択できます。

23. CD-ROM からインストールを実行している場合は、追加のディスクを挿入するように求められます。CD-ROM の取出しおよび挿入については、4-2 ページの「CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール」を参照してください。

インストール中に、Oracle Universal Installer によって、root.sh スクリプトを実行するように求められます。root.sh スクリプトは、環境変数 ORACLE\_OWNER、ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID の設定、およびローカルの bin ディレクトリのフルパスを検出します。デフォルトを使用するか、またはローカルの別の bin ディレクトリに変更できます。

- a. root ユーザーとしてログインします。

- b. 次のとおり入力して、Oracle ホーム・ディレクトリで root.sh スクリプトを実行します。

```
prompt> ORACLE_HOME/root.sh
```

- c. 「Finished running generic part of the root.sh script」および「Now product-specific root actions will be performed」と表示された後で、root ユーザーを終了して「インストール」画面に戻ります。
- d. Oracle Universal Installer の終了後、「次へ」をクリックします。

構成および起動する Oracle9iAS Infrastructure コンポーネントの「Components Configuration and Startup」画面が表示されます。この画面には、インストールされたすべてのコンポーネントの構成ツールが表示されます。選択した構成に応じていくつかのコンポーネント構成画面が表示されますが、入力には不要です。

**24. Oracle9iAS Infrastructure 構成ツールのステータスを再確認します。**

Oracle Universal Installer は、「構成オプションの選択」画面で選択した各コンポーネントの構成ツールを実行します。

この画面では、特定の構成プロセスを停止するか、または実行の失敗に関するデータを表示することができます。エラーを修正して「**再試行**」をクリックし、構成ツールを再実行するか、またはエラーを無視できます。「**中止**」をクリックして、構成プロセスを終了します。

**25. 「次へ」をクリックします。**

「インストールの終了」画面が表示されます。

この画面には、Oracle HTTP Server ページおよび Oracle Enterprise Manager Web Site にアクセスするための URL およびポート番号が表示されます。デフォルトの Oracle HTTP Server ページは、Oracle Collaboration Suite の「ようこそ」ページです。このページには、新機能のコンポーネント・デモンストレーション、デフォルトのポート割当ておよび情報へのリンクがあります。

**26. 「インストールの終了」画面を再確認します。**

- 「**リリース情報**」をクリックすると、「Oracle Collaboration Suite Welcome page」にアクセスします。
- 「**次のインストール**」をクリックすると、追加の Oracle9iAS Infrastructure インスタンスをインストールします。
- 「**終了**」をクリックすると、Oracle Universal Installer を終了します。

**参照：** Oracle Universal Installer を使用してシステム上にインストールしたコンポーネントのインベントリを保持するために作成したログ・ファイルについては、4-10 ページの「**oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル**」を参照してください。

## Oracle9iAS Infrastructure の追加のドキュメント

インストール後のタスクおよび構成タスクの詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』およびコンポーネント固有のドキュメントを参照してください。ドキュメントへのアクセスについては、付録 E「Oracle Collaboration Suite ドキュメント」を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール

Oracle9iAS Infrastructure がインストール済であることを確認します。

4-14 ページの手順 16 で、「ファイルの場所」画面の「次へ」をクリックすると、「Database Configuration Types」画面が表示されます。次の手順を実行して、情報ストレージ・データベースをインストールします。

1. 要件を満たす構成を選択します。

選択するデータベース構成	Oracle Universal Installer の動作
Email Store	Oracle Email で使用するために、UTF8 キャラクタ・セットでチューニング済のシード・データベースをインストールします。
Files Store	Oracle Files で使用するために、UTF8 キャラクタ・セットでチューニング済のシード・データベースをインストールします。
Software Only	ソフトウェアをインストールするのみで、構成ツールは実行しません。インストール後に Database Configuration Assistant を起動し、データベースを作成します。

**参照：** 5-11 ページの「既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール」を参照してください。

2. 「次へ」をクリックします。
3. oracle アカウントが、2-19 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」で作成された OSDBA グループのメンバーでない場合、または OSDBA グループとして機能する dba 以外の名前を持つ UNIX グループが存在する場合は、「権限付きオペレーティング・システム・グループ」画面が表示されます。

OSDBA グループとして機能する UNIX グループ名を入力します。OSOPER グループとして機能する個別の UNIX グループが存在する場合は、この画面でその UNIX グループも指定します。

4. 「次へ」をクリックします。
  - 手順 1 で「**Email Store**」または「**Files Store**」を選択した場合、「データベースの識別」画面が表示されます。手順 6 に進みます。
  - 手順 1 で「**Email Store**」または「**Files Store**」を選択し、コンピュータ上で既存のデータベースが検出された場合、「Upgrade Existing Database」画面が表示されま  
す。手順 5 に進みます。
  - 手順 1 で「**Software Only**」を選択した場合、「サマリー」画面が表示されます。手  
順 13 に進みます。
5. 「**既存のデータベースをアップグレードします。**」チェックボックスを選択し、インス  
トール直後に既存のデータベースを Oracle9i データベースにアップグレードします。  
「次へ」をクリックして、手順 13 に進みます。  
  
既存のデータベースをアップグレードしない場合は、「次へ」をクリックして、手順 6  
に進みます。
6. 「**グローバル・データベース名**」フィールドで、ネットワーク・ドメイン内の他のデー  
タベースと一意に区別される完全なデータベース名を入力します。次に例を示します。  
  
`sales.acme.com`  
  
ここで、`sales` はデータベースの名前を示し、`acme.com` はデータベースが存在する  
ネットワーク・ドメインを示します。
7. 「**SID**」（システム識別子）フィールドで、システム内の他のデータベースと一意に区別  
されるデータベース・インスタンス名を入力します。  
  
「**SID**」フィールドは、入力したデータベース名の長さが 8 文字に達するか、ピリオドま  
たはアンダースコアを入力しないかぎり、デフォルトでグローバル・データベース名の  
データベース名部分（前述の例では `sales`）に設定されます。デフォルト値を使用する  
か、またはデフォルト値を変更できます。
8. 「次へ」をクリックします。  
  
「データベース・ファイルの場所」画面が表示されます。
9. 「**データベース・ファイルのディレクトリ**」フィールドで、データベース・ファイルを  
インストールするディレクトリを入力します。または、「参照」をクリックして、デー  
タベース・ファイルをインストールするディレクトリにナビゲートします。
10. 「次へ」をクリックします。  
  
HP-UX 上にインストールする場合は、「Choose JDK Home Directory」画面が表示され  
ます。
11. JDK 1.3.1 をインストールするディレクトリのフルパスを入力します。
12. 「次へ」をクリックします。  
  
「サマリー」画面が表示されます。

13. 情報を再確認して、十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」をクリックします。
- 「インストール」画面が表示され、画面にプログレス・バーが表示されます。Oracle Universal Installer では、インストールおよび再リンクのフェーズが実行されるため、各フェーズの完了にあわせてプログレス・バーが変化します。
14. CD-ROM からインストールを実行している場合は、追加のディスクを挿入するように求められます。CD-ROM の取出しおよび挿入については、4-2 ページの「CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール」を参照してください。
15. `root.sh` スクリプトを実行するように求められた場合は、実行します。
- Oracle Universal Installer は、Oracle ホーム・ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle コンポーネントのインストールが終了すると、このスクリプトを実行するように求めます。`root.sh` スクリプトは、Oracle コンポーネントに必要なファイルの権限を設定し、他の `root` 関連の構成アクティビティを実行します。
- a. `root` ユーザーとしてログインします。
  - b. 次のとおりスクリプトを実行します。
 

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```
  - c. Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、クラスタのすべてのノード上で `root.sh` スクリプトを実行する必要があります。
  - d. `root.sh` スクリプトが正常に終了した後、Oracle Universal Installer に戻り、「警告」画面で「OK」をクリックします。
16. 前の画面での選択に応じて、インストールの最後に「構成ツール」画面が表示されます。構成アシスタントは、データベースおよびネットワーク環境の作成および構成に有効です。次に、各アシスタントを示します。

アシスタント	起動条件	目的
Oracle Cluster Configuration Assistant	クラスタ上での Oracle Universal Installer の起動時。5-8 ページの手順 1 で「Software Only」を選択した場合、このアシスタントは表示されません。	インストール用に選択したすべてのノードでグローバル・サービス・デーモン (GSD) を起動します。
Oracle Net Configuration Assistant	5-8 ページの手順 1 で「Software Only」を選択した場合を除くすべての場合。	ネットワークを自動的に構成します。

アシスタント	起動条件	目的
Database Configuration Assistant	5-9 ページの手順 6 で既存のインスタンスをアップグレードしないように選択し、5-8 ページの手順 1 で「 <b>Software Only</b> 」を選択しなかった場合。	Oracle9i データベースを自動的に作成します。SYS および SYSTEM ユーザーのパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。 <b>注意:</b> Oracle Email を構成する場合は、CTXSYS ユーザーをロック解除する必要があります。詳細は、5-12 ページの「 <a href="#">Oracle Email のインストール後のタスク</a> 」を参照してください。
Oracle Intelligent Agent Configuration Assistant	5-8 ページの手順 1 で「 <b>Software Only</b> 」を選択した場合を除くすべての場合。	Intelligent Agent サービスを自動的に起動します。
Database Upgrade Assistant	5-9 ページの手順 5 でデータベースをアップグレードするように選択した場合。	選択したデータベースを Oracle9i にアップグレードします。

**注意:** 現在データベースをインストール中で、インストール後に管理ユーザー・パスワードをロック解除する場合は、「Database Configuration Assistant」画面で「**Password Management**」ボタンをクリックします。

構成アシスタントに障害が発生した場合は、「構成ツール」画面に障害の原因が表示されます。障害の原因を修正し、「**再試行**」をクリックして再インストールするか、または「**次へ**」をクリックして続行します。

- 構成アシスタントが正常に終了した場合は、「インストールの終了」画面が表示されます。「**終了**」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、または「**次のインストール**」をクリックして追加のコンポーネントをインストールします。「**次のインストール**」をクリックすると、Oracle Universal Installer の「ファイルの場所」画面に戻ります。

**参照:** Oracle Universal Installer を使用してシステム上にインストールしたコンポーネントのインベントリを保持するために作成したログ・ファイルについては、4-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

## 既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール

同じ Oracle ホームに複数のデータベースをインストールできます。

次のいずれかのソフトウェア CD-ROM で、初期データベースをインストールするか、または「**Software Only**」データベース構成オプションを選択します。

- Oracle Collaboration Suite Information Storage
- Oracle9i データベース

---

---

**重要：** 本番環境では、1つの Oracle ホームに複数のデータベースをインストールしないことをお勧めします。この構成は、評価を目的とした場合にのみお勧めします。

---

---

1. ソフトウェアをインストールした後、Database Configuration Assistant を実行します。  
`$ORACLE_HOME/bin/dbca`
2. 「**Create a new database**」を選択します。
3. 「**次へ**」をクリックします。
4. プロンプトに対し、作成するデータベース構成タイプを選択します。
5. Oracle ホームの名前、インスタンス名などの質問に答えます。

Oracle Universal Installer と同じ方法で、データベースが Database Configuration Assistant によって作成されます。

**参照：** Oracle9i データベースのインストール用 CD-ROM からデータベースをインストールする場合に必要なチューニング・パラメータについては、3-23 ページの「[データベースのチューニング](#)」を参照してください。

## Oracle Email のインストール後のタスク

次の項では、Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory に Oracle Email データベースを登録する方法を説明します。

- [Oracle Net Configuration Assistant の実行](#)
- [Database Configuration Assistant の実行](#)
- [Oracle Internet Directory の構成の確認](#)
- [CTXSYS ユーザー・パスワードのロック解除](#)

---

---

**注意：** Oracle Net Configuration Assistant および Database Configuration Assistant の両方を、oracle ユーザー・アカウントで実行する必要があります。

---

---

## Oracle Net Configuration Assistant の実行

1. \$ORACLE\_HOME/bin ディレクトリに移動します。
2. 次のとおり Oracle Net Configuration Assistant を起動します。  

```
netca
```

「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「**Directory Usage Configuration**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
4. 使用するディレクトリ・サーバーを選択します。ディレクトリ・サーバーは、Oracle で使用可能なように構成済である必要があります。
5. 「**次へ**」をクリックします。
6. 使用するディレクトリ・サーバーのタイプとして Oracle Internet Directory を選択します。
7. 「**次へ**」をクリックします。
8. Oracle Internet Directory の**ホスト名**、**ポート**および SSL ポートを入力します。
9. 「**次へ**」をクリックします。
10. ディレクトリ・サーバーのデフォルトの Oracle コンテキストとして **cn=OracleContext** を選択します。

---

---

**注意：** **cn=OracleContext,subscriber\_specific\_DN** は選択しないでください。

---

---

11. 「**次へ**」をクリックします。
12. Oracle Net Configuration Assistant の構成の終了に進みます。  
これによって、\$ORACLE\_HOME/network/admin ディレクトリに Oracle Internet Directory サーバーおよびポート番号を指定する ldap.ora ファイルが作成されます。
13. Oracle Net Configuration Assistant を終了します。

## Database Configuration Assistant の実行

1. \$ORACLE\_HOME/bin ディレクトリに移動します。
2. 次のとおり Database Configuration Assistant を起動します。  

```
dbca
```
3. 「**Configure database options in a database**」を選択します。
4. 「**次へ**」をクリックします。

5. 構成する Oracle Email データベースの SID を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。

---

**注意：** SID が表示されない場合は、/var/opt/oracle ディレクトリの oratab ファイルを確認します。

---

7. 「Yes, register the database」オプションを選択します。
  - a. 「User DN」フィールドで **cn=orcladmin** と入力します。
  - b. 「User DN」フィールドに入力した名前のパスワードを入力します。
8. 「完了」をクリックします。

「Restart Database」画面が表示されます。
9. 「はい」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。
10. 「OK」をクリックします。

「Database Configuration Assistant」画面にデータベース構成の処理過程が表示されま
11. 構成の完了後、Database Configuration Assistant を終了します。

## Oracle Internet Directory の構成の確認

1. oidadmin を実行します。oidadmin の実行については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。
2. Oracle Internet Directory サーバーにログインし、cn=oraclecontext 下で、5-13 ページの手順 4 で選択した Email Store の SID を確認します。

## CTXSYS ユーザー・パスワードのロック解除

「Password Management」を選択して CTXSYS ユーザー・パスワードをロック解除および設定していない場合は、次のコマンドを入力します。

```
prompt> sqlplus 'sys/change_on_install@dbsid AS SYSDBA'
```

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースまたは Oracle9i リリース 2 (9.2) データベースをインストールした場合、パスワードはデータベース構成プロセスの最後に設定されます。9.2 より前のデータベースをインストールした場合、デフォルトのパスワードは change\_on\_install です。

```
SQL> ALTER USER ctxsys IDENTIFIED BY ctxsys ACCOUNT UNLOCK;
```

これによって、パスワードが CTXSYS に設定され、CTXSYS アカウントがロック解除されます。

```
SQL> CONNECT ctxsys/ctxsys
SQL> EXIT
```

---

**注意：** Oracle Collaboration Suite 中間層のインストール後、『Oracle Email 管理者ガイド』および『Oracle Email 管理者ガイド追加情報』の説明に従って、Oracle Email の追加の手順を完了する必要があります。詳細は、5-19 ページの表 5-1 を参照してください。

---

**参照：** 5-15 ページの「Oracle Collaboration Suite のインストール」を参照してください。

## Oracle Files のインストール後のタスク

Oracle Files と Oracle Workflow を統合すると、Oracle Files に組み込まれたコンテンツ承認機能およびコンテンツ・ルーティング機能にアクセスできるようになります。Oracle Workflow を自動的に統合するには、Oracle Files を構成する前に Oracle Workflow をインストールおよび構成する必要があります。構成後に Oracle Workflow を手動で統合することはできますが、お薦めしません。構成後の手順として Oracle Workflow と Oracle Files を統合する方法については、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

**参照：** Oracle Workflow の構成手順については、『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』の第 3 章を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite のインストール

インストールする前に、次の手順を実行します。

- Oracle Collaboration Suite 中間層のインスタンスをインストールする前に、ネットワーク上に Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をインストールおよび構成済であることを確認します。
- このアプリケーション中間層のインスタンスに Oracle Email または Oracle Files を構成する場合は、Oracle9i データベースをネットワーク上にインストールおよび構成済であることを確認します。Oracle Email および Oracle Files 用に別々にデータベースをインストールおよび構成することをお薦めします。
- このアプリケーション中間層のインスタンスに Oracle Files を構成する場合は、第 6 章に示す Oracle Files の構成前のタスクを完了していることを確認します。

**参照：**

- Oracle Email または Oracle Files 用のチューニング済のデータベースのインストールについては、5-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール](#)」を参照してください。このデータベースは、チューニング不要です。
- Oracle Email および Oracle Files のデータベース要件については、3-23 ページの「[データベースのチューニング](#)」を参照してください。
- 6-2 ページの「[Oracle Files の構成前のタスク](#)」を参照してください。

4-14 ページの手順 16 で、「ファイルの場所」画面の「**次へ**」を選択すると、「構成オプションの選択」画面が表示されます。次の手順を実行して、アプリケーション中間層をインストールします。

1. コンピュータ上に構成するコンポーネントを選択します。「構成オプションの選択」画面に次の構成オプションが表示されます。
  - Oracle Email
  - Oracle Files  
Oracle Collaboration Suite Search を使用可能にするには、Oracle Files を構成する必要があります。
  - Oracle Wireless & Voice
  - Oracle9iAS Portal  
Oracle Ultra Search を自動的に構成するには、Oracle9iAS Portal を構成するように選択します。Oracle Ultra Search を手動で構成するには、『Oracle Ultra Search User’s Guide』を参照してください。
  - Oracle Calendar  
すべての Oracle Collaboration Suite 中間層アプリケーションは、Oracle Collaboration Suite をインストールするたびにインストールされます。コンポーネントの構成を選択解除した場合は、インストール後にそのコンポーネントを構成できます。
2. 「**次へ**」をクリックします。  
「既存の Oracle9iAS Single Sign-On」画面が表示されます。Oracle9iAS Single Sign-On をインストールしていない場合は、Oracle Universal Installer を終了し、Oracle9iAS Infrastructure をインストールすることによってこのコンポーネントをインストールします。
3. Oracle Collaboration Suite のインストールで使用する Oracle9iAS Single Sign-On の既存のインスタンスの**ホスト名**および**ポート**番号を入力します。
4. 「**次へ**」をクリックします。

「Oracle Internet Directory」画面が表示されます。

5. 既存の Oracle Internet Directory インスタンスのユーザー名およびパスワードを入力します。
6. 「次へ」をクリックします。

「インスタンス名および `ias_admin` パスワードの作成」画面が表示されます。この画面は、ホスト上に Oracle Collaboration Suite を最初にインストールする場合に表示されず。

- a. 「**インスタンス名**」フィールドで Oracle Collaboration Suite のインストールの一意の名前を入力します。一意の**インスタンス名**によって、インストール・ホスト上で Oracle Collaboration Suite のインストールが識別されます。インスタンス名には、英数字およびアンダースコア文字のみを使用する必要があります。
- b. Oracle9iAS Infrastructure のインスタンスの **ias\_admin パスワード** を入力し、確認のためにパスワードを再入力します。ias\_admin パスワードは、5 文字以上の英数字で構成されている必要があります。また、1 文字以上の数字を含める必要があります。

ias\_admin パスワードを使用すると、インストール・ホスト全体での Oracle9iAS Infrastructure のすべてのインスタンスの管理、管理ツールの実行および Oracle Enterprise Manager Web Site へのアクセスが可能になります。また、将来のインストールを簡単に実行できます。

7. 「次へ」をクリックします。

HP-UX 上にインストールする場合は、「Choose JDK Home Directory」画面が表示されます。
8. JDK 1.3.1 をインストールするディレクトリのフルパスを入力します。
9. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。「サマリー」画面で、インストールの開始前にすべての設定を再確認できます。これらの設定には、インストール元、インストール先、インストール・タイプ、製品の言語、インストール・ファイルのサイズおよび Oracle Collaboration Suite コンポーネントのリストが含まれます。

10. これらの設定を変更するには、「戻る」をクリックして、それぞれの画面に戻ります。
11. 「インストール」をクリックして、インストール・プロセスを開始します。

「インストール」画面が表示され、画面にプログレス・バーが表示されます。Oracle Universal Installer では、インストールおよび再リンクのフェーズが実行されるため、各フェーズの完了にあわせてプログレス・バーが変化します。

12. CD-ROM からインストールを実行している場合は、追加のディスクを挿入するように求められます。CD-ROM の取出しおよび挿入については、4-2 ページの「[CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

「取消」ボタンをクリックすると、インストール・プロセスが中断されます。その後、個々のコンポーネントのインストールを停止するか、または製品全体のインストールを停止するかを選択できます。

インストール中に、Oracle Universal Installer によって、`root.sh` スクリプトを実行するように求められます。`root.sh` スクリプトは、環境変数 `ORACLE_OWNER`、`ORACLE_HOME` および `ORACLE_SID` の設定、およびローカルの `bin` ディレクトリのフルパスを検出します。デフォルトを使用するか、またはローカルの異なる `bin` ディレクトリに変更できます。

a. `root` ユーザーとしてログインします。

b. Oracle ホーム・ディレクトリで `root.sh` スクリプトを実行します。

```
prompt> ORACLE_HOME/root.sh
```

c. 「Finished running generic part of the root.sh script」および「Now product-specific root actions will be performed」と表示された後で、`root` ユーザーを終了して「インストール」画面に戻ります。

d. Oracle Universal Installer の終了後、「次へ」をクリックします。

13. `root.sh` スクリプトが完了すると、Oracle Calendar Server のインストールが開始されます。

a. **Yes** と入力して Oracle Calendar Server を構成します。

b. 1 ~ 9999 の間のノード数を入力します。

---

---

**注意：** 1つのノード・ネットワークに複数のカレンダー・ノードを接続する場合は、ネットワークの各ノードに対して個別のノード番号を入力する必要があります。詳細は、『Oracle Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。

---

---

c. ユーザーのロケールのタイム・ゾーンを選択します。

d. Oracle Calendar Server の `SYSOP` パスワードを設定します。パスワードの長さは5文字以上で、1つの数字が含まれている必要があります。

e. Oracle Internet Directory の管理者ユーザー名を入力します。

Oracle Internet Directory のデフォルトの管理者ユーザー名は、`cn=orcladmin` です。

f. Oracle Internet Directory の管理者パスワードを入力します。

14. 「次へ」をクリックします。

「構成ツール」画面が表示されます。

Oracle Universal Installer は、「構成オプションの選択」画面で選択した各コンポーネントの構成ツールを実行します。ツール・リストを下にスクロールして、各構成ツールの処理過程を監視します。コンポーネントが構成されるたびにツールのステータスが変化します。

この画面では、特定の構成プロセスを停止するか、または実行の失敗に関するデータを表示することができます。エラーを修正して「**再試行**」をクリックし、構成ツールを再実行するか、またはエラーを無視することができます。

15. Oracle Files を構成するにはユーザー入力が必要です。構成手順については、[第 6 章「Oracle Files の構成」](#)を参照してください。
16. 「次へ」をクリックします。
17. 「インストールの終了」画面に、Oracle HTTP Server ページおよび Oracle Enterprise Manager Web Site にアクセスするための URL およびポート番号が表示されます。  
「終了」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、または「次のインストール」をクリックして追加の Oracle Collaboration Suite インスタンスをインストールします。

Oracle Collaboration Suite は正常にインストールされました。追加の構成手順のリストは、5-19 ページの「[Oracle Collaboration Suite のインストール後のタスク](#)」を参照してください。

**参照：** Oracle Universal Installer を使用してシステム上にインストールしたコンポーネントのインベントリを保持するために作成したログ・ファイルについては、4-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

## Oracle Collaboration Suite のインストール後のタスク

表 5-1 に、Oracle Collaboration Suite のインストール後のタスクを示します。

表 5-1 Oracle Collaboration Suite インストール後のタスク

コンポーネント	要件
Enterprise Manager Web Site	Enterprise Manager Web Site が実行中であることを確認します。 このプロセスを開始するには、次のコマンドを入力します。 <code>\$ORACLE_HOME/bin/emctl start</code>
グローバリゼーション・サポート	Oracle9iAS Portal の言語変換の有効化については、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』を参照してください。

表 5-1 Oracle Collaboration Suite インストール後のタスク (続き)

コンポーネント	要件
Oracle Calendar	<p><b>参照:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 構成手順は、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』を参照してください。</li> <li>■ Oracle Calendar クライアントのインストールについては、付録 D「Oracle Collaboration Suite Client のインストール」を参照してください。</li> </ul>
Oracle Collaboration Suite クイック・ツアー	Oracle9iAS Portal のクイック・ツアー・ページへの URL リンクを作成する方法については、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』を参照してください。
Oracle Collaboration Suite Search	構成情報については、『Oracle Files 管理ガイド』を参照してください。
Oracle Collaboration Suite Web Client	構成手順については、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』を参照してください。
Oracle Email	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. sendmail と Oracle Email の間のポートの競合を回避します。 Oracle Email には、独自の SMTP サーバーが必要です。sendmail と Oracle Email の間のポートの競合を回避するには、既存の sendmail プログラムを使用不可にします。 sendmail を使用不可にする方法の 1 つは、sendmail ディレクトリの名前を変更することです。次に例を示します。 <code>/usr/lib/sendmail_dont_start</code></li> <li>2. クラスター・データベースに Email Store をインストールした場合は、この表の <a href="#">Oracle Real Application Clusters</a> のインストール後のタスクを再確認します。構成手順の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』の第 2 章を参照してください。</li> <li>3. Email Store を構成します。構成手順の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』の第 2 章を参照してください。 <code>\$_ORACLE_HOME/oes/bin/umconfig.sh</code></li> <li>4. Oracle Email 中間層を構成します。構成手順の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』の第 2 章を参照してください。 <code>\$_ORACLE_HOME/oes/bin/umconfig.sh</code></li> </ol>

表 5-1 Oracle Collaboration Suite インストール後のタスク (続き)

コンポーネント	要件
Oracle Files	<p>参照：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 『Oracle Files for Solaris Operating System (SPARC) リリース・ノート』</li> <li>■ 『Oracle Files 管理ガイド』</li> <li>■ <a href="#">Oracle FileSync</a> のインストールについては、付録 D 「<a href="#">Oracle Collaboration Suite Client のインストール</a>」を参照してください。</li> </ul>
Oracle Real Application Clusters	<p>Email Store がクラスター・データベースに存在する場合、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. データベースに Oracle Internet Directory を登録します。</li> <li>2. Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール用 CD-ROM から Email Store をインストールしなかった場合は、umbackend.tar ファイルをインストールします。</li> </ol> <p>構成手順の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。</p>
Oracle Ultra Search	<p>インストール後の構成手順の詳細は、『Oracle Ultra Search User’s Guide』を参照してください。</p>
Oracle Voicemail & Fax	<p>必要なインストール後のタスクを完了するための Oracle Voicemail &amp; Fax Infrastructure Configuration Tool の実行については、『Oracle Voicemail &amp; Fax Administrator’s Guide』を参照してください。</p>

表 5-1 Oracle Collaboration Suite インストール後のタスク (続き)

コンポーネント	要件
Oracle Wireless & Voice	<p>中間層に Oracle Wireless &amp; Voice を構成すると、Oracle9iAS Metadata Repository の Oracle Wireless &amp; Voice スキーマが自動的にアップグレードされます。Oracle Wireless &amp; Voice の構成時に、同じ Oracle9iAS Infrastructure にアクセスする 9.0.2.2 以下の中間層が存在する場合は、すべての既存の Oracle9iAS 中間層に Oracle Wireless &amp; Voice 9.0.2.2.0 パッチを適用する必要があります。このパッチは次の場所で入手可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle Collaboration Suite Interoperability Patch CD-ROM の wireless_9022 ディレクトリ</li></ul> <p>Oracle9iAS Infrastructure を Oracle Collaboration Suite CD Pack からインストールする場合、アップグレードは不要です。</p> <p>インストール後および構成後の追加手順は、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』、『Oracle9iAS Wireless Release Notes』および『Oracle9i Wireless Administrator's Guide』を参照してください。</p>

## 追加のドキュメント

Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM は、Oracle Collaboration Suite CD Pack に含まれています。CD-ROM に含まれているドキュメントへのアクセスについては、付録 E「[Oracle Collaboration Suite ドキュメント](#)」を参照してください。

# 6

---

---

## Oracle Files の構成

この章では、Oracle Files の構成のプロセスについて説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- Oracle Files の構成前のタスク
- Oracle Files の構成
- Oracle Files の非インタラクティブな初期構成
- Oracle Files ランタイムの設定

## Oracle Files の構成前のタスク

Oracle Files Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer プロセスの最後に自動的に起動され、Oracle Files スキーマに使用される Oracle データベースを識別するためのプロセス、およびその他の様々な構成タスクをガイドします。

Oracle Files を構成する前に、次の操作を実行します。

- データベース・サーバー・コンピュータ上で Oracle9i データベースおよびリスナー・プロセスが実行されていることを確認します。必要に応じて、これらのプロセスをシェル・プロンプトから次のとおり起動できます。

```
prompt> lsnrctl START
prompt> sqlplus /NOLOG
SQL> CONNECT sys/password AS SYSDBA
Connected.
SQL> startup
```

```
ORACLE instance started.
Total System Global Area 185369592 bytes
Fixed Size 279544 bytes
Variable Size 117440512 bytes
Database Buffers 67108864 bytes
Redo Buffers 540672 bytes
Database mounted.
Database opened.
SQL> exit
```

- Oracle Internet Directory にユーザーを作成します。

Oracle Files にアクセスするには、ユーザーを Oracle Internet Directory のユーザーとして作成する必要があります。Oracle Files を構成する前に、このタスクを実行することをお勧めします。Oracle Internet Directory にユーザーを作成するには、次の手順を実行します。

1. 次のように入力して、インフラストラクチャ・ホストに接続します。

```
http://hostname:7777/oiddas
```

2. Oracle Internet Directory の管理者（通常、orcladmin）としてログインします。
3. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
4. 「作成」をクリックします。  
「Create User」ページが表示されます。
5. フィールドに値を入力します。
6. 「送信」をクリックします。

ユーザーが Oracle Internet Directory に作成されると、24 時間ごとに Oracle Files に自動的に設定されます。これはデフォルトの設定で、変更することもできます。

**参照：** 詳細は、6-28 ページの「[Oracle Files のユーザー設定](#)」を参照してください。

- Oracle Workflow を構成して、Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On と適切に統合します。

Oracle Files の構成前に Oracle Workflow が適切に構成されなかった場合、Oracle Workflow は Oracle Files と正常に統合されません。構成手順については、『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』の第3章を参照してください。

**表 6-1 Oracle Files の構成および実行についての重要情報**

項目	参照先
Oracle Files の構成前の Oracle Workflow の構成	『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』の第3章
Oracle Internet Directory への Oracle Files ユーザーの作成	6-28 ページの「 <a href="#">Oracle Files のユーザー設定</a> 」
Oracle Files へのユーザーの設定	6-28 ページの「 <a href="#">Oracle Files のユーザー設定</a> 」
Oracle Enterprise Manager を含む Oracle Files の構成タスク	『Oracle Files 管理ガイド』
Oracle Files のサイト管理者およびサブスクライバの管理者情報	6-26 ページの「 <a href="#">Oracle Files サブスクライバの作成</a> 」および Oracle Files のオンライン・ヘルプ
NFS サーバーの構成	『Oracle Files for Solaris Operating System (SPARC) リリース・ノート』
Oracle FileSync クライアントのインストール	D-26 ページの「 <a href="#">Oracle FileSync for Windows のインストール</a> 」
その他のクライアント・アクセス・パスおよびソフトウェア	『Oracle Files 管理ガイド』の第2章
Oracle Files のインストールおよび構成のトラブルシューティング	B-2 ページの「 <a href="#">Oracle Files のインストールのトラブルシューティング</a> 」

## Oracle Files の構成

Oracle Files Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer によって自動的に起動され、表 6-2 に示す配置例の開始から終了までの手順を示します。Oracle Files Configuration Assistant は、常に、「Oracle Files CA - Welcome」画面から開始されます。

Oracle Files Configuration Assistant を使用して、各画面で選択を行い、「次へ」をクリックして続行します。「取消」をクリックしてアシスタントを停止し、コマンドラインから次の

ディレクトリに存在する ifscs を実行することによって、後で Oracle Files の構成を行うこともできます。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

表 6-2 に、実行できる構成タイプの概要を示します。

**表 6-2 Configuration Assistant のオプション**

構成タイプ	説明	参照先
新しい Oracle Files ドメインの作成	データベースに新しい Oracle Files スキーマを作成します。オプションで、コンピュータを <b>ドメインのノード</b> として含めるために必要なソフトウェアを構成します。	6-4 ページの「新しい Oracle Files ドメインの作成」
既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定	既存のドメインと統合するために、システム上に Oracle Files ソフトウェアを構成します。	6-21 ページの「既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定」

Oracle Files Configuration Assistant の処理過程を監視するためには、次のファイルに書き込まれるログを参照してください。

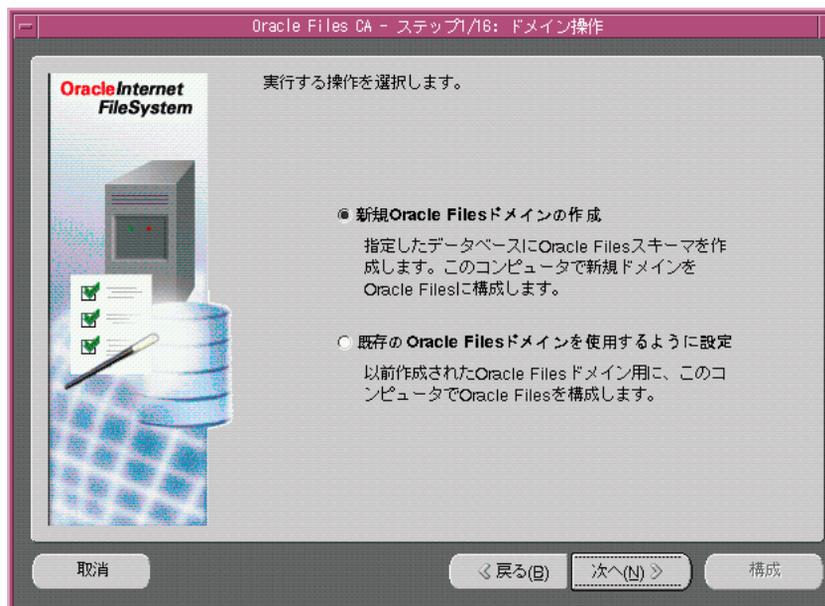
```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

## 新しい Oracle Files ドメインの作成

この項では、Oracle Files ドメインのコントローラ・コンピュータを構成する手順を示します。通常、このコンピュータは、構成するドメイン内の最初のコンピュータです。

「Oracle Files Configuration Assistant Welcome」画面から手順が開始されます。

1. 「次へ」をクリックします。  
「ドメイン操作」画面が表示されます。

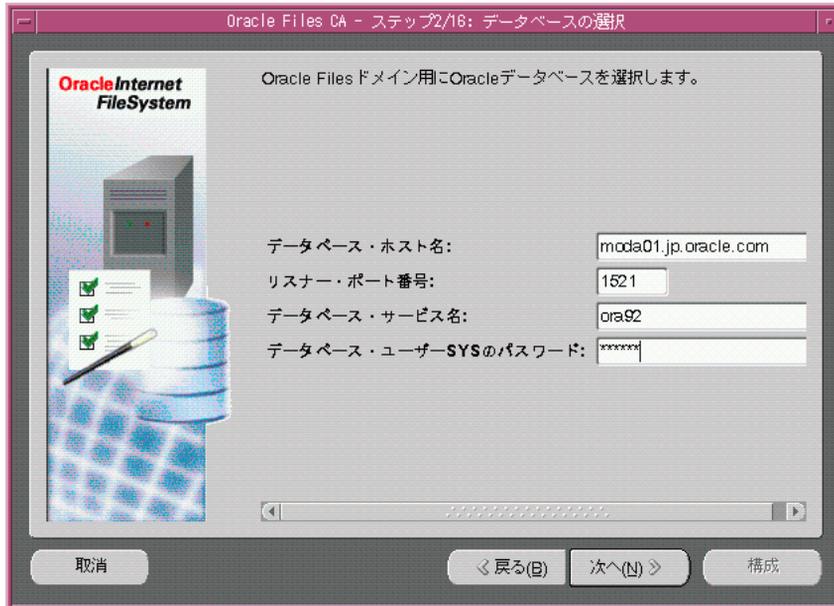


2. 「新規 Oracle Files ドメインの作成」を選択します。

3. 「次へ」をクリックします。

「データベースの選択」画面が表示されます。

**参照：** 6-21 ページの「既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定」を参照してください。



4. データベースが実行されているホストの名前、リスナーのポート番号、データベース・サービス名およびデータベースの SYS ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。
5. 「次へ」をクリックします。

「データベース・ログインの検証」メッセージ・ボックスが表示され、CLASSPATH、Oracle9i データベースへのデータベース接続、初期化パラメータ、Oracle JVM のインストールおよびその他の重要な要件が検証されます。

エラーが発生した場合、構成を続行するには問題を修正する必要があります。たとえば、データベースに Oracle JVM がインストールされていない場合、DBMS\_JAVA パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます。

**参照：** 事前設定要件の詳細は、3-6 ページの「[Oracle Files の配置](#)」を参照してください。

「Oracle ユーザー SYS のパスワードが無効です。」というエラー・メッセージが表示される場合、データベース・サーバー上でパスワード・ファイルが不明になっている可能性があります。Oracle Files Configuration Assistant はデータベース文字列を使用して SYS AS SYSDBA として接続の確立を試行するため、データベースがパスワード・ファイルを使用して構成されている必要があります。

**参照：** 詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の第1章「パスワード・ファイルの管理」を参照してください。このマニュアルは、次の URL で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp>

さらにエラーが発生する場合、検証に失敗した原因の詳細を FilesConfig.log ファイルで確認できます。

検証プロセスが完了すると、「スキーマ名」画面が表示されます。



6. Oracle Files スキーマに使用する名前を入力します。さらに、スキーマのパスワードを指定する必要があります。確認のため2つのフィールドにパスワードを入力します。
7. 「次へ」をクリックします。

Oracle Files Configuration Assistant によって、このスキーマ名がデータベースに存在するかどうかを確認されます。このスキーマ名が存在する場合、またはこのスキーマ名に基づく関連したスキーマ名が存在する場合、この問題を通知するメッセージ・ボックスが表示されます。

8. このメッセージ・ボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
  - 「スキーマ名」画面に戻り、スキーマの新しい名前を入力するには、「いいえ」をクリックします。

- このスキーマ、および表やビューなどの関連するすべてのオブジェクトをデータベースから削除して新しいスキーマを作成する場合、「はい」をクリックします。スキーマ名が存在しない場合、「表領域」画面が表示されます。



9. 次のいずれかのオプションを選択します。

- Oracle Files のコンテンツ用に作成されたカスタム表領域が存在しない場合は、「すべての Oracle 9iFS データに USERS 表領域を使用」を選択します。
- Oracle Files のコンテンツ専用に作成された表領域が存在する場合、「各データ・タイプの表領域を指定」を選択し、ドロップダウン・リストから各コンテンツ・タイプに使用する表領域を選択します。各データ・タイプ用に選択できる表領域が存在している必要があります。Oracle Files Configuration Assistant は表領域を作成しません。

**参照：** カスタム表領域の追加情報は、『Oracle Files 管理ガイド』を参照してください。このマニュアルは、次の URL で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp>

10. 「次へ」をクリックします。

データベースに Oracle Workflow インスタンスをインストールおよび構成していない場合は、警告画面が表示されます。そのため、Oracle Files は自動的に Oracle Workflow

と統合されません。Oracle Workflow インスタンスがインストールおよび構成されている場合、警告ボックスは表示されません。

**参照：** 詳細は、3-6 ページの「Oracle Files と Oracle Workflow 2.6.2 の依存性」を参照してください。

#### 11. 構成要件に応じて選択します。

- Oracle Workflow と自動的に統合する場合は、「いいえ」をクリックして Oracle Files の構成を終了し、データベースに Oracle Workflow スキーマを作成します。その後、コマンドラインから Oracle Files Configuration Assistant を起動することによって、Oracle Files を構成できます。
- Oracle Workflow と統合しない場合、または構成後の手順（非推奨）として Oracle Workflow と統合する場合は、「はい」をクリックして、Oracle Files 構成プロセスを続行します。

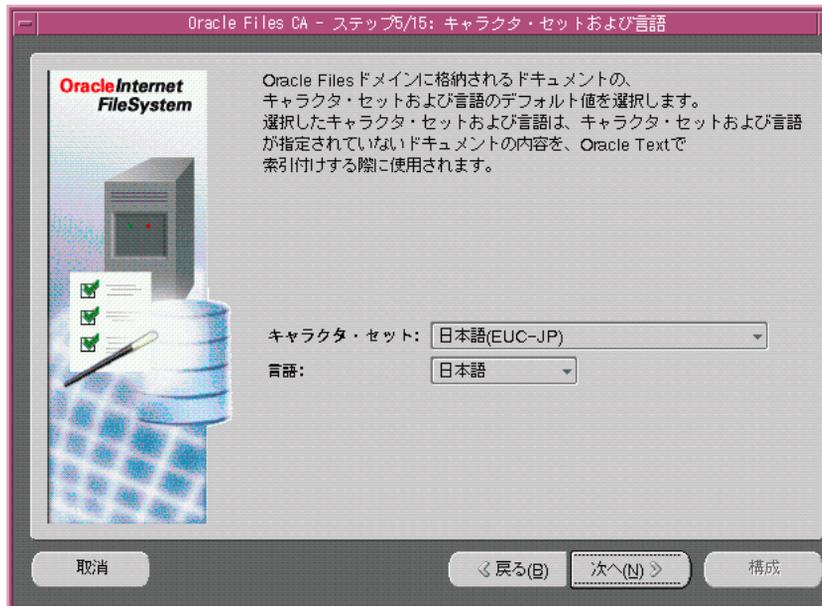
---

**注意：** Oracle Files スキーマを作成する前に、Oracle Workflow インスタンスをインストールおよび構成しておくことをお勧めします。この操作によって、Oracle Files Configuration Assistant と Oracle Workflow を自動的に統合できます。Oracle Workflow の構成手順については、『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』の第 3 章を参照してください。

構成後に Oracle Files と Oracle Workflow を手動で統合することはできませんが、お勧めしません。構成後の手順として Oracle Workflow と Oracle Files を統合する方法については、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

---

構成を続行する場合は、「キャラクタ・セットおよび言語」画面が表示されます。それ以外の場合、Oracle Files の構成プロセスは終了します。



12. Oracle Files にドキュメントを格納する際に使用するデフォルトのキャラクタ・セットおよび索引付け言語を選択します。ドキュメントのキャラクタ・セットのデフォルトは、Oracle Files に転送されるドキュメントの言語またはキャラクタ・セットを指定しないクライアント・アプリケーションによって使用されます。デフォルトのキャラクタ・セットは、FTP や WebDAV などの、Unicode 対応ではないプロトコルの場合に、これらのプロトコル・サーバーで使用する必要があるキャラクタ・セットを判別するためにも使用されます。

キャラクタ・セットを Unicode (UTF8) に設定し、複数言語機能を完全に有効にすることをお勧めします。UTF8 以外のキャラクタ・セットを指定すると、複数の言語で作成されたコンテンツへのアクセスおよびこれらのコンテンツの表示に関する Oracle Files の機能が制限される場合があります。

シングルバイト言語機能のみをサポートする必要がある場合、UTF8 またはデータベースでサポートされるシングルバイト・キャラクタ・セットを使用できます。

**参照：** 詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「Multi\_Lexer」を参照してください。

13. 「次へ」をクリックします。  
「デフォルトのポート番号」画面が表示されます。



デフォルトのポート番号の設定は、Oracle Files スキーマを使用するすべての中間層コンピュータによって使用されるオブジェクトとして格納されます。単一の中間層コンピュータ上で構成を変更するには、Enterprise Manager Web Site を使用する必要があります。

**14.** 必要に応じて、ポート番号を変更します。

- このコンピュータに指定されている特定のプロトコル・サーバーの UNIX ネイティブ版と Oracle Files 版の両方を実行するには、ポート番号を変更して、競合を回避する必要があります。ポート番号を変更する場合、新しいポート番号はドメインのすべてのノードで使用されます。
- NFS プロトコル・サーバーのメイン・ポートを変更する場合、MOUNT サーバー・ポートを 0（ゼロ）以外の番号に変更する必要があります。0 という値は、MOUNT サーバー・ポートの番号がポート・マッパーによって動的に割り当てられる必要があることを示すため、NFS プロトコル・サーバーが標準の NFS ポート番号である 2049 上に存在する場合のみに使用する必要があります。

**参照：** NFS プロトコル・サーバーの設定については、『Oracle Files for Solaris Operating System (SPARC) リリース・ノート』を参照してください。

- UNIX ネイティブによるサービスの実装を実行しない場合、デフォルトのポート番号を使用できます。

---

---

**注意：** HP-UX 上で実行している NFS クライアントに Oracle Files の NFS サポートを提供するには、Oracle Files にポート 2049（デフォルト）を使用し、OS の NFS プロトコル・サーバーを無効にする必要があります。Linux および Solaris 上で実行している NFS クライアントにはこの制限が適用されないため、これらのクライアントの場合、同じコンピュータ上で UNIX の NFS プロトコル・サーバーと Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーの両方を使用できます。

---

---

15. 「次へ」をクリックします。  
「Web サイト情報」画面が表示されます。

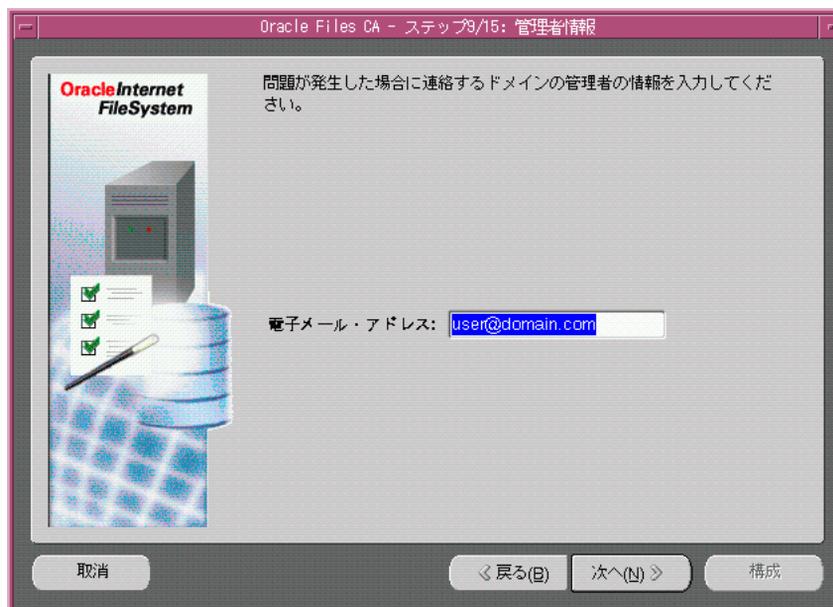


16. ドメインによる HTTP リスナー・サービスの提供に使用するコンピュータの完全修飾されたホスト名およびポート番号を入力します。コンピュータ上に SSL が構成されている場合のみ、「SSL の使用」を選択します。
17. 「次へ」をクリックします。  
「SMTP 情報」画面が表示されます。
18. このドメインが提供する電子メールに関連する情報を入力します。この情報は、Oracle Files を介して通知用の電子メールを送信するために使用されます。たとえば、ユーザーを作成すると、Oracle Files によってそのユーザーの電子メール・アドレスに電子メー

ルが送信されます。SMTP サーバーを有効にしていることを確認します。SMTP サーバーを有効にしていない場合、Oracle Files から送信されるメールを受信できません。

19. 「次へ」をクリックします。

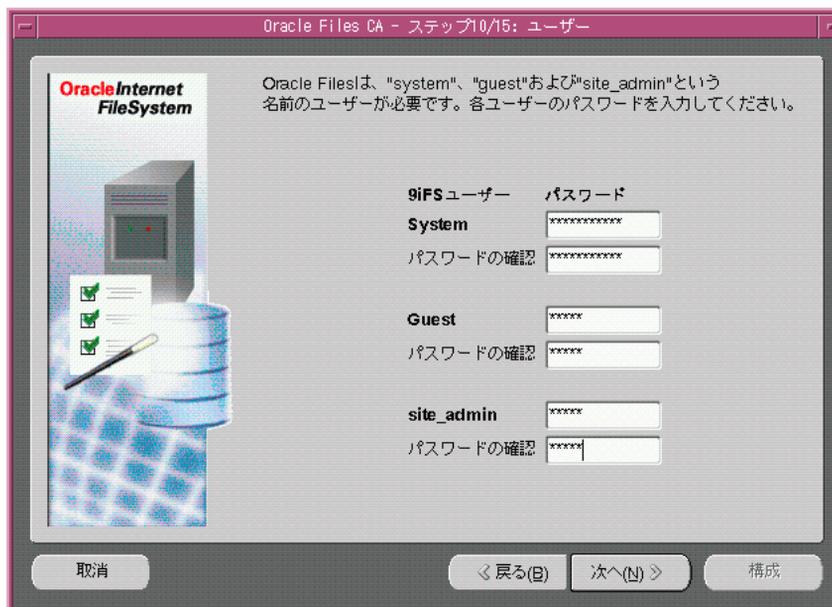
「管理者情報」画面が表示されます。



20. 通知およびその他のメッセージを Oracle Files の管理者に送信するために使用する完全修飾された電子メール・アドレスを入力します。たとえば、`username@yourcompany.com` です。

21. 「次へ」をクリックします。

「ユーザー」画面が表示されます。Oracle Files Configuration Assistant は、`system`、`guest` および `site_admin` の 3 人の新しいユーザーを作成します。サイト管理者は、Oracle Files にサブスクリバを作成するために使用されます。



22. デフォルトの各ユーザーにパスワードを割り当てます。

23. 「次へ」をクリックします。

Oracle Internet Directory の「ログイン」画面が表示されます。



24. 資格証明の管理に使用する Oracle Internet Directory インスタンスに関するログイン情報を入力します。
- Oracle Internet Directory を実行するコンピュータの完全修飾された**ホスト名**を入力します。
  - デフォルトのポート番号を受け入れるか、新しいポート番号を割り当てます。  
LDAP 用のデフォルトのポート番号は、389 です。このポートが使用中である場合、ポート 4032 が使用されます。通常、設定を変更する必要はありません。Oracle Internet Directory 上で SSL を有効にしている場合、「**SSL の使用**」を選択し、ポート番号を変更します。SSL 対応モードのデフォルトのポート番号は、636 です。
  - Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー名を入力します。  
Oracle Internet Directory のデフォルトのスーパー・ユーザー名は、cn=orcladmin です。
  - Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザーのパスワードを入力します。  
パスワードは、Oracle Internet Directory のインストール時に入力したパスワードです。
  - Oracle コンテキスト**を入力します。  
Oracle Internet Directory のデフォルトのルート Oracle コンテキストは、cn=OracleContext に設定されています。通常、設定を変更する必要はありません。

ん。Oracle Internet Directory の管理者がルート・コンテキストを変更している場合、正しい値を入力する必要があります。ルート・コンテキストの概念は、LDAP ディレクトリ・サービス固有です。

25. 「次へ」をクリックします。

Oracle Files Configuration Assistant の手順 2 で、データベースの選択中に Oracle Files が指すように指定したデータベースに Oracle Workflow スキーマを構成した場合、「ワークフロー・スキーマ」画面が表示されます。「ワークフロー・スキーマ」画面が表示されたら、手順 26 に進みます。

それ以外の場合は、「ローカル・マシンの設定」画面が表示されます。手順 29 に進みます。



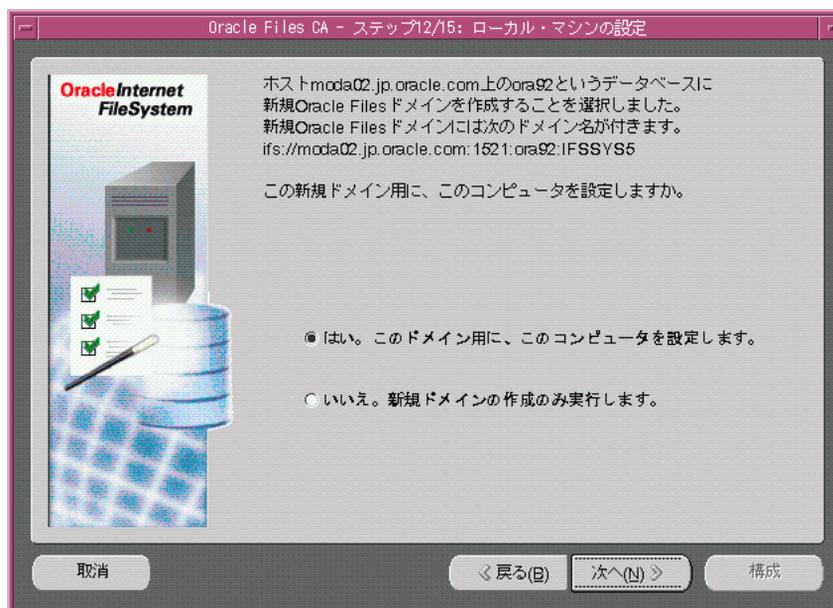
26. 「Integrate with workflow」を選択して、Oracle Files と Oracle Workflow を統合し、手順 27 に進みます。それ以外の場合は、「Integrate with workflow」ボックスを選択せずに、手順 28 に進みます。

---

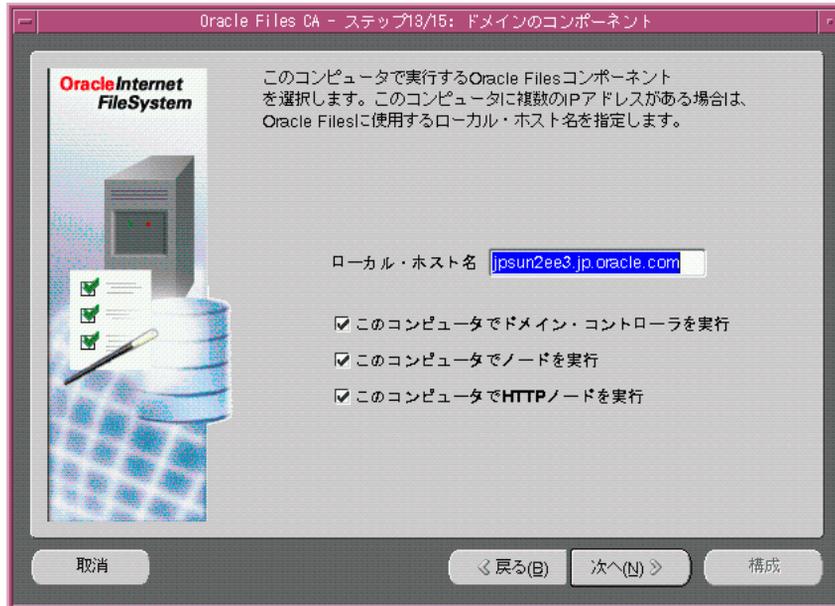
**注意：** Oracle Files の構成の一部として、Oracle Workflow と統合することをお勧めします。ただし、Oracle Workflow と Oracle Files を統合しないことを選択した場合、構成後の手順として手動で統合できます。構成後の手順として Oracle Workflow と Oracle Files を統合する手順については、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

---

27. Workflow スキーマ名を選択し、スキーマ・パスワードを入力します。
28. 「次へ」をクリックします。  
「ローカル・マシンの設定」画面が表示されます。



29. 次のいずれかのオプションを選択します。
  - このホストを Oracle Enterprise Manager Web Site を使用して管理可能なターゲットとして構成するには、「はい」を選択します。
  - Oracle Enterprise Manager Web Site からこのドメインをターゲットとして管理するために必要なソフトウェアを使用してこのドメインを構成するのではなく、新しいホストを作成するには、「いいえ」を選択します。
30. 「次へ」をクリックします。  
「ドメインのコンポーネント」画面が表示されます。



31. コンピュータに複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) が含まれる場合は、Oracle Files で使用するホスト名を入力します。
32. 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」およびドメインに構成する他のすべてのプロセスを選択します。デフォルトでは、この画面の次のプロセスが選択されています。
  - 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」をチェックすると、Oracle Files ドメイン・コントローラ・プロセスが構成されます。このプロセスは、1つのコンピュータのみで実行する必要があります。
  - 「このコンピュータでノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で実行する Oracle Files ノードが構成されます。
  - 「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で HTTP および WebDAV アクセス用の Oracle Files DAV サーバーを実行する HTTP ノードが構成されます。
33. 「次へ」をクリックします。

「ノード構成」画面が表示されます。「ノード構成」画面には、ドメイン内で実行するために選択可能なすべてのプロトコル・サーバーおよびエージェントが表示されます。

  - 「ノード名」は、ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前 (ホスト名) を含めることができますが、必須ではありません。ユーザーが識別可能な任意の文字列を使用します。

- 「Oracle 9iFS エージェントを実行」をチェックすると、すべての Oracle 9iFS システム・エージェントがこのコンピュータ上で実行するように構成されます。エージェントはドメイン内の1つのノード上のみで実行することに注意してください。エージェントが別のノードで実行するように構成されている場合、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。
- 「プロトコル・サーバーを実行」をチェックすると、Oracle 9iFS プロトコル・サーバーがこのコンピュータ上で実行するように構成されます。プロトコル・サーバーには、FTP、AFP、NFS および SMB が含まれます。

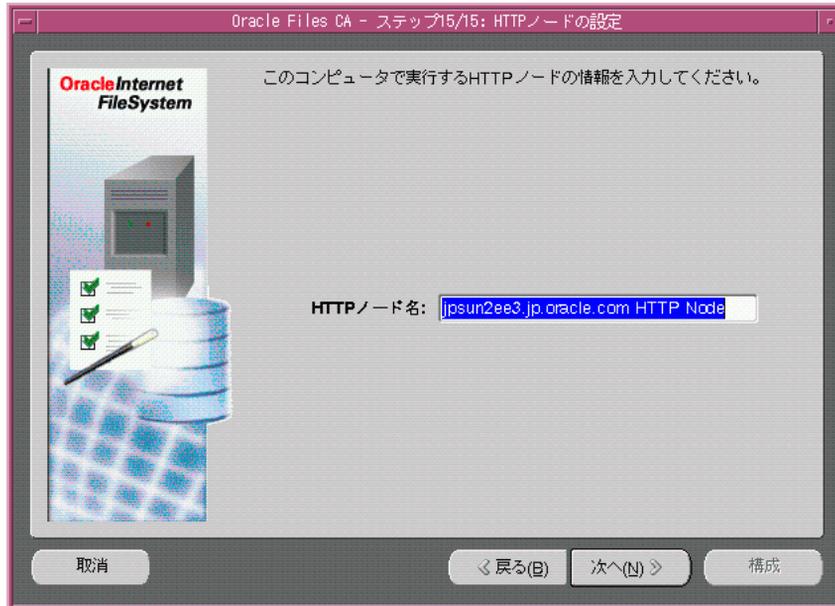
**参照：**『Oracle Files 管理ガイド』の第1章「Oracle Files の概要」を参照してください。



34. ノード名を入力し、必要に応じてプロトコル・サーバーとエージェントを構成します。
35. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面で「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックした場合、「HTTP ノードの設定」画面が表示されます。この画面では、HTTP ノードの名前を指定できます。手順 36 に進みます。

それ以外の場合は、「サマリー」画面が表示されます。手順 38 に進みます。



36. HTTP ノードの名前の入力します。

37. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。この時点で、Oracle Files Configuration Assistant には、新しい Oracle Files スキーマを作成し、ノードおよびその他のプロセスを構成するために必要なすべての情報が設定されています。ログ・ファイルの名前と場所、およびこの画面に表示されるその他の重要な情報を確認してください。

38. 「構成」をクリックして、構成プロセスを実行します。

進行状況を示すウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

プロセスが完了すると、構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージを閉じます。Oracle Files と Oracle Enterprise Manager Web Site は、自動的に統合されます。

Oracle Universal Installer で Oracle Files Configuration Assistant が起動された場合は、残りの構成ツールが起動されます。

## 既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定

この項では、既存のドメインを使用するようにコンピュータを設定するプロセスを示します。Oracle Collaboration Suite に基づく Oracle ホームに Oracle Files ソフトウェアをインストールおよび構成する必要があります。画面の外観は、前の項に示すスクリーン・ショットを参照してください。

「Oracle Files Configuration Assistant Welcome」画面から手順が開始されます。

1. 「次へ」をクリックして、構成プロセスを開始します。  
「ドメイン操作」画面が表示されます。
2. 「Set up this computer to use an existing Oracle Files domain」オプションを選択して、「次へ」をクリックします。  
「データベースの選択」画面が表示されます。

**参照：** 6-4 ページの「新しい Oracle Files ドメインの作成」を参照してください。

3. データベースが実行されているホストの名前（データベース・ホスト名）、リスナーのポート番号、データベース・サービス名およびデータベースの SYS ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。
4. 「次へ」をクリックします。  
「データベース・ログインの検証」メッセージ・ボックスが表示され、CLASSPATH、Oracle9i データベースへのデータベース接続、初期化パラメータ、Oracle JVM のインストールおよびその他の重要な要件が検証されます。

エラーが発生した場合、構成を続行するには問題を修正する必要があります。たとえば、データベースに Oracle JVM がインストールされていない場合、DBMS\_JAVA パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます。

**参照：** 事前設定要件の詳細は、第 2 章「インストールの準備」を参照してください。

「Oracle ユーザー SYS のパスワードが無効です。」というエラー・メッセージが表示される場合、データベース・サーバー上でパスワード・ファイルが不明になっている可能性があります。Oracle Files Configuration Assistant は、データベース文字列を使用して SYS AS SYSDBA として接続の確立を試行するため、データベースがパスワード・ファイルを使用して構成されている必要があります。

**参照：** 詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の第 1 章「パスワード・ファイルの管理」を参照してください。このマニュアルは、次の URL で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp>

さらにエラーが発生する場合、検証に失敗した原因の詳細を FilesConfig.log ファイルで確認できます。

検証プロセスが完了すると、「スキーマ名」画面が表示されます。

5. 既存の Oracle Files ドメインのスキーマ名を入力し、スキーマ・パスワードを入力します。

6. 「次へ」をクリックします。

データベース接続とスキーマの検証後、「ドメインのコンポーネント」画面が表示されます。

7. コンピュータに複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) が含まれる場合、Oracle Files で使用するホスト名を入力します。

8. 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」およびこのコンピュータ上で実行するように構成する他のすべてのプロセスを選択します。デフォルトでは、次のプロセスが選択されています。

- 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」をチェックすると、Oracle Files ドメイン・コントローラ・プロセスが構成されます。このプロセスは、1つのコンピュータのみで実行する必要があります。
- 「このコンピュータでノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で実行する Oracle Files ノードが構成されます。
- 「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で HTTP および WebDAV アクセス用の Oracle Files DAV サーバーを実行する HTTP ノードが構成されます。

9. 「次へ」をクリックします。

「ノード構成」画面が表示されます。

「ノード構成」画面には、ドメイン内で実行するために選択可能なすべてのプロトコル・サーバーおよびエージェントが表示されます。

- 「ノード名」は、ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前 (ホスト名) を含めることができますが、必須ではありません。ユーザーが識別可能な任意の文字列を使用します。
- 「Oracle 9iFS エージェントを実行」をチェックすると、すべての Oracle 9iFS システム・エージェントがこのコンピュータ上で実行するように構成されます。エージェントはドメイン内の1つのノード上のみで実行することに注意してください。エージェントが別のノードで実行するように構成されている場合、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。
- 「プロトコル・サーバーを実行」をチェックすると、Oracle 9iFS プロトコル・サーバーがこのコンピュータ上で実行するように構成されます。プロトコル・サーバーには、FTP、AFP、NFS および SMB が含まれます。

**参照：**『Oracle Files 管理ガイド』の第 1 章「Oracle Files の概要」を参照してください。このマニュアルは、次の URL で入手可能です。

<http://otn.oracle.co.jp>

10. ノード名を入力し、必要に応じてプロトコル・サーバーとエージェントを構成します。
11. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面で「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックした場合、「HTTP ノードの設定」画面が表示されます。この画面では、HTTP ノードの名前を指定できます。手順 12 に進みます。

それ以外の場合は、「サマリー」画面が表示されます。手順 14 に進みます。
12. HTTP ノードの名前の入力します。
13. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。この時点で、Oracle Files Configuration Assistant に、コンピュータを構成するために必要なすべての情報が含まれています。ログ・ファイルの名前と場所、およびこの画面に表示されるその他の重要な情報を確認してください。
14. 「構成」をクリックして、構成プロセスを実行します。

進行状況を示すウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```
15. プロセスが完了すると、初期構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージを閉じます。

Oracle Universal Installer で Oracle Files Configuration Assistant が起動された場合は、残りの構成ツールが起動されます。

## Oracle Files の非インタラクティブな初期構成

すべての構成の設定を含むレスポンス・ファイルをコマンドラインでパラメータとして Oracle Files Configuration Assistant に渡すことによって、Oracle Files ドメインを非インタラクティブに構成できます。レスポンス・ファイルの場所は、次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/settings/silentconfig.properties
```

レスポンス・ファイルには、このファイルを変更および使用する方法に関する説明が含まれます。このレスポンス・ファイルを、ユーザー固有の要件を満たすように変更します。

1. テキスト・エディタで `silentconfig.properties` ファイルを開きます。
2. ファイルの設定に必要な変更を加え、変更が終了した後で、ファイルを閉じます。

3. 次のコマンドを入力することによって、変更したレスポンス・ファイルを使用して Oracle Files Configuration Assistant を実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

```
./ifscsa -file $ORACLE_HOME/ifs/files/settings/silentconfig.properties -silent
```

レスポンス・ファイルに定義された仕様に従って、コンピュータ上に Oracle Files が構成されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log
```

## Oracle Files ランタイムの設定

次のタスクを実行して、初期構成を完了し、ドメインを起動し、システムが稼働しており安全な状態であることを確認します。

- すべての必要なプロセスの起動
- Oracle Files サブスクライバの作成
- Oracle Files のユーザー設定
- プロトコル・サーバーへのアクセス
- 基本操作の検証

### すべての必要なプロセスの起動

この項の手順は、Oracle Files がインストールおよび構成されており、データベースおよびリスナーが実行されていることを前提としています。

Oracle Files は、Oracle9iAS Infrastructure の Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) コンポーネントを使用して、構成プロセス中に OC4J に自動的に配置される DAV Servlet をサポートします。

1. 停止した後に再度起動することによって、Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動します。Oracle Files Configuration Assistant が `targets.xml` ファイルを変更するので、Oracle Enterprise Manager を再起動するまで、Oracle Files ドメインは Oracle Enterprise Manager Web Site に表示されません。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start
```

---

---

**注意：** いくつかの Oracle マニュアルでは、Oracle Enterprise Manager Web Site は、Enterprise Manager Web Site または Oracle Enterprise Manager と呼ばれています。

---

---

Oracle Files ドメインに複数の物理コンピュータが含まれる場合、各コンピュータ上で `emctl start` コマンドを実行する必要があります。

2. サーバー・コンピュータ上の Web ブラウザまたはネットワーク上の別のコンピュータから、Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているコンピュータ上の Oracle Enterprise Manager Web Site に接続する URL にアクセスします。

```
http://hostname:1810
```

または、次のとおり入力することによって、「Oracle Enterprise Manager」ページに直接アクセスできます。

```
http://hostname:1810/emd/console/targets
```

この URL を入力すると、手順 4 に示すページが表示されます。

「Username and Password Required」または「Enter Network Password」というプロンプトが表示されます。

3. ユーザー名として `ias_admin` を入力し、Oracle9iAS Infrastructure インスタンスの適切なパスワードを入力します。

Web ページに、指定したホスト上で実行されている Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のすべてのコンポーネント（ターゲット）のリストが表示されます。

4. Oracle Files ソフトウェアをホスティングしている Oracle Collaboration Suite インスタンスの名前をクリックします。Oracle Collaboration Suite インスタンスのユーザー名およびパスワードの再入力を求めるプロンプトが表示される場合、`ias_admin` と適切なパスワードを入力し、続行します。

インスタンス上で実行しているすべてのシステム・コンポーネントが含まれるページが表示されます。リストに Oracle Files ドメインが含まれている必要があります。このドメインは、`iFS_` の後に、データベース・インスタンスのホスト名、ポート番号、サービス名および Oracle Files のスキーマの名前が連結されたフォーマットで表示されます。次に例を示します。

```
iFS_myMachineHostname.mycompany.com:1521:myDBServiceName:myFILESSchemaName
```

---

**注意：** このページには「開始」および「停止」ボタンが表示されますが、このページから Oracle Files を制御することはできません。

---

5. ドメイン名のリンクをクリックします。後続のページで、「ローカル・コンポーネントの起動」をクリックします。Oracle Files ノードを起動するためにホストの資格証明の入力を求めるプロンプトが表示されます。
6. コンピュータのオペレーティング・システムのアカウント名およびパスワードを入力します。通常、`root` ユーザーの名前およびパスワードを入力します。

ドメインに、複数のコンピュータに存在する複数のノードが含まれる場合、各コンピュータに対してこの手順を繰り返します。起動するノードが実行されている各コンピュータ上で、オペレーティング・システムのアカウント名およびパスワードを入力する必要があります。

7. 「OK」をクリックします。

---

**注意：** 手順 1～7では、`$ORACLE_HOME/ifs/files/bin` から `ifsctl start` コマンドを実行できます。

---

8. リンクをクリックすると、インスタンス上で実行しているすべてのシステム・コンポーネントが含まれるページが表示されます。

Oracle Files の最上位の管理ページが表示されます。ページの左上にドメイン名が表示されます。ドメイン名の構成は次のとおりです。

```
myHostname.mycompany.com:1521:myDBServiceName:myFILESSchemaName
```

9. OC4J インスタンスが実行されていることを確認します。OC4J インスタンスを起動するには、次のとおり入力します。

```
opmnctl startall
```

OC4J インスタンスを停止するには、次のとおり入力します。

```
opmnctl stopall
```

Oracle Files ドメインが起動します。

10. Oracle Files ドメインのステータスを確認します。次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin/ifsctl status -n
```

## Oracle Files サブスクリバの作成

次の手順では、サイト管理者として Oracle Files にログインし、[サブスクリバ](#)を作成します。

1. 次の URL に移動します。

```
http://httpost:port/files/app/AdminLogin
```

次に例を示します。

```
http://acme.us.oracle.com:7778/files/app/AdminLogin
```

「管理者のログイン」ページが表示されます。

2. `site_admin` としてログインし、構成中に使用した `site_admin` パスワードを使用します。
3. 「新規サブスクリイバ」をクリックします。  
「サブスクリイバ名」ページが表示されます。サブスクリイバ名は、Oracle Internet Directory サーバーのデフォルトのサブスクリイバであることに注意してください。Oracle Internet Directory サーバーは、Oracle Files の構成中に入力した値です（通常、このサブスクリイバは「US」です）。
4. 「次へ」をクリックします。  
「サブスクリイバ情報」ページが表示されます。
5. ユーザーの割当て制限および最大数を設定します。たとえば、全体の割当て制限が 1GB、各ユーザーの割当て制限が 10 MB、各ワークスペースの割当て制限が 10MB などです。
6. 「次へ」をクリックします。  
「サブスクリイバ管理者アカウントの作成」ページが表示されます。
7. サブスクリイバ用のユーザー・ログイン ID を入力します。電子メール・アドレスは、サブスクリイバのパスワードの送信先です。「デフォルトのユーザー・アカウント設定」および「デフォルトのワークスペース設定」を指定します。
8. 「次へ」をクリックします。  
「New Subscriber Confirmation」が表示されます。
9. 情報を再確認して、「送信」をクリックします。  
「サブスクリイバの参照」ページが表示されます。サブスクリイバが作成され、サブスクリイバのパスワードが電子メールで自動送信されたことが表示されます。
10. サブスクリイバとしてログインするには、次の URL に移動します。  
`http://httpost:port/files/app/AdminLogin`  
「管理者のログイン」ページが表示されます。
11. 手順 7 のサブスクリイバの作成時に入力したサブスクリイバ用のユーザー・ログイン ID を使用して、`subscriber_user_login_ID/password` としてログインします。
12. 「USERS」タブをクリックして、「ユーザー」ページを表示します。このページをリフレッシュして、更新された Oracle Files ユーザーのリストを表示します。

**参照：** Oracle Files へのユーザー作成については、6-28 ページの「Oracle Files のユーザー設定」を参照してください。

## Oracle Files のユーザー設定

Oracle Files にアクセスするには、ユーザーを Oracle Internet Directory のユーザーとして作成する必要があります。

**参照：** Oracle Internet Directory のユーザー作成については、この章の「[Oracle Files の構成前のタスク](#)」を参照してください。

Oracle Internet Directory にユーザーが作成され、Oracle Files のサイト管理者が Oracle Files のサブスクリバ管理者を作成した後、作成されたユーザーは、FilesOidUserSynchronizationAgent によって 24 時間ごとに Oracle Files に自動的に設定されます (デフォルト設定)。

FilesOidUserSynchronizationAgent のアクティブ化期間を 24 時間より短い時間に再設定 (エージェントによって Oracle Files へユーザーが作成されるまで 24 時間待機する必要がなくなります) するには、次の手順を実行します。

1. 次のスクリプトを使用して、コマンドラインから EMD (Oracle Enterprise Manager と呼ばれる) を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start
```

同じホスト上に複数の Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite のホームが存在する場合、ACTIVE\_EMD\_HOME から EMD を起動します。次の表に示す場所に移動することによって、ACTIVE\_EMD\_HOME を確認できます。

オペレーティング・システム 場所	
Solaris	cat /var/opt/oracle/emtab
HP-UX および Linux	cat /etc/emtab

2. `http://hostname:1810/` で EMD に接続します。
  - a. `ias_admin` としてログインします。パスワードには、Oracle Collaboration Suite のインストール時に Oracle Collaboration Suite インスタンスに対して入力したパスワードと同じパスワードを使用します。
  - b. Files ドメインのリンクをクリックします。次に例を示します。

```
iFS_host:1521:ServiceName_SchemaName
```

「Files Domain」ページが表示されます。

3. 「サーバー構成」をクリックします。
4. FilesOidUserSynchronizationAgentConfiguration を編集し、IFS.SERVER.TIMER.ActivationPeriod の値を 24h から 3m (3 分間) に変更します。

5. 「OK」をクリックして、FilesOidUserSynchronizationAgentConfiguration を保存します。
6. 次の手順で、FilesOidUserSynchronizationAgent を停止します。
  - 「Oracle Files Domain」ページに戻ります。
  - 「ノード名」をクリックします。
  - FilesOidUserSynchronizationAgent の隣のボタンをクリックします。
  - 「停止」をクリックします。
7. 「サーバーのロード」をクリックします。  
「サーバーのロード」ページが表示されます。
  - a. 次の情報を入力します。
    - サーバー名：選択した名前（一時的な指定です。）
    - サービス名：IfsDefaultService
    - サーバー構成：FilesOidUserSynchronizationAgentConfiguration
  - b. 「OK」をクリックします。
8. 「Start」をクリックして、新しくロードされた FilesOidUserSynchronizationAgent を起動します。  
  
FilesOidUserSynchronizationAgent によってユーザーが設定された後で、ActivationPeriod を 24 時間（24h）または任意の時間に戻すことができます。

同期化プロセスの結果、Oracle Files のログイン・ページへの URL、および Oracle Files へのプロトコル・アクセス方法の説明とともに、Oracle Files にアカウントが作成されたことを通知する電子メールが Oracle Files ユーザーに送信されます。

**参照：**「[プロトコル・サーバーへのアクセス](#)」を参照してください。

## プロトコル・サーバーへのアクセス

Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーにアクセスするには、各エンド・ユーザーは次の手順を実行する必要があります。

1. 「Protocol Access」ページにアクセスします。  
  
`http://hostname:7778/files/app/ProtocolAccess`  
  
「Single Sign On」ページ（SSO）が表示されます。
2. Oracle Internet Directory のユーザーとパスワードを使用して、ログインします。  
「Protocol Access」ページが表示されます。

3. SSO パスワードおよび Oracle Files 固有のパスワードを入力し、パスワードを確認して、ユーザー用にこれらのパスワードを作成します。
4. 「**続行**」をクリックして、保存します。

この時点で、「Protocol Access」ページを使用して Oracle Internet Directory ユーザーが構成され、Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーにアクセスできます。

---

**注意：** AFP および FTP にアクセスするには、Oracle Files 固有のパスワードを使用します。SMB、FileSync、WebFolders または Files Login にアクセスするには、Oracle Internet Directory のパスワードを使用します。

---

**参照：** ユーザーの作成および Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーへのアクセスの詳細は、『Oracle Files 管理ガイド』を参照してください。

## 基本操作の検証

ドメインおよびノードが起動されており、Oracle Files の主要なコンポーネントが動作していることを検証するために、ネットワーク上の別のコンピュータからシステムへの接続を試行します。

**表 6-3 基本機能**

プロトコルまたはサーバー	アクセス用のアドレスまたは方法	预期される結果
HTTP	http://hostname:7778/files/	Oracle Internet Directory サーバーで作成されたユーザーとしてログインします。
SMB	Windows のエクスプローラで、「Map network drive」を選択します。  ¥¥hostname¥share	「Windows file share」が表示されます。

HTTP の Web サーバーへの接続を試行し、「503Service Temporarily Unavailable」というメッセージが表示された場合、ドメイン（特に、HTTP ノード）が完全には起動されていないことに注意してください。HTTP ノードを起動する必要があります。

---

---

# サイレント・インストールおよび 非インタラクティブ・インストール

この章では、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストールの手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [非インタラクティブ・インストールの概要](#)
- [インストール要件](#)
- [サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール用のファイルの作成](#)
- [レスポンス・ファイルの選択](#)
- [レスポンス・ファイルの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの指定](#)
- [root.sh スクリプトの実行](#)
- [エラー処理](#)
- [削除](#)
- [非インタラクティブ・モードでの Configuration Assistant の使用](#)

## 非インタラクティブ・インストールの概要

Oracle Collaboration Suite には、2つの非対話型のインストール方法があります。

- サイレント・インストール
- 非インタラクティブ・インストール

### サイレント・インストール

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供し、`-silent` フラグを指定することによって実行されます。Oracle Universal Installer は、レスポンス・ファイルというテキスト・ファイルに含まれる変数および値を使用して、すべてのユーザー・プロンプトに応答します。ユーザーは、すべてのプロンプトに対する応答をレスポンス・ファイルに含める必要があります。サイレント・インストールでは、画面は表示されません。

Oracle Collaboration Suite を初めてインストールする場合、インストールを開始する前に、3つのファイルを手動で作成する必要があります。これらのファイルは、インストール中に、Oracle Universal Installer によって使用されます。

- `oraInst.loc`
- `emtab`
- `oratab`

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを実行した後で、`root.sh` スクリプトを実行します。`root.sh` スクリプトを実行すると、環境変数の設定が検出され、これによってローカルの `bin` ディレクトリのフルパスを入力できます。

複数のコンピュータ上で同様のインストールを行う場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを使用します。さらに、コマンドラインを使用して遠隔地から Oracle Collaboration Suite のインストールを実行する場合も、サイレント・インストールを使用します。サイレント・インストールを使用すると、画面が表示されず、ユーザーによる入力不要であるため、Oracle Collaboration Suite のインストールを監視する必要がなくなります。

#### 参照：

- 7-3 ページの「サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール用のファイルの作成」を参照してください。
- リモート・インストールの詳細は、2-16 ページの「DISPLAY」を参照してください。

## 非インタラクティブ・インストール

Oracle Collaboration Suite の非インタラクティブ・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供することによって実行されます。-silent フラグは指定しません。Oracle Universal Installer は、レスポンス・ファイルというテキスト・ファイルに含まれる変数および値を使用して、一部またはすべてのユーザー・プロンプトに回答します。Oracle Universal Installer から、画面が表示されます。ユーザーがすべてのプロンプトに対する応答を提供していない場合、インストール中に情報の入力が必要になる場合があります。

インストール中に、root.sh スクリプトを実行する必要があります。root.sh スクリプトを実行すると、環境変数の設定が検出され、これによってローカルの bin ディレクトリのフルパスを入力できます。

**参照：** レスポンス・ファイルの実行の詳細は、7-6 ページの「[レスポンス・ファイルの指定](#)」を参照してください。

## インストール要件

インストール要件の完全なリストは、[第 2 章「インストールの準備」](#)を参照してください。

## サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール用のファイルの作成

コンピュータ上に oraInst.loc、emtab および oratab ファイルが存在しない場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを開始する前に、これらのファイルを作成する必要があります。これらのファイルは、サイレント・インストール中に、Oracle Universal Installer によって使用されます。[表 7-1](#) に、各プラットフォームの適切なディレクトリの場所を示します。

**表 7-1 oratab、emtab および oraInst.loc ファイルの場所**

プラットフォーム	oratab および emtab	oraInst.loc
Solaris	/var/opt/oracle/	/var/opt/oracle
HP 9000 Series HP-UX	/etc	/var/opt/oracle
Linux Intel	/etc	/etc

## oraInst.loc ファイルの作成

root ユーザーとして、[表 7-1](#) に示す適切なディレクトリに oraInst.loc ファイルを作成します。oracle ユーザー・グループに設定された読み込みおよび書き込み権限がこのファイルに付与されていることを確認します。oracle ユーザー・グループは、インストールを実行

するグループです。oraInst.loc ファイルには、次のテキストが入力されている必要があります。

```
inst_group=oracle_user_group
inventory_loc=$ORACLE_HOME
```

ここで、inventory\_loc はインベントリ・ファイルの場所を示し、\$ORACLE\_HOME はディレクトリのフルパスを示します。たとえば、\$ORACLE\_HOME が /private2/oracle/ocs である場合、ファイルの内容は次のとおりです。

```
inst_group=oracle_user_group
inventory_loc=/private2/oracle/ocs
```

---

---

**注意：** inventory\_loc が Oracle ホームに存在しない場合、inventory\_loc が存在するディレクトリに、oracle\_user\_group に設定された読み込みおよび書き込み権限が付与されていることを確認してください。

---

---

## emtab ファイルの作成

表 7-1 に示す適切なディレクトリに emtab ファイルを作成します。oracle ユーザー・グループに設定された読み込みおよび書き込み権限がこのファイルに付与されていることを確認します。emtab ファイルには、次のテキストが入力されている必要があります。

```
DEFAULT=$ORACLE_HOME
```

ここで、\$ORACLE\_HOME はディレクトリのフルパスを示します。たとえば、\$ORACLE\_HOME が /private2/oracle/ocs である場合、ファイルの内容は次のとおりです。

```
DEFAULT=/private2/oracle/ocs
```

## oratab ファイルの作成

表 7-1 に示す適切なディレクトリに oratab ファイルを作成します。このファイルが空で、oracle ユーザー・グループに対する読み込みおよび書き込み権限が付与されていることを確認します。

## レスポンス・ファイルの選択

Oracle Collaboration Suite CD Pack には、表 7-2 に示す 3 つのインストール用の Oracle Universal Installer レスポンス・ファイルが含まれています。

**表 7-2 レスポンス・ファイル**

インストール	ファイル名
Oracle9iAS Infrastructure	infrastructure.rsp
Oracle Collaboration Suite Information Storage	storage.rsp
このインストールには、Oracle Network Configuration Assistant (netca.rsp) および Database Configuration Assistant (dbca.rsp) のレスポンス・ファイルも含まれます。	
Oracle Collaboration Suite	midtier.rsp
このインストールには、Oracle Files Configuration Assistant (FilesCA_silent.rsp) のレスポンス・ファイルも含まれます。	

レスポンス・ファイルは、3 つのインストールのそれぞれの CD-ROM セットに含まれる最初の CD-ROM のルートに存在する /response ディレクトリに含まれています。サイレント・インストールまたは非インタラクティブ・インストールの要件を満たすように、レスポンス・ファイルを編集する必要があります。レスポンス・ファイルを使用するには、最初にこのファイルを CD-ROM からシステムにコピーします。

次に例を示します。

1. /response ディレクトリ（たとえば、Oracle9iAS Infrastructure のインストール用 CD-ROM の 1 枚目の CD-ROM）に移動します。
2. infrastructure.rsp ファイルをシステムのハード・ドライブにコピーします。

```
prompt> cp infrastructure.rsp private/ocs_infr_cd1/response/infrastructure.rsp
```

## レスポンス・ファイルの編集

テキスト・エディタを使用して、システム固有の情報が含まれるようにレスポンス・ファイルを編集します。レスポンス・ファイルのテキストによって、ユーザーが指定する必要がある情報を識別します。

レスポンス・ファイルには、変数の値を指定する必要があります。レスポンス・ファイルにリストされている各変数には、コメントが関連付けられています。コメントによって、変数タイプを識別します。次に例を示します。

```
string = "Sample Value"  
Boolean = True or False  
Number = 1000  
StringList = {"StringValue 1", "String Value 2"}
```

<Value Required> と表示された値は、サイレント・インストール用に指定する必要があります。

レスポンス・ファイル内の変数値のコメントは、Oracle Collaboration Suite のインストールを開始する前に削除します。

## レスポンス・ファイルの指定

レスポンス・ファイルを指定する前に、適切にファイルを構成していることを確認します。詳細は、前の項を参照してください。

**参照：** 次の項を参照してください。

- 7-5 ページの「レスポンス・ファイルの編集」
- 6-23 ページの「Oracle Files の非インタラクティブな初期構成」
- 4-12 ページの「Oracle Universal Installer の起動」
- 4-10 ページの「oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル」

Oracle Universal Installer がインストール時にレスポンス・ファイルを使用するには、Oracle Universal Installer の起動時にパラメータとしてレスポンス・ファイルの場所を指定します。

```
prompt> ./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

非インタラクティブ・モードでは、2-16 ページの「DISPLAY」で説明するとおり、環境変数 DISPLAY を設定する必要があります。サイレント・インストール・セッションを完全に実行するには、`-silent` パラメータを使用します。

```
prompt> ./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

多言語サポートをインストールするには、次のパラメータを使用します。

```
prompt> ./runInstallerNLS [-silent] -responseFile absolute_path_and_filename
```

非インタラクティブ・インストールの成功または失敗のログは、`installActions.log` に書き込まれます。サイレント・インストールの成功または失敗のログは、`silentInstall.log` に書き込まれます。ログ・ファイルは、インストール中に oraInventory ディレクトリに作成されます。

---

---

**重要：** インストール中に、いくつかの Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールするために、これらのレスポンス・ファイルは \$ORACLE\_HOME 下のサブディレクトリにコピーされます。インストールが正常に終了した後、これらのコピーは削除されます。インストールが失敗した場合、これらのコピーは削除されません。レスポンス・ファイルにパスワードまたはその他の機密情報が含まれる場合は、ファイル・システム上の残りのコピーをすべて削除することをお勧めします。

---

---

## root.sh スクリプトの実行

サイレント・インストールまたは非インタラクティブ・インストールを実行する場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストール後に、root.sh スクリプトを実行する必要があります。

## root.sh およびサイレント・インストール

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストール中は、root.sh スクリプトを実行するように求められません。root.sh スクリプトは、サイレント・インストール後に実行する必要があります。

root.sh スクリプトを実行するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Oracle ホーム・ディレクトリで root.sh スクリプトを実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/root.sh
```

ここで、\$ORACLE\_HOME はディレクトリのフルパスを示します。

3. root ユーザーを終了します。

### Oracle HTTP Server

サイレント・インストール中、Oracle Universal Installer によって、Oracle HTTP Server の起動が試行されます。ただし、Oracle HTTP Server は、root.sh スクリプトが実行されるまで起動しません。Oracle HTTP Server が起動しないために生成されたエラー・メッセージは、無視してください。

root.sh スクリプトを実行した後で、次のとおり Oracle HTTP Server を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin opmnctl stopall  
$ORACLE_HOME/opmn/bin opmnctl startall
```

## 異なるポート上での Oracle HTTP Server の使用

番号が 1024 より小さいポートで Oracle HTTP Server を使用する場合、`root.sh` スクリプトを実行しないでください。かわりに、`root` ユーザーとして次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin/root_sh_append.sh
```

ここで、`$ORACLE_HOME` はディレクトリのフルパスを示します。

`root_sh_append.sh` スクリプトによって、1024 より小さい番号のポートで Oracle HTTP Server を実行するために必要な権限が設定されます。

## root.sh および非インタラクティブ・インストール

Oracle Collaboration Suite の非インタラクティブ・インストール中、Oracle Universal Installer によって、`root.sh` スクリプトを実行するためのプロンプトが表示されます。

`root.sh` スクリプトを実行するには、次の手順を実行します。

1. `root` ユーザーとしてログインします。
2. Oracle ホーム・ディレクトリで `root.sh` スクリプトを実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/root.sh
```

ここで、`$ORACLE_HOME` はディレクトリのフルパスを示します。

3. `root` ユーザーを終了します。

非インタラクティブ・インストールの場合、「Finished running generic part of the root.sh script」および「Now product-specific root actions will be performed」と表示されたら、`root` ユーザーを終了し、「インストール」画面に戻ります。

`root.sh` スクリプトによって、次の項目が検出されます。

- 環境変数 `ORACLE_OWNER`、`ORACLE_HOME` および `ORACLE_SID` の設定。
- ローカルの `bin` ディレクトリのフルパス。デフォルトを使用するか、またはローカルの異なる `bin` ディレクトリに変更できます。

## エラー処理

サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストールの成功または失敗のログは、`silentInstall.log` ファイルに書き込まれます。このファイルは、`oraInventory` ディレクトリに作成されます。

変数値のコンテキスト、フォーマットまたはタイプが不適切な場合、その値は指定されていないものとして処理されます。セクションの範囲外の変数は無視されます。

不適切または不完全なレスポンス・ファイルを使用してサイレント・インストールまたは非インタラクティブ・インストールを試行すると、Oracle Universal Installer で、ディスク領域の不足、インストールの失敗などのエラーが発生します。

レスポンス・ファイルを指定せずに非インタラクティブ・インストールを試行すると、インストールが失敗します。

## 削除

サイレント・インストールまたは非インタラクティブ・インストールが失敗した場合、Oracle Collaboration Suite のインストールの試行によって作成されたすべてのファイルを完全に削除する必要があります。

**参照：** [第 8 章「削除」](#) を参照してください。

## 非インタラクティブ・モードでの Configuration Assistant の使用

非インタラクティブ・モードで Configuration Assistant を使用するには、次のいずれかの操作を実行します。

- Oracle Universal Installer レスポンス・ファイルを構成し、非インタラクティブ Configuration Assistant を起動します。
- 次のコマンド・フォーマットを使用して、Configuration Assistant をスタンドアロン・モードで実行します。

```
prompt> assistant_name [-silent] -responseFile filename
```

ここで、*assistant\_name* は実行する Configuration Assistant を示し、*filename* はこの Configuration Assistant 用のレスポンス・ファイルを示します。

Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールを非インタラクティブ・モードで実行する場合、インストールの最後に Oracle Net Configuration Assistant によってシステムが構成されません。インストール後、Oracle ホーム・ディレクトリから `netca` コマンドを実行することによって Oracle Net Configuration Assistant を使用した Oracle Net の構成を実行するか、または `netca.rsp` レスポンス・ファイルを使用します。

---

**注意：** レスポンス・ファイルを構成せずに非インタラクティブ・セッションを試行すると、Oracle Universal Installer または Configuration Assistant が失敗します。失敗した非インタラクティブ・インストールのトラブルシューティングの詳細は、7-10 ページの「[レスポンス・ファイルのエラー処理](#)」を参照してください。

---

**参照：**

- 6-23 ページの「[Oracle Files の非インタラクティブな初期構成](#)」を参照してください。

## レスポンス・ファイルのエラー処理

Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は、実行時にレスポンス・ファイルを検証します。検証に失敗した場合、非インタラクティブなインストールまたは構成のプロセスが終了します。パラメータ値のコンテキスト、フォーマットまたはタイプが不適切な場合、Oracle Universal Installer は、ファイルに値が指定されていないものとして処理します。また、セクションの範囲外の変数は無視されます。

失敗に関する情報は、インストール・セッションのログ・ファイルに記録されます。

**参照：** oraInventory ディレクトリおよびインストール・ログ・ファイルの詳細は、4-10 ページの「[oraInventory ディレクトリおよびインストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

この章では、Oracle Collaboration Suite を削除する方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [削除の概要](#)
- [Oracle コンポーネントの削除の準備](#)
- [Oracle コンポーネントの削除](#)

---

---

**注意：**

- 削除プロセスを開始する前に、すべての Oracle サービスおよびプロセスを停止してください。
  - Oracle Universal Installer では、コンポーネントまたは Oracle Collaboration Suite インスタンスを選択してカスタム削除することはできません。削除を開始する前に、削除対象を確認してください。
- 
-

## 削除の概要

Oracle Universal Installer では、Oracle Collaboration Suite がインストールされている場合、同じバージョンの Oracle Collaboration Suite を再インストールすることはできません。同じバージョンの Oracle Collaboration Suite を再インストールするには、インストールされている製品を削除した後で、インストールします。

Oracle Collaboration Suite をホストから正常に削除するには、Oracle Collaboration Suite のセカンダリ（後続の）・インストールを削除した後で、プライマリ（最初の）・インストールを削除することをお勧めします。

Oracle Collaboration Suite を削除する前に、Oracle Email を削除する必要があります。

## Oracle コンポーネントの削除の準備

1. 中間層を削除する前に、各中間層の Oracle ホームから次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/oes/bin/removemidtierfromoid.sh
```

このスクリプトによって、電子メール・プロセスのターゲット、プロセス・インスタンスおよびこれらのリファレンスが Oracle Internet Directory から削除されます。

2. Oracle Email の Email Store を削除する必要がある場合、中間層で SQL\*Plus を実行し、SYSTEM として Email Store データベースに接続し、次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/oes/install/sql/dropschema.sql;
```

3. Oracle Universal Installer を使用して、Oracle Collaboration Suite 中間層ソフトウェアを削除します。

**参照：** 4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。

## Oracle コンポーネントの削除

1. Oracle Universal Installer を起動します。4-12 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。  
「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
2. 「製品の削除」をクリックします。  
「インベントリ」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、Oracle ホームにインストールされているすべてのコンポーネントが表示されます。
3. インストールされているコンポーネントを再確認し、削除する Oracle ホームを選択します。
4. 「削除」をクリックします。

「確認」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、削除するように選択したすべてのコンポーネントが表示されます。

5. 「確認」ウィンドウを下にスクロールして、削除するように選択されたコンポーネントを確認します。
6. 「はい」をクリックします。
7. 複数の Oracle9iAS Infrastructure がインストールされている場合に Oracle9iAS Infrastructure のセカンダリ・インストールを選択すると、Oracle Universal Installer はこのインストールを削除します。Oracle9iAS Infrastructure のプライマリ・インストールを選択すると、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウが表示されます。次の操作は、現在ホスト上にインストールされている Oracle9iAS Infrastructure の数によって異なります。
8. 現在、ホスト上に Oracle9iAS Infrastructure が 1 つのみインストールされている場合、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウに次のメッセージが表示されます。

"The active Oracle9iAS Administration Service is in \$ORACLE\_HOME. There are no other Administration Services available."

9. 「OK」をクリックして続行します。
10. 現在、ホスト上に Oracle9iAS Infrastructure が複数インストールされている場合、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウに次のメッセージが表示されます。

"The active Oracle9iAS Administration Service is in \$ORACLE\_HOME. You may select one of the Administration Services to become the active one."

ウィンドウに示された場所以外にインストールされている Oracle9iAS Infrastructure の 1 つを選択します。この Oracle9iAS Infrastructure がプライマリ・インストールとなり、Oracle9iAS Administration Service の新しい場所になります。

11. 「OK」をクリックして続行します。

---

---

**注意：**

- コンポーネントを削除すると、依存するすべてのコンポーネントおよびファイルも削除されます。
  - Oracle Universal Installer は、削除中にすべてのファイルおよびディレクトリを削除するわけではありません。削除されなかったファイルおよびディレクトリは手動で削除する必要があります。
- 
-



---

---

# インストール・チェックリスト

この付録では、Oracle Collaboration Suite および Oracle Files Configuration Assistant の 3 つのインストールのチェックリストを示します。これらのチェックリストには、各インストールおよび構成のプロンプトで入力求められる情報のタイプを示します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure](#) のインストール・チェックリスト
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage](#) のインストール・チェックリスト
- [Oracle Collaboration Suite](#) のインストール・チェックリスト
- [Oracle Files](#) の構成チェックリスト

## Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト

表 A-1 に、Oracle9iAS Infrastructure のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

**表 A-1 Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報**

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle のベース・ディレクトリ <sup>1</sup>	/private/oraInventory	
Oracle ホームの位置	/private/orainf	
OSDBA グループ <sup>1</sup> (2-19 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
OSOPER グループ <sup>1</sup> (2-19 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
多言語サポート (4-12 ページの「Oracle Universal Installer の起動」を参照)	runInstallerNLS	
インスタンス名	instance1	
ias_admin パスワード	oracle1	
Oracle9iAS Single Sign-On Server のホスト名 <sup>2</sup>	ocs.us.oracle.com	
Oracle9iAS Single Sign-On のポート番号 <sup>2</sup> (付録 C 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	7777	
Oracle Internet Directory のホスト名	ocs.us.oracle.com	
Oracle Internet Directory のポート番号 (付録 C 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	4032	
Oracle Internet Directory のユーザー名	cn=orcladmin	

表 A-1 Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報 (続き)

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle Internet Directory のパスワード	oracleadmin	
データベース・キャラクタ・セット	UTF8	

<sup>1</sup> Oracle ソフトウェアを初めてコンピュータにインストールするときに必要です。

<sup>2</sup> Oracle Collaboration Suite のインストールに必要です。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト

表 A-2 に、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 A-2 Information Storage のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle のベース・ディレクトリ <sup>1</sup>	/private/oraInventory	
Oracle ホームの位置	/private/orastore	
OSDBA グループ <sup>1</sup> (2-19 ページの「 <a href="#">権限が付与されたグループの UNIX グループ名</a> 」を参照)	svrtech	
OSOPER グループ <sup>1</sup> (2-19 ページの「 <a href="#">権限が付与されたグループの UNIX グループ名</a> 」を参照)	svrtech	
多言語サポート (4-12 ページの「 <a href="#">Oracle Universal Installer の起動</a> 」を参照)	runInstallerNLS	
インスタンス名	instance1	
データベース・キャラクタ・セット	UTF8	UTF8 <sup>2</sup>

<sup>1</sup> Oracle ソフトウェアを初めてコンピュータにインストールするときに必要です。

<sup>2</sup> 今回のリリースの Oracle Collaboration Suite では、Email Store および Files Store のデフォルトのキャラクタ・セットは UTF8 です。

## Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト

表 A-3 に、Oracle Collaboration Suite のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

**表 A-3 Oracle Collaboration Suite のインストール情報**

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle のベース・ディレクトリ <sup>1</sup>	/private/oraInventory	
Oracle ホームの位置	/private/oraocs	
OSDBA グループ <sup>1</sup> (2-19 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
OSOPER グループ <sup>1</sup> (2-19 ページの「権限が付与されたグループの UNIX グループ名」を参照)	svrtech	
多言語サポート (4-12 ページの「Oracle Universal Installer の起動」を参照)	runInstallerNLS	
インスタンス名	instance1	
ias_admin パスワード	oracle1	
Oracle9iAS Single Sign-On Server のホスト名 <sup>2</sup>	ocs.us.oracle.com	
Oracle9iAS Single Sign-On のポート番号 <sup>2</sup> (付録 C 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	7777	
Oracle Internet Directory のホスト名	ocs.us.oracle.com	

表 A-3 Oracle Collaboration Suite のインストール情報 (続き)

情報	値の例	ユーザー固有情報
Oracle Internet Directory のポート番号 (付録 C 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	4032	
Oracle Internet Directory のユーザー名	cn=orcladmin	
Oracle Internet Directory のパスワード	oracledadmin	

<sup>1</sup> Oracle ソフトウェアを初めてコンピュータにインストールするときが必要です。

<sup>2</sup> Oracle Collaboration Suite のインストールに必要です。

## Oracle Files の構成チェックリスト

表 A-4 に、Oracle Files の構成に必要な情報を示します。操作を開始する前に、示された構成情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 A-4 Oracle Files の構成情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
スキーマ名	FILES	
スキーマのパスワード	files_schemapswd	
Oracle Files の system のユーザー・パスワード	files_syspswd	
Oracle Files の site_admin のユーザー・パスワード	password1	



# B

---

---

## トラブルシューティング

この付録では、一般的なインストールの問題および解決策について説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar](#) のインストールのトラブルシューティング
- [Oracle Files](#) のインストールのトラブルシューティング
- [Oracle Real Application Clusters](#) のトラブルシューティング

## Oracle Calendar のインストールのトラブルシューティング

Oracle Calendar のインストールに失敗した場合は、次の手順を実行します。

1. `$ORACLE_HOME/calendarserver` ディレクトリを削除します。
2. `$ORACLE_HOME/calendarserver` ディレクトリへの `/users/unison` リンクを削除します。
3. `root.sh` を再実行します。

## Oracle Files のインストールのトラブルシューティング

ほとんどの構成エラーは、インストール前の手順を適切に実行しなかったことが原因で発生します。次の項では、いくつかの一般的なインストール問題、その考えられる原因、およびその問題を修正するために必要な操作について説明します。インストール操作および構成操作は、次の個別の2つのログ・ファイルに記録されます。これらのログ・ファイルを調べると、トラブルシューティングに有効です。

- `$ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActions.log` ファイルには、インストール中に発生したすべてのエラーが記録されます。
- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/FilesConfig.log` ファイルには、Oracle Files の構成中に発生したエラーが記録されます。
- `ORACLE_HOME/ifs/files/log/DBHost_port_ServiceName_SchemaName/midtierhostName_Node.log` は、Files ノードのログ・ファイルです。このログ・ファイルを参照して、現在実行されているプロトコル・サーバーおよびエージェントを診断します。また、プロトコル・サーバーおよびエージェントを停止して、問題を診断することにも有効です。

次に例を示します。

```
/data/mtier/ifs/files/log/ifsqa1_us_oracle_com_1521_ifsqa1service_myschema/  
test2-pc_Node.log
```

- `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ifs_files/application-deployments/files/OC4J_ifs_files_default_island_1/application.log` は、Files の HTTP ノードのログ・ファイルです。このログ・ファイルを参照して、Oracle Files アプリケーションおよび `OC4J_ifs_files` を診断します。また、Web ブラウザまたは DAV クライアント (Web フォルダおよび Oracle FileSync) での Oracle Files の使用時に問題を診断することにも有効です。

次に例を示します。

```
/data/mtier/j2ee/OC4J_ifs_files/application-deployments/files/  
OC4J_ifs_files_default_island_1/application.log
```

この項では、次の問題について説明します。

- データベース・オブジェクトの作成エラー
- データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ
- データベース・リソースが不十分なために発生する Oracle Files サーバー障害
- Oracle Text 検証フェーズ中の Oracle Files Configuration Assistant のハングアップ
- `$ORACLE_HOME/ifs/files/log/domain_name/node_name.log` に書き込まれる「Out of database cursors」メッセージ
- 低速なサーバー

## データベース・オブジェクトの作成エラー

データベースが実行されていないか使用可能でない、またはリスナーが実行されていません。この場合は、構成前にデータベースおよびリスナーを起動します。

## データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ

データベースが実行されていないか、または Oracle Text が正しく構成されていません。この場合は、インストール前にデータベースを起動し、`tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルを確認します。

## データベース・リソースが不十分なために発生する Oracle Files サーバー障害

`initsid.ora` に指定されている値が小さすぎます。`$ORACLE_HOME/ifs/files/log` ディレクトリで、障害サーバーのログ・ファイルを確認します。`initsid.ora` ファイルを編集（または SPFILE を変更）し、より大きい値を指定します。

## Oracle Text 検証フェーズ中の Oracle Files Configuration Assistant のハングアップ

`ctxhx` プロセスが不適切に構成され、ループしています。

1. `top` または `ps` を使用して、`ctxhx` が 80% を超える CPU を使用中であり、1 分以内に完了しないことをオペレーティング・システム・プロセスで確認します。
2. `ctxhx` プロセスを中断します。
3. `ifsca` を再実行します。
4. この時点で問題が解決されていない場合、次のとおり、`ifsca` を使用せずに `ctxhx` をテストします。

```
cd $ORACLE_HOME/ctx/bin
./ctxhx $ORACLE_HOME/ifs/files/admin/binaries/ifsctxtest.doc test.html
```

5. このテストが失敗した場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。
6. このテストが正常に終了した場合は、ifsca を使用せずに VerifyContext をテストします。
  - a. バイナリ・ラージ・オブジェクト (BLOB) 列を含む一時表を作成します。
  - b. その BLOB 列に Oracle Text 索引を作成します。
  - c. 単純な Microsoft Word 文書その BLOB 列に挿入します。
  - d. Oracle Text 索引を同期化します。
  - e. 文書のコンテンツを問い合わせます。
  - f. 次の個々の行を発行して、テスト VerifyContext を含むように CLASSPATH を設定します。
    - 次のコマンドを含むように CLASSPATH を設定します。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/lib/files.jar
$ORACLE_HOME/ifs/files/settings
$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip
```
    - その後、次のコマンドを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/ifs/files/admin/binaries

java -classpath $CLASSPATH oracle.ifs.admin.tools.schema.VerifyContext
SYS SYS_password
$ORACLE_HOME/ifs/files/admin/binaries/ifsctxtest.doc
```
  - g. データベースが別のコンピュータに存在する場合は、次のようなオプションの Java Database Connectivity (JDBC) 接続文字列を指定します。

```
jdbc:oracle:oci8:@myTNSalias
```
7. VerifyContext の出力を調べて、エラーの原因を特定します。

## **\$ORACLE\_HOME/ifs/files/ log/domain\_name/node\_name.log に書き込まれる 「Out of database cursors」メッセージ**

initsid.ora に指定されている OPEN\_CURSORS の値が小さすぎます。OPEN\_CURSORS により大きい値を指定して、initsid.ora ファイルを変更するか、または SPFILE を変更します。

## **低速なサーバー**

チューニングが必要です。

**参照：**『Oracle Files 管理ガイド』の Oracle Files のトラブル・シューティングおよびパフォーマンスに関する章を参照してください。

## Oracle Real Application Clusters のトラブルシューティング

選択したリモート・ノード上でインストールを正常に実行するには、選択したすべてのノードで同一の、書込み可能な Oracle ホームのパスを選択します。そのようなパスを選択しなかった場合は、リモート・ノードでのインストールが失敗します。この失敗を示すエラー・メッセージは表示されません。



---

## デフォルトのポート番号およびポート範囲

この付録では、Oracle Universal Installer によって自動的に割り当てられるポート番号について説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [ポート割当ての概要](#)
- [コンポーネントのポート番号](#)
- [Oracle のポート使用 \(コンポーネント別\)](#)
- [Oracle のポート使用 \(ポート番号別\)](#)

## ポート割当ての概要

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite は、コンポーネントの構成時に、自動的にコンポーネントにポート番号を割り当てます。ポート番号は、事前に割り当てられた一連のデフォルトのポート番号およびポート範囲内から割り当てられます。

ポート番号は、次の方法で割り当てられます。

1. デフォルトのポート番号が Oracle プロセスまたは Oracle 以外のプロセスですでに使用中であるかどうかを確認されます。
2. デフォルトのポート番号が使用中ではない場合は、そのポート番号がコンポーネントに割り当てられます。
3. デフォルトのポート番号がすでに使用中である場合は、空きポート番号が見つかるまで、ポート範囲内で最も小さい番号から昇順に番号の割当てが試行されます。

## コンポーネントのポート番号

Oracle Universal Installer は、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール中に割り当てられるポートを示す `portlist.ini` というファイルを作成します。インストール・プロセスでは、自動的にすべてのポート競合が検出され、そのコンポーネントに割り当てられた範囲内で代替ポートが選択されます。このファイルの場所は次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/install/portlist.ini
```

`portlist.ini` ファイルには、「ポート名 = ポート番号」というフォーマットでコンポーネント・エントリが示されます。次に例を示します。

```
Oracle HTTP Server port = 7777
Oracle HTTP Server SSL port = 4443
Oracle HTTP Server listen port = 7778
Oracle HTTP Server SSL listen port = 4444
Oracle HTTP Server Jserv port = 8007
Enterprise Manager Servlet port = 1810
```

ブラウザで「Oracle Collaboration Suite Welcome」ページにアクセスし、「Ports」タブを選択して、ポート番号を表示することもできます。

```
http://hostname:port_number/
```

ここで、デフォルトの `port_number` は 7777 です。

---

**注意：** Oracle Universal Installer は、Oracle Collaboration Suite のインストール中に選択されたコンポーネントに対してポート番号を使用します。その他の Oracle Collaboration Suite インスタンスを追加する場合は、インストール済みのインスタンスが追加インストール時に実行されていることを確認してください。

---

## Oracle9iAS Infrastructure のポート使用

Oracle9iAS Infrastructure をインストールするには、コンピュータでポート 1521 を排他的に使用する必要があります。現行システムのアプリケーションのいずれかがこのポートを使用している場合は、Oracle9iAS Infrastructure をインストールする前に、次のいずれかの操作を実行します。

- ポート 1521 を使用する既存のアプリケーションが存在する場合は、そのアプリケーションが別のポートを使用するように再構成します。
- 既存の Oracle Net Listener および Oracle9i データベースが存在する場合は、Oracle9iAS Infrastructure のインストールを続行します。Oracle9iAS Infrastructure は、既存の Oracle Net Listener を使用します。

## Oracle のポート使用（コンポーネント別）

表 C-1 に、Oracle のポートをコンポーネント別に示します。

**表 C-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）**

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle9iAS Clickstream Intelligence</b>		
Oracle9iAS Clickstream Collector Server	6675	固定
Oracle9iAS Clickstream Collector Agent	6666	固定
Oracle9iAS Clickstream Intelligence Collector Agent	6666	6666-6674
Oracle9iAS Clickstream Execution Engine	6676	固定
Oracle9iAS Clickstream Intelligence Viewer	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle9iAS Clickstream Runtime Administrator	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ

表 C-1 Oracle のポート使用 (コンポーネント別) (続き)

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J)</b>		
OC4J Apache JServ Protocol (AJP)	3001	3001-3100
OC4J Remote Method Invocation (RMI)	3101	3101-3200
Java Message Service (JMS) for Oracle9iAS Containers for J2EE	3201	3201-3300
OC4J HTTP リスナー	3301	3301-3400
<b>Oracle9iAS Forms Services</b>		
Oracle9iAS Forms Services	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
<b>Oracle HTTP Server</b>		
Oracle HTTP Server - 非 SSL	7777	7777-7877
Oracle HTTP Server - SSL	4443	4443-4543
Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL	7777	7777-7877
Oracle HTTP Server - 非 SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合)	7778	7777-7877
Oracle HTTP Server - SSL	4443	4443-4543
Oracle HTTP Server - SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合)	4444	4443-4543
Oracle HTTP Server JServ サブレット・エンジン	8007	8007-8107
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート	6003	6003-6099
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のローカル・ポート	6100	6100-6199
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリモート・ポート	6200	6200-6299
Oracle HTTP Server - Java Object Cache	7000	7000-7010

表 C-1 Oracle のポート使用 (コンポーネント別) (続き)

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle9iAS Portal</b>		
Oracle9iAS Portal	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle9iAS Single Sign-On	5000	5000-5099
<b>Oracle9iAS Reports Services</b>		
Oracle9iAS Reports Services	3000	3000-3010
SQL*Net - 6i との下位互換性専用	1950	1950-1960
Visigenics CORBA - Reports 9i	14000	14000-14010
<b>Oracle Email</b>		
Oracle Email	5100	5100-5200
Internet Message Access Protocol (IMAP) 4	143	固定
IMAP4-SSL	993	固定
POP3	110	固定
POP3-SSL	995	固定
SMTP	25	固定
NNTP	119	固定
NNTP-SSL	563	固定
<b>Oracle9iAS Web Cache</b>		
Oracle9iAS Web Cache HTTP Listen - 非SSL	7777	7777-7877
Oracle9iAS Web Cache HTTP Listen - SSL	4443	4443-4543
Oracle9iAS Web Cache 管理	4000	4000-4030
<b>Oracle Wireless &amp; Voice</b>		
Oracle Wireless & Voice	Oracle HTTP Server と同じ	Oracle HTTP Server と同じ
Oracle Wireless & Voice PIM 通知ディスプレイパッチャ	9000	9000-9100

表 C-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle Enterprise Manager</b>		
Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー管理サービス	1810, 1811	1812-1820
Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent	1748, 1754, 1808, 1809	固定
Oracle Management Server	7771, 7772, 7773	7771-7773
<b>Oracle Internet Directory</b>		
Oracle Internet Directory	389, 4031-4040	4031-4040
Oracle Internet Directory - 非 SSL	4032	
Oracle Internet Directory - SSL	4031	
Oracle Calendar		
uniengd (UNIX デーモン)	5730	
unisncd (UNIX デーモン)	5731	
unidasd (UNIX デーモン)	5732	
<b>Oracle Files</b>		
Oracle Files ドメイン・コントローラ	53000 までの範囲（自動割当て）	動的
Oracle Files のメイン・ノード	53000 までの範囲（自動割当て）	動的
Oracle Files の HTTP ノード	53000 までの範囲（自動割当て）	動的
LDAP- 非 SSL	Oracle Internet Directory と同じ	Oracle Internet Directory と同じ
LDAP-SSL	Oracle Internet Directory と同じ	Oracle Internet Directory と同じ
AFP	548	固定
FTP	21	2100 または 21000
NFS	2049	4048 および 4049 (MOUNT サーバー用)
SMB	139	固定

表 C-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle Workflow</b>		
Transparent Network Substrate (TNS)	1521	固定

## Oracle のポート使用（ポート番号別）

表 C-2 に、Oracle のポートをポート番号の昇順で示します。

表 C-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）

ポート番号	コンポーネント
21	Oracle Files - FTP
110	Oracle Email - POP
119	Oracle Email - NNTP
139	Oracle Files - SMB
389	LDAP (Oracle Internet Directory)
548	Oracle Files - AFP
563	Oracle Email NNTP - SSL
636	Oracle Internet Directory - SSL
995	Oracle Email POP - SSL
1521	Oracle Workflow - TNS
1748	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1754	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1808	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1809	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1810	Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー・サービス
1811	Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー・サービス
1950	Oracle9iAS Reports Services Oracle Net
2049	Oracle Files - NFS
2070	Oracle9iAS Syndication Server (OSS) - OSS へのアクセス用
3001	Oracle9iAS Containers for J2EE - AJP

表 C-2 Oracle のポート使用 (ポート番号別) (続き)

ポート番号	コンポーネント
3101	Oracle9iAS Containers for J2EE - RMI
3201	Oracle9iAS Containers for J2EE - JMS
3301	Oracle9iAS Containers for J2EE HTTP リスナー
4000	Oracle9iAS Web Cache 管理ポート
4001	Oracle9iAS Web Cache の無効なポート
4002	Oracle9iAS Web Cache 統計
4031	Oracle Internet Directory SSL
4032	Oracle Internet Directory 非 SSL
4443	Oracle HTTP Server - SSL、Oracle HTTP Server Listen - SSL、Oracle9iAS Web Cache Listen - SSL
4444	Oracle HTTP Server Listen - SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている場合)
5000	Oracle9iAS Single Sign-On
5100	Oracle Email
5730	Oracle Calendar
5731	Oracle Calendar
5732	Oracle Calendar
6003	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート
6100	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のローカル・ポート
6200	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリモート・ポート
6666	Oracle9iAS Clickstream Collector Agent
6675	Oracle9iAS Clickstream Collector Server
6676	Oracle9iAS Clickstream Execution Engine
7000	Oracle HTTP Server Java Object Cache
7771	Oracle Management Server
7772	Oracle Management Server
7773	Oracle Management Server

表 C-2 Oracle のポート使用 (ポート番号別) (続き)

ポート番号	コンポーネント
7777	Oracle HTTP Server - 非 SSL、Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL、 Oracle9iAS Web Cache Listen - 非 SSL
7778	Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストール および構成されている場合)
8007	Oracle HTTP Server JServ サブレット・エンジン
9000	Oracle Wireless & Voice PIM 通知ディスパッチャ
14000	Oracle9iAS Reports Services Visigenics - CORBA
16001	Internet Inter-ORB Protocol (IIOP)
53000 までの範囲	Oracle Files のドメイン・コントローラおよびノード
53000 までの範囲	Oracle Files のメイン・ノード
53000 までの範囲	Oracle Files の HTTP ノード



---

---

# Oracle Collaboration Suite Client の インストール

Oracle Collaboration Suite Client CD-ROM には、クライアント製品が含まれています。  
この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Outlook Connector 3.4](#)
- [Oracle CorporateTime 6.0.3 for Windows](#)
- [Oracle CorporateTime 5.2.3 for Macintosh](#)
- [Oracle CorporateTime 5.0.2 for Motif](#)
- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm \(Windows Edition\)](#)
- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC](#)
- [Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm \(Macintosh Edition\)](#)
- [Oracle FileSync for Windows](#)

## Oracle Outlook Connector 3.4

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Outlook Connector のシステム要件](#)
- [Oracle Outlook Connector のインストール前の要件](#)
- [Oracle Outlook Connector のインストール](#)
- [Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール](#)
- [Oracle Outlook Connector の削除](#)

## Oracle Outlook Connector のシステム要件

表 D-1 に、Oracle Outlook Connector のシステム要件を示します。

**表 D-1 システム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows NT 4.0</li> <li>■ Windows 98</li> <li>■ Windows 2000</li> <li>■ Windows XP Professional</li> </ul> <p>Windows NT、2000 および XP に Oracle Outlook Connector をインストールするには、管理権限が必要です。</p>
ディスク領域	ユーザーの IMAP4 メールボックス・サイズの約 60% に相当する空きディスク領域。
RAM	ご使用の Microsoft Outlook クライアントの RAM 要件を参照してください。
Outlook	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Outlook 98</li> <li>■ Outlook 2000</li> <li>■ Outlook 2002</li> </ul>
カレンダー・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle Calendar Server 5.5
電子メール・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している送信メール用の SMTP サーバー。任意の IMAP4 準拠のメール・サーバー (Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle9iAS など)。他のサード・パーティの IMAP4 サーバーでは、IMAP4 プロトコルの実装に相違があるため、異なるレベルの Outlook 電子メール・サポートが提供される場合があります。

表 D-1 システム要件 (続き)

要件	値
PDA 同期化用の コンジット	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ PocketMirror 2.04 または 3.0 (3.0 を推奨)</li> <li>■ PocketJournal</li> <li>■ Desktop To Go 2.5</li> <li>■ Desktop To Go 2.509 (Outlook 2002 の場合のみ)</li> <li>■ PSIWIN 2.3 または 2.31</li> <li>■ ActiveSync 3.0、3.1 または 3.5</li> <li>■ HotSync Manager 4.0 (Windows XP の場合のみ)</li> </ul>

## Oracle Outlook Connector のインストール前の要件

- サポートされている Outlook バージョンが、サポートされているプラットフォームにインストールされている必要があります。
- Windows NT、2000 および XP に Oracle Outlook Connector をインストールするには、管理権限が必要です。
- Outlook 98 および Outlook 2000 は、「企業 / ワークグループ」モードでインストールされている必要があります。「ツール」 > 「オプション」 > 「メール配信」 > 「メールサポートの再設定」を選択して、Outlook の構成を確認します。
- Outlook Connector 3.1.2 をアップグレードすると、オフライン・フォルダが再初期化されます。情報の消失を回避するために、アップグレード前にオフライン・フォルダを同期化することをお勧めします。

---

**注意：** POP メール・ユーザーへの警告：Oracle Outlook Connector アップグレード・プロセスでオフライン・フォルダが再初期化され、プロファイル・ディレクトリが空になると、受信ボックスおよびサブフォルダ内のすべてのメールが削除されます。以前のメールの消失を回避するには、コンピュータ上のプロファイル・ディレクトリ外の場所に新しい個人用フォルダファイル (.pst) を作成し、保存するすべてのメッセージをそのフォルダに移動してください。

---

- カスタム・ビューは、Oracle Outlook Connector のアップグレードによってリセットされます。

## Oracle Outlook Connector のインストール

1. Outlook Connector をインストールする前に、すべての Windows アプリケーションを終了します。

2. OC\_03040\_WIN.exe ファイルをダブルクリックします。画面に表示されるインストール手順に従います。

---

**注意：** POP3 プロトコルと IMAP4 プロトコルの間の競合を回避するために、Microsoft の Internet Mail または Exchange サービス・プロバイダと Outlook Connector の両方が同じ電子メール・サーバーに接続するように構成される場合は、これらのサービス・プロバイダを Outlook Connector と同じプロファイルでセットアップしないでください。

---

## Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール

Oracle Outlook Connector インストーラは、サイレント・モードで実行している場合、通常はユーザーがインストール・ダイアログ・ボックスを介して指定するすべての情報を、事前に設定された構成ファイルで参照します。Oracle Outlook Connector では、ctoc.ini というサンプル・ファイルを使用できます。このファイルをテンプレートとして使用し、そのパラメータの値をインストールに合わせて変更します。使用可能なパラメータの詳細は、表 D-2 を参照してください。最初の起動時に、値が指定されておらず、デフォルト値を持たないすべてのパラメータに対して値を入力するためのプロンプトが表示されます。

ユーザーの操作なしにコマンドラインから Oracle Outlook Connector をインストールするには、-s オプションを指定して製品の自己解凍形式の実行ファイルを実行し、使用する構成ファイルを -cfg オプションで指定します。

たとえば、インストーラ・ファイルおよび構成ファイルの両方が C: ドライブのルート・ディレクトリに存在し、インストーラ・ファイル名が OC\_03040\_WIN.exe である場合は、次のとおり指定します。

```
C:¥> OC_03040_WIN.exe -s -cfg ctoc.ini
```

次に示す 2 つのオプションのフラグも指定できます。

- -f: コマンドラインで -f を指定すると、Oracle Outlook Connector インストーラは、製品の現行バージョンをインストールする前に、以前のすべてのバージョンの削除を試行します。
- -1: コマンドラインで -1 (数字の 1) を指定すると、Oracle Outlook Connector のインストールの前半部分のみが実行され、必要なファイルのコピー、および使用可能なサービス・プロバイダとしての Oracle Outlook Connector の登録が行われます。インストールの後半部分 (プロファイルへの Oracle Outlook Connector の追加) は、実行されません。

---

**注意：** 一度サイレント・インストールを実行すると、-f オプションが指定されていない後続のサイレント・インストールでは、インストールの前半部分のみが実行され、必要なファイルのコピー、および使用可能なサービス・プロバイダとしての Oracle Outlook Connector の登録が行われます。インストーラは、インストールの後半部分を続行しません。

---

Oracle Outlook Connector の大規模な配置の詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

## Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ

表 D-2 に、Oracle Outlook Connector のサイレント・インストールに使用できるパラメータをセクションごとにアルファベット順で示します。示されるデフォルト値は、該当するパラメータの値が空白であるか、そのパラメータが構成ファイルに存在しない場合に適用されません。

構成ファイル内のセミコロン (;) で始まるすべての行はコメントで、インストーラによって読み込まれません。

**表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ**

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Calendar]	AccountName	カレンダー・サーバーの有効なユーザー名	なし	このユーザーのカレンダー・アカウント名を指定します。
[Calendar]	DomainID	有効なドメイン ID	なし	組織を示すドメイン ID を指定します。 [Calendar] UseDNS パラメータおよび [Calendar] HostName パラメータも指定する必要があります。
[Calendar]	HostName	有効なホスト名、または「host1;host2;hostN」というフォーマットの名前のリスト (「scooter;kermit」など)	なし	1つ以上の Calendar Domain Service ホストのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。[Calendar] UseDNS パラメータおよび [Calendar] DomainID パラメータも指定する必要があります。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Calendar]	NoAccount	0 ([Calendar] パラメータを使用して、カレンダー・サーバー接続を構成します) 1 (カレンダー・サーバー接続の構成をスキップし、[Calendar] セクションで他のパラメータによって設定されたすべての値を無視します)	0	このユーザーがカレンダー・サーバー・アカウントを持たないことを指定し、[Calendar] セクションで他のパラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[Calendar]	Password	このユーザーのカレンダー・アカウントの有効なパスワード	なし	このユーザーのカレンダー・パスワードを指定します。
[Calendar]	Port	0 (デフォルトを使用します) 有効なポート	なし	[Calendar] ServerName パラメータで指定されたカレンダー・サーバーに接続するために使用するポートを指定します。
[Calendar]	ServerName	有効なホスト名、およびそれに後続するカンマと有効なノード ID (「kermit,1200」など)	なし	カレンダー・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレス、および接続先であるノード ID (必要な場合) を指定します。
[Calendar]	UseDNS			Calendar Domain Service を使用します。
[E-Mail]	AccountName	有効なユーザー名	なし	IMAP4 サーバーでのこのユーザーのアカウント名を指定します。
[E-Mail]	DisplayName	任意の英数字文字列	なし	このユーザーが送信するすべての電子メールに表示する名前を設定します。
[E-Mail]	EmailAddress	有効な電子メール・アドレス	なし	現行ユーザーの電子メール・アドレスを指定します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	Imap4ServerName	有効なホスト名	なし	IMAP4 電子メール・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。
[E-Mail]	ImapNoAccount	0 ([E-Mail] セクションの他の IMAP4 構成パラメータを使用して、IMAP4 サーバー接続を構成します)  1 (IMAP4 サーバー接続の構成をスキップし、[E-Mail] セクションで他の IMAP4 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します)		このユーザーが IMAP4 アカウントを持たないことを指定し、[E-Mail] セクションで他の IMAP4 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	ImapPort	有効なポート	143	IMAP4 サーバー用のポートを指定します。
[E-Mail]	ImapSameAsCTime	0 (カレンダー・サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用しません)  1 (カレンダー・サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用します)	0	インストーラに、[Calendar] AccountName パラメータおよび [Calendar] Password パラメータで指定されたユーザー名およびパスワードを IMAP4 サーバーに対しても使用するよう指示します。このパラメータを 1 に設定すると、インストーラは [E-Mail] AccountName パラメータおよび [E-Mail] Password パラメータで設定されたすべての値を無視します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	ImapSSL	0 (SSL を使用しません) 1 (SSL を使用します)	0	インストーラに、IMAP4 電子メール・サーバーとのすべての通信に Secure Sockets Layer (SSL) を使用するよう指示します。
[E-Mail]	Organization	任意の英数字文字列	なし	送信電子メールに表示する、現行ユーザーの組織を指定します。これはオプションです。
[E-Mail]	Password	このユーザーの電子メール・アカウントの有効なパスワード	なし	IMAP4 サーバーでのこのユーザーのパスワードを指定します。
[E-Mail]	ReplyTo	有効な電子メール・アドレス	なし	現行ユーザーが送信したメールへの返信メールが送信される宛先電子メール・アドレスを指定します。これはオプションです。
[E-Mail]	SmtAccount	有効なホスト名	なし	SMTP 電子メール・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。
[E-Mail]	SmtAuthentication	0 (認証は要求されません) 1 (ユーザー名およびパスワードが要求されます)	0	インストーラに、指定された SMTP 電子メール・サーバーでユーザー名およびパスワードを要求するよう指示します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	SmtNoAccount	0 ([E-Mail] セクションの他の SMTP 構成パラメータを使用して、SMTP サーバー接続を構成します)  1 (SMTP サーバー接続の構成をスキップし、[E-Mail] セクションで他の SMTP 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します)	0	このユーザーが SMTP アカウントを持たないことを指定し、[E-Mail] セクションで他の SMTP 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	SmtPassword	現行ユーザー・アカウントの有効なパスワード	なし	[E-Mail] SMTPAuthentication パラメータが 1 に設定されている場合は、SMTP 電子メール・サーバーへの接続時に使用するパスワードを指定します。
[E-Mail]	SmtPort	有効なポート	25	SMTP サーバー用のポートを指定します。
[E-Mail]	SmtSameAsImap	0 (IMAP4 サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用しません)  1 (IMAP4 サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用します)	0	インストーラに、[E-Mail] AccountName パラメータおよび [E-Mail] Password パラメータで指定されたユーザー名およびパスワードを SMTP サーバーに対しても使用するよう指示します。このパラメータを 1 に設定すると、インストーラは [E-Mail] SmtAccount パラメータおよび [E-Mail] SmtPassword パラメータで設定されたすべての値を無視します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	SmtServerName	SMTP サーバーでの有効なユーザー名	なし	[E-Mail] SMTPAuthentication パラメータが 1 に設定されている場合は、SMTP 電子メール・サーバーへの接続時に使用するアカウント名を指定します。
[E-Mail]	SmtSSL	0 (SSL を使用しません) 1 (SSL を使用します)	0	インストーラに、SMTP 電子メール・サーバーとのすべての通信に Secure Sockets Layer (SSL) を使用するよう指示します。
[General]	CompanyName	任意の英数字文字列	なし	その登録済ユーザーを雇用する会社の名前を指定します。
[General]	InstallPath	有効なパス名	<current drive>:\Program Files\Oracle\Outlook Connector	Oracle Outlook Connector をインストールするパスを指定します。
[General]	UserName	任意の英数字文字列	なし	その登録済ユーザーの名前を指定します。 [Calendar] AccountName パラメータおよび [E-Mail] DisplayName パラメータのデフォルト値としても使用されます。
[Install]	ShowError	0 (エラー・メッセージを非表示にします) 1 (エラー・メッセージを表示します)	0	インストール中に検出されたエラー・メッセージを表示します。
[Install]	ShowOutput	0 (出力を非表示にします) 1 (出力を表示します)	0	Oracle Outlook Connector インストーラによるサイレント・インストールの進行に伴って、インストーラの出力を表示します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Install]	ShowSuccess	0 (通常のメッセージを非表示にします) 1 (通常のメッセージを表示します)	0	インストールが正常に完了したときに、ステータス・メッセージを表示します。
[Install]	ShutdownOutlook	0 (Outlook を自動的に停止しません) 1 (Outlook を自動的に停止します)	0	インストーラに、Outlook が実行されている場合は Oracle Outlook Connector をインストールする前に Outlook を自動的に終了するように指示します。インストーラが正常に機能するためには、Outlook が実行されていない必要があります。
[MAPIProfile]	Name	任意の英数字文字列	Oracle Outlook Connector	Oracle Outlook Connector を追加するプロファイルを指定します。指定したプロファイル名が存在しない場合は、インストール中に、この名前を持つ新しいプロファイルが作成され、Oracle Outlook Connector がそのプロファイルに追加されます。
[Off-line]	Path	有効なパス	現行のプラットフォームおよびプロファイル名に従って決定されたデフォルトのパス	現行ユーザーのオフライン・ストレージの位置を指定します。
[Off-line]	Use	0 (オフライン・アクセスが使用不可になります) 1 (オフライン・アクセスが使用可能になります)	0	インストーラに、現行ユーザーがオフラインでのアクセスおよび同期化を使用できるようにするように指示します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Settings]	DisableCfgUI	0（構成ダイアログ・ボックスを表示します） 1（構成ダイアログ・ボックスを非表示にします）	0	通常は Windows の「コントロール パネル」の「メール」を介して使用できる Oracle Outlook Connector 構成ダイアログ・ボックスを非表示にして、ユーザーがそのサインイン設定およびオフライン設定を変更できないようにします。
[Settings]	DisablePwd	0（パスワードの保存を使用可能にします） 1（パスワードの保存を使用不可にします）	0	インストーラにカレンダー・サーバー、IMAP4 サーバーおよび SMTP サーバーに対して設定されたパスワードを無視するように指示し、現行ユーザーにログインのたびにアカウント・パスワードを入力するように要求します。
[Settings]	ForceReboot	0（再起動しません） 1（強制的に再起動します）	0	インストーラに、インストールの前半部分（ファイルのコピー、およびサービス・プロバイダとしての Oracle Outlook Connector のインストール）を実行した後でオペレーティング・システムを再起動するように指示します。

表 D-2 Oracle Outlook Connector のサイレント・インストール用の構成ファイル・パラメータ (続き)

セクション	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Settings]	HideCTimePwdMenu	0 (「パスワードの変更」オプションを表示します) 1 (「パスワードの変更」オプションを非表示にします)	0	ユーザーが Outlook を介してそのカレンダー・サーバー・パスワードを変更することを防ぐために、「ツール」メニューの「パスワードの変更」オプションを非表示にします。
[Settings]	NoServerMail	0 (メール・サーバーへの接続を常に使用可能にします) 1 (IMAP4 サーバーと SMTP サーバーの両方への接続をスキップします) 2 (IMAP4 サーバーへの接続をスキップします) 3 (SMTP サーバーへの接続をスキップします)	0	IMAP4 サーバーおよび SMTP サーバーへの接続をスキップします。メールに Oracle Outlook Connector ではなく別のサービス・プロバイダ (Microsoft の Internet Mail など) を使用する場合は、このパラメータを使用します。
[Settings]	ShowSrvIcon	0 (サーバー使用不可のアイコンを表示しません) 1 (サーバー使用不可のアイコンを表示します)	0	カレンダー・サーバーまたはメール・サーバーが使用不可の場合に、Outlook のメイン・ウィンドウの右下に小さい情報アイコンを表示します。

## Oracle Outlook Connector の削除

Oracle Outlook Connector を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「コントロールパネル」で「アプリケーションの追加と削除」を選択します。
2. 「Oracle Outlook Connector」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

## Oracle CorporateTime 6.0.3 for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- Oracle CorporateTime for Windows のシステム要件
- Oracle CorporateTime for Windows のインストール
- Oracle CorporateTime for Windows のサイレント・インストール
- Oracle CorporateTime for Windows の削除

### Oracle CorporateTime for Windows のシステム要件

表 D-3 に、Oracle CorporateTime for Windows のシステム要件を示します。

表 D-3 システム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Windows 98</li> <li>■ Windows ME</li> <li>■ Windows NT</li> <li>■ Windows 2000</li> <li>■ Windows XP Professional</li> </ul> <p>Windows NT コンピュータに Oracle CorporateTime をインストールする場合は、Microsoft Windows Service Pack 6 以上をインストールする必要があります。</p> <p>Windows NT、2000 および XP に Oracle CorporateTime をインストールするには、管理権限が必要です。</p>
ディスク領域	8MB
RAM	16MB 以上
カレンダー・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle Calendar Server 5.5

### Oracle CorporateTime for Windows のインストール

この項では、Oracle CorporateTime for Windows をインストールする方法を説明します。

---

**注意：** Windows NT、2000 および XP に Oracle CorporateTime をインストールするには、管理権限が必要です。

---

1. Windows NT、2000 または XP にインストールする場合は、管理権限でログインします。
2. 自己解凍形式の実行ファイル win\_0600003\_583\_en.exe を実行し、画面に表示される手順に従います。
3. コンピュータ上に Oracle CorporateTime 6.0 の以前のバージョンが存在する場合、新しいバージョンをインストールすると以前のバージョンが上書きされます。コンピュータ上に Oracle CorporateTime の以前のバージョンが存在する場合は、それを削除するか、またはコンピュータ上に残すかを選択するためのプロンプトが表示されます。

## Oracle CorporateTime for Windows のサイレント・インストール

Oracle CorporateTime 6.0.3 for Windows に対しては、サイレント・インストールを実行することもできます。詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

## Oracle CorporateTime for Windows の削除

Oracle CorporateTime for Windows を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」を選択します。
2. 「Oracle CorporateTime 6.0」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

## Oracle CorporateTime 5.2.3 for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle CorporateTime for Macintosh のシステム要件](#)
- [Oracle CorporateTime for Macintosh のインストール](#)
- [Oracle CorporateTime for Macintosh の削除](#)

## Oracle CorporateTime for Macintosh のシステム要件

表 D-4 に、Oracle CorporateTime for Macintosh のシステム要件を示します。

表 D-4 システム要件

要件	値
オペレーティング・システム	Mac OS 8.6 ~ 9.2.2、Mac OS X 10.0.4 ~ 10.2
ディスク領域	10MB 以上

表 D-4 システム要件 (続き)

要件	値
RAM	8MB
カレンダー・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle Calendar Server 5.5

## Oracle CorporateTime for Macintosh のインストール

### Mac OS 8.6 ~ 9.2

この項では、Oracle CorporateTime for Mac OS 8.6 ~ 9.2 をインストールする方法を説明します。

1. 管理権限を所有していることを確認します。
2. インストーラを実行するために、CarbonLib ファイルがアクティブなシステムフォルダの「拡張機能」フォルダにインストールされていることを確認します。
3. mac\_0502003\_en.hqx をダブルクリックし、画面に表示される手順に従います。

インストーラは、アプリケーションを抽出し、選択されたコピー先フォルダに Readme.htm ファイルをコピーします。また、インストーラは、すべての共有ライブラリを「拡張機能」フォルダに抽出し、「CorporateTime Help」をアクティブなシステム・フォルダの「ヘルプ」フォルダに抽出します。

CarbonLib ファイルが 1.6 より前のバージョンである場合は、それが更新されます。ファイルの新しいバージョンを有効にするには、コンピュータを再起動します。

4. インストール完了時にアプリケーションを起動する場合は、「Oracle CorporateTime」アイコンをダブルクリックします。

### Mac OS X

この項では、Oracle CorporateTime for Mac OS X をインストールする方法を説明します。

1. 管理権限を所有していることを確認します。
2. mac\_0502003\_en.hqx をダブルクリックし、画面に表示される手順に従います。  
インストーラは、アプリケーションを抽出し、選択されたコピー先フォルダに Readme.htm ファイルをコピーします。また、インストーラは、すべての共有ライブラリを /Library/CFMSupport/ フォルダに抽出し、「CorporateTime Help」フォルダを /Library/Documentation/Help/ フォルダに抽出します。
3. インストール完了時にアプリケーションを起動する場合は、「Oracle CorporateTime」アイコンをダブルクリックします。

## Oracle CorporateTime for Macintosh の削除

### Mac OS 8.6 ~ 9.2

この項では、Oracle CorporateTime for Mac OS 8.6 ~ 9.2 を削除する方法を説明します。

1. Oracle CorporateTime を削除するには、次のコンポーネントを削除する必要があります。
  - 共有ライブラリおよびアクセス制御エントリ (ACE) ・プラグイン
  - ヘルプ
  - 初期設定
  - Oracle CorporateTime アプリケーション
2. 共有ライブラリおよび ACE プラグインを削除するには、ハードディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「拡張機能」フォルダを開き、次のファイルを削除します。
  - CSTACipher1EncrLib
  - CSTLightEncrLib
  - CSTSimpleCompLib
  - CSTStdAuthLib
  - CSTRuntime
3. ヘルプを削除するには、ハードディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「ヘルプ」フォルダを開き、「CorporateTime Help」フォルダを選択して削除します。
4. 設定を削除するには、ハードディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「初期設定」フォルダを開き、CorporateTime Preferences ファイルを選択して削除します。
5. Oracle CorporateTime アプリケーションを削除するには、ハードディスクにアクセスし、「Applications (Macintosh OS 9)」フォルダを開きます。「CorporateTime」フォルダを選択し、それを削除します。

### Mac OS X

この項では、Oracle CorporateTime for Mac OS X を削除する方法を説明します。

1. Oracle CorporateTime を削除するには、次のコンポーネントを削除する必要があります。
  - 共有ライブラリおよび ACE プラグイン
  - ヘルプ

- 設定
  - Oracle CorporateTime アプリケーション
2. 共有ライブラリおよび ACE プラグインを削除するには、ハードディスクにアクセスし、「Library」フォルダを開きます。「CFMSupport」フォルダを開き、次のファイルを削除します。
    - CSTACipher1EncrLib
    - CSTLightEncrLib
    - CSTSimpleCompLib
    - CSTStdAuthLib
    - CSTRuntime
  3. ヘルプを削除するには、ハードディスクにアクセスし、「Library」を開きます。「Documentation」フォルダを開き、「Help」フォルダを開きます。「CorporateTime Help」フォルダを選択し、それを削除します。
  4. 設定を削除するには、ハードディスクにアクセスし、「Users」フォルダを開き、「(ユーザー名)」フォルダにアクセスします。「Library」フォルダを開き、「Preferences」フォルダを開きます。CorporateTime 5.2.3.plist ファイルおよび CorporateTime Preferences ファイルを選択し、それらを削除します。
  5. Oracle CorporateTime アプリケーションを削除するには、ハードディスクにアクセスし、「Applications」フォルダを開きます。「CorporateTime」フォルダを選択し、それを削除します。

## Oracle CorporateTime 5.0.2 for Motif

この項では、次の項目について説明します。

- [Oracle CorporateTime for Motif のシステム要件](#)
- [Oracle CorporateTime for Motif のインストール](#)
- [Oracle CorporateTime for Motif の削除](#)

## Oracle CorporateTime for Motif のシステム要件

表 D-5 に、Oracle CorporateTime for Motif のシステム要件を示します。

表 D-5 システム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris 2.6、Solaris 7 および Solaris 8 (SPARC のみ)</li> <li>■ Red Hat Linux 6.1、6.2 および 7.x</li> <li>■ Linux X86 カーネル 2.2.x 以上</li> <li>■ Debian 2.2</li> <li>■ Caldera OpenLinux 2.3</li> </ul> <p><b>注意:</b> Debian リリース 2.2 を使用する場合は、追加のライブラリが必要です。libstdc++2.9-glibc2.1 というその追加ライブラリは、Oracle Collaboration Suite CD-ROM または Debian の次の Web サイトで入手できます。</p> <p><a href="http://packages.debian.org/stable/oldlibs/libstdc++2.9-glibc2.1.html">http://packages.debian.org/stable/oldlibs/libstdc++2.9-glibc2.1.html</a></p> <p>apt が構成されている場合は、<code>apt-get install libstdc++2.9-glibc2.1</code> を使用できます。</p> <p>Oracle CorporateTime のオンライン・ヘルプを使用するには、Netscape Navigator または Netscape Communicator リリース 4.0 以上が必要です。Netscape 実行ファイルを含むディレクトリをパスに設定する必要があります。</p>
ディスク領域	26MB
RAM	15 ~ 20MB

## Oracle CorporateTime for Motif のインストール

この項では、Oracle CorporateTime for Motif をインストールする方法を説明します。

1. ディレクトリで配布用アーカイブを解凍します。次に示す手順では、ディレクトリ例として /usr/local を使用しています。

- Solaris

```
cd /usr/local
gtar zxvf /tmp/motif_0502000_734_solaris_en.tar.gz
```

- Linux

```
cd /usr/local
gtar zxvf /tmp/motif_0502000_734_linux_en.tar.gz
```

ctime、ctime support libraries、html-help および readme.htm が、CorporateTime という新しいディレクトリに抽出されます。

- CorporateTime ディレクトリに移動します。

```
cd CorporateTime
```

- 環境変数 CTIME\_ROOT が作成された /usr/local/CorporateTime ディレクトリを指すように設定します。
- /usr/local/CorporateTime ディレクトリをパスに追加します。
- /usr/local/CorporateTime/ctime.sh を実行します。

## Oracle CorporateTime for Motif の削除

Oracle CorporateTime for Motif を削除するには、CorporateTime ディレクトリを次のとおり削除します。

```
rm -rf /usr/local/CorporateTime
```

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition)

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm \(Windows Edition\) のシステム要件](#)
- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm \(Windows Edition\) のインストール](#)
- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm \(Windows Edition\) の削除](#)

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) のシステム要件

表 D-6 に、Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) のシステム要件を示します。

**表 D-6 システム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>Windows 98</li><li>Windows 2000</li><li>Windows ME</li><li>Windows XP</li><li>Windows NT 4.0</li></ul>
ディスク領域	20MB

表 D-6 システム要件 (続き)

要件	値
RAM	64MB
カレンダー・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle Calendar Server 5.5
Palm Desktop	Palm Desktop 3.1 ~ 4.0.1
デバイス	Palm OS 3.3 ~ 4x を実行する任意の Palm 互換デバイス。Palm Desktop の以前のバージョンを実行している場合は、製造元の Web サイトで更新版を入手してください。

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) のインストール

この項では、Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) をインストールする方法を説明します。

CorporateSync の以前のバージョンがインストールされている場合は、CorporateSync for Palm (Windows Edition) をインストールする前に同期化を実行することをお勧めします。

1. デスクトップ上に存在する CorporateSync の以前のすべてのバージョン (2.1.1 以下)、およびモバイル端末上に存在する CS Setup ユーティリティのすべてのバージョンを削除済であることを確認します。

---

**注意：** CorporateSync 3.0 for Palm のベータ版が存在する場合は、その上にリリース版をインストールできます。

---

2. ディストリビューション・パッケージに付属の `csyncpalm0300020.1670win_en_rtm.exe` セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。
3. ライセンス契約に同意し、インストール・ディレクトリを選択します。
4. インストールのタイプを選択します。「カスタム」を選択した場合、「This feature will be installed on local hard drive」と「This feature, and all subfeatures, will be installed on your local hard drive」の間に違いはありません。
5. インストールするコンジットを選択します。
6. ユーザー情報 (ユーザー名、パスワード、カレンダー・サーバー、ノード ID など) を入力します。
7. 画面に表示されるその他の手順に従って、インストールを完了します。

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Palm (Windows Edition) の削除

Oracle CorporateSync を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」を選択します。
2. 「Oracle CorporateSync 3.0」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のシステム要件](#)
- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のインストール](#)
- [Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC の削除](#)

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のシステム要件

表 D-7 に、Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のシステム要件を示します。

**表 D-7 システム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Windows 98</li><li>■ Windows 2000</li><li>■ Windows ME</li><li>■ Windows XP</li><li>■ Windows NT 4.0</li></ul>
ディスク領域	20MB
RAM	64KB
カレンダー・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle Calendar Server 5.5
Pocket PC	MIPS、SH3 または ARM プロセッサ搭載の Pocket PC (Windows CE 3.0)
デバイス	<ul style="list-style-type: none"><li>■ HPC 2000</li><li>■ Compaq iPAQ</li><li>■ HP Jornada 5x</li><li>■ HP Jornada 7x</li><li>■ Handheld PC</li><li>■ Pocket PC 2002</li></ul> <p>Microsoft ActiveSync の以前のバージョンを実行している場合は、製造元の Web サイトで更新版を入手してください。</p>

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC のインストール

この項では、Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC をインストールする方法を説明します。

CorporateSync の以前のバージョンがインストールされている場合は、CorporateSync for Pocket PC をインストールする前に同期化を実行することをお勧めします。

1. デスクトップ上に存在する CorporateSync の以前のすべてのバージョン (2.1.1 以下)、およびモバイル端末上に存在する CS Setup ユーティリティのすべてのバージョンを削除済であることを確認します。

---

---

**注意：** CorporateSync 3.0 for Palm のベータ版が存在する場合は、その上にリリース版をインストールできません。

---

---

2. ActiveSync がコンピュータにインストールされていることを確認します。
3. ディストリビューション・パッケージに付属の `csyncppc0300020.1760win_en_rtm.exe` セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。
4. ライセンス契約に同意し、インストール・ディレクトリを選択します。
5. インストールのタイプを選択します。「カスタム」を選択した場合、「This feature will be installed on local hard drive」と「This feature, and all subfeatures, will be installed on your local hard drive」の間に違いはありません。
6. インストールするコンジットを選択します。
7. アプリケーションで Oracle CorporateSync Helper ファイルをインストールするかどうかを確認するプロンプトが表示されたら、インストールすることを確定します。
8. ユーザー情報（ユーザー名、パスワード、カレンダー・サーバー、ノード ID など）を入力します。
9. 画面に表示されるその他の手順に従って、インストールを完了します。

## Oracle CorporateSync 3.0.2 for Pocket PC の削除

Oracle CorporateSync を削除するには、次の手順を実行します。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」を選択します。
2. 「Oracle CorporateSync 3.0」を選択し、「追加と削除」をクリックします。
3. モバイル端末から CorporateSync Helper ファイルを削除するには、「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」を選択します。

- モバイル端末で、「コントロールパネル」>「CorporateSync Helper」>「アプリケーションの追加と削除」を選択します。
- 「削除」をクリックします。

## Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition)

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm \(Macintosh Edition\) のシステム要件](#)
- [Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm \(Macintosh Edition\) のインストール](#)
- [Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm \(Macintosh Edition\) の削除](#)

## Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) のシステム要件

表 D-8 に、Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) のシステム要件を示します。

表 D-8 システム要件

要件	値
オペレーティング・システム	Mac OS 7.1.2 ~ 9.2.2
ディスク領域	8MB
RAM	64MB (推奨)
カレンダー・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している Oracle Calendar Server 5.5
Palm	Palm MacPac バージョン 2x
デバイス	Palm OS 3.3 ~ 3.5x を実行する任意の Palm 互換デバイス

## Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) のインストール

この項では、Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) をインストールする方法を説明します。

- Palm Desktop 内にすでにデータが含まれている場合は、CorporateSync をインストールする前に HotSync を実行します。
- ディストリビューション・パッケージに付属の `mac_Csync_0201004_en.hqx` セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。CorporateSync の評価版を所有している場合、製品版の取得については、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。コンピュータに以前のバージョンが

インストールされている場合、インストーラは自動的にその位置を確認し、それを上書きします。

3. このインストールでは、Palm Desktop 内の情報がカレンダー・アプリケーションのエントリ情報に置き換えられます。Palm Desktop 内にデータが含まれている場合、インストーラはそのデータを「Disabled Conduits」というフォルダに移動します。
4. Palm オーガナイザをオンにし、オーガナイザをそのクレードルに設置します。
5. Palm オーガナイザ・クレードルの前面にある「HotSync」ボタンを押します。CS Setup アプリケーションが Palm オーガナイザにインストールされます。

---

---

**注意：** CS Setup が見つからないことを示すエラー・メッセージが HotSync ログに表示される場合があります。これらのメッセージは無視してください。

---

---

6. HotSync Manager が実行されている場合、インストーラはそれを終了するためのプロンプトを表示します。
7. 「はい」をクリックして、HotSync Manager を終了します。
8. HotSync フォルダ内の「HotSync」アイコンをクリックし、「HotSync Manager」を選択します。
9. 「HotSync」メニューで、「Conduit Settings」を選択します。同期化する項目のリストが表示されます。「Calendar Events」、「Tasks」および「Addresses」をダブルクリックして、これらの各項目を同期化する方法を選択します。次の選択項目を含むダイアログ・ボックスが表示されます。
  - Synchronize the files: Palm オーガナイザおよび Oracle Calendar の両方に存在するすべての情報を同期化します。
  - Macintosh overwrites hand-held: Calendar Agenda 内の情報が Palm オーガナイザの「Events」、「Tasks」または「Addresses」を上書きします。
  - Do Nothing: 指定したエントリ・タイプは同期化されません。
10. 「Conduit Settings」ダイアログ・ボックスの上部で、ユーザー名を選択します。ユーザー名が 1 つのみの場合は、それが自動的に選択されます。
11. この時点で CorporateSync はインストールされていますが、エントリ情報は同期化されていません。

## Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm (Macintosh Edition) の削除

この項では、Oracle CorporateSync 2.1.4 for Palm を削除する方法を説明します。

1. HotSync の「Conduits」フォルダ内の次のコンジットを削除します。
  - Calendar Addresses
  - Calendar Events
  - Calendar Tasks
2. HotSync の「Conduits」フォルダ内の「CTime Sync Read Me」フォルダを削除します。
3. Macintosh OS 8.x ~ 9.x のアクティブなシステム・フォルダの「拡張機能」フォルダから「Unison Library」共有ライブラリを削除します。

## Oracle FileSync for Windows

Windows ユーザーは、Windows オペレーティング・システム固有のネットワーキング・プロトコルまたはクライアント・アプリケーションの他に、Oracle FileSync をインストールおよび使用できます。Oracle FileSync は、ローカル・コンピュータと Oracle Files の間ですべてのファイル変更を同期化します。

## Oracle FileSync for Windows のインストール

Oracle FileSync は、ローカル・コンピュータと Oracle Files の間でファイルの同期を維持することを可能にする Windows クライアントです。

1. すべての Windows アプリケーションを保存および終了します。

Oracle FileSync ソフトウェアの以前のリリースがインストールされている場合は、「コントロールパネル」の「アプリケーションの追加と削除」アプレットを使用して、そのリリースを削除します。
2. Oracle Files にログインし、次のディレクトリに移動します。  
`AllPublic/Users/Users-S/system-data/downloads`
3. FileSync.exe をダブルクリックして、インストール・プログラムを実行します。
4. 画面に表示される手順に従い、デフォルト値を受け入れます。アプリケーションが次のディレクトリにインストールされます。  
`c:\Program Files\Oracle\Oracle 9iFS FileSync`
5. FileSync アプリケーションを起動するには、Windows の「スタート」>「プログラム」メニューで「Oracle FileSync」を選択します。
6. 「Oracle Files Welcome」ページの「Oracle FileSync」リンクをクリックして、Oracle FileSync をダウンロードすることもできます。

---

---

# Oracle Collaboration Suite ドキュメント

この付録では、Oracle Collaboration Suite ドキュメントにアクセスする方法を説明します。  
この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM](#)
- [コンポーネント CD-ROM に含まれる Oracle Collaboration Suite ドキュメント](#)

## Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM

Oracle Collaboration Suite CD Pack には、Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM が含まれています。この CD-ROM に含まれるドキュメントには、HTML および PDF の両方のフォーマットがあります。CD-ROM の最上位の README ファイルには、追加情報が含まれています。表 E-1 に、Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM の内容を示します。

**表 E-1 Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM**

部品番号	タイトル
なし	『Oracle Collaboration Suite Quick Tour』
J06897-01	『Oracle Collaboration Suite ユーザーズ・ガイド』
B10035-01	『Oracle Email Application Developer's Guide』
B10034-01	『Oracle Voicemail & Fax Administrator's Guide』
J07123-01	『Oracle Email 管理者ガイド』
J07124-01	『Oracle Email Migration Tool ガイド』
なし	『Oracle Email Javadoc』
B10042-01	『Oracle9i Wireless Administrator's Guide』
B10043-01	『Oracle Ultra Search User's Guide』
J06889-01	『Oracle Files 管理ガイド』
J07199-01	『Oracle Calendar Server Administrator's Guide』
J07200-01	『Oracle Calendar Server Reference Manual』
J07201-01	『Oracle Calendar Web Client Administrator's Guide』
B10097-01	『Oracle Calendar API Developer's Guide』
J07202-01	『Oracle Outlook Connector User's Guide』
B10105-01	『Oracle CorporateSync for Palm Macintosh Edition User's Guide』

## Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリの表示

Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリは、CD-ROM から直接表示するか、またはその内容をハード・ドライブにコピーして表示することができます。このドキュメントを表示するために必要なツールについては、2-14 ページの「[オンライン・ドキュメントの要件](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリを表示するには、次の手順を実行します。

1. ブラウザを使用して、CD-ROM またはハード・ドライブ上の doc ディレクトリの最上位の index.htm ファイルを開きます。
2. ソリューション領域タブをクリックして、特定のコンポーネントに関連するドキュメントを表示します。

## コンポーネント CD-ROM に含まれる Oracle Collaboration Suite ドキュメント

HTML および PDF フォーマットの『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』、『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』およびコンポーネントのリリース・ノートは、Oracle Collaboration Suite CD Pack に含まれる次のコンポーネント CD-ROM の最上位の doc ディレクトリにあります。

- Oracle9iAS Infrastructure のインストール用の 1 枚目の CD-ROM をマウントしてインストールを開始します。
- Oracle Collaboration Suite のインストール用の 1 枚目の CD-ROM をマウントしてインストールを開始します。
- Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール用の 1 枚目の CD-ROM をマウントしてインストールを開始します。
- Oracle Collaboration Suite Interoperability Patch
- Oracle Collaboration Suite Client

表 E-2 に、doc ディレクトリの内容を示します。このディレクトリ内の index.html ファイルから、これらのドキュメントの目次へアクセスできます。

**表 E-2 Oracle Collaboration Suite リリース・ドキュメント**

部品番号	タイトル
J06952-01	『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』
J06961-01	『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』
J06916-01	『Oracle Files for Solaris Operating System (SPARC) リリース・ノート』
J06982-01	『Oracle Collaboration Suite リリース・ノート』
J07121-01	『Oracle Email リリース・ノート』
B10060-01	『Oracle Voicemail & Fax Release Notes』

**表 E-2 Oracle Collaboration Suite リリース・ドキュメント (続き)**

<b>部品番号</b>	<b>タイトル</b>
B10089-01	『Oracle Wireless Release Notes』
B10092-01	『Oracle Ultra Search Release Notes』
J07198-01	『Oracle Calendar Server Release Note』
B10148-01	『Oracle Calendar Administrator Release Notes』
B10149-01	『Oracle Calendar Web Client Release Notes』
B10150-01	『Oracle Outlook Connector Release Notes』
B10151-01	『Oracle Calendar API Release Notes』
B10152-01	『Oracle CorporateTime for Windows Release Notes』
B10153-01	『Oracle CorporateTime for Macintosh Release Notes』
B10154-01	『Oracle CorporateTime for Motif Release Notes』
B10155-01	『Oracle CorporateSync for Palm, Windows Edition Release Notes』
B10156-01	『Oracle CorporateSync for Palm, Macintosh Edition Release Notes』
B10157-01	『Oracle CorporateSync for Pocket PC Release Notes』
J07122-01	『Oracle Email 管理者ガイド 追加情報』

---

# 用語集

## Debian

Linux カーネル、および GNU プロジェクトの基本オペレーティング・システム・ツールを使用する無償のオペレーティング・システム。

## Email Store

Oracle Email で UTF8 キャラクタ・セットを使用するように設定されたチューニング済のシード・データベースをインストールする。このデータベースには、Oracle Email に必要なすべての依存コンポーネントが含まれている。

## Files Store

Oracle Files で UTF8 キャラクタ・セットを使用するように設定されたチューニング済のシード・データベースをインストールする。このデータベースには、Oracle Files に必要なすべての依存コンポーネントが含まれている。

## ias\_admin パスワード (ias\_admin password)

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite がインストールされたホスト上の任意のインストールを管理するために使用されるパスワード。このパスワードは、追加の Oracle Collaboration Suite インスタンスをインストールするために必要である。**Oracle Internet Directory** を構成する場合、デフォルトで、デフォルトの管理ユーザー「orcladmin」に、ias\_admin ユーザーと同じパスワードが割り当てられる。orcladmin ユーザーは、**Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー**である。

## LDAP

[[Lightweight Directory Access Protocol](#)] を参照。

## LDAP データ交換フォーマット (LDAP Data Interchange Format: LDIF)

すべての LDAP コマンドライン・ユーティリティ用の入力ファイルをフォーマットするための一連の規格。

## LDIF

「[LDAP データ交換フォーマット](#)」を参照。

## Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)

拡張可能な標準 Directory Access Protocol。LDAP クライアントと LDAP サーバーが通信するために使用する共通の言語。業界標準のディレクトリ製品（Oracle Internet Directory など）をサポートする設計規則のフレームワーク。

## Oracle Calendar

デスクトップ・クライアント、Web およびすべてのモバイル端末を介したカレンダーリング、スケジュールリングおよび個人情報管理（PIM）機能を提供する Oracle Collaboration Suite アプリケーション。スケーラブルなカレンダー・アーキテクチャによって、企業全体での高度なグループ・カレンダーの使用およびリソース・スケジュールリングが可能になる。

## Oracle Calendar Web Client

単独で、または他の Oracle Calendar クライアント・コンポーネントの補助機能としても使用できる、便利でアクセスの容易なカレンダー・サービス。ユーザーは、カスタマイズ可能なユーザー・インタフェースによって組織のニーズに適応するインタフェースを使用して、複数のタイムゾーン、オペレーティング・システムおよび言語間で作業できる。また、柔軟で直観的なレイアウトおよび編成を使用して、周囲のユーザーと簡単に共同作業できる。

## Oracle Collaboration Suite Web Client

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供する。この Web クライアントは、基礎となる Oracle9iAS Infrastructure を使用して、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、および大規模な共同作業用に設計されたファイル・サーバーである [Oracle Files](#) に格納されたコンテンツにアクセスするための、安全なシングル・サインオン環境を提供する。

## Oracle CorporateSync

[Oracle Calendar](#) の会議、タスクおよびアドレス帳を携帯端末のエントリと同期化する。Oracle CorporateSync を使用すると、カレンダーをどこにでも携帯し、携帯端末で必要な変更を行って、Oracle Calendar Server 上で最新の情報と同期化できる。この機能は、Palm デバイス（Windows および Macintosh）および Pocket PC デバイス（Windows のみ）で使用できる。

## Oracle CorporateTime

[Oracle Calendar](#) クライアントを使用すると、ユーザーは、会議、備忘録、イベントおよびタスクを、自分で、または他のユーザーの代理として作成および管理できる。ユーザーは、便利な結合された Group View を使用して簡単にスケジュールを比較したり、他のユーザーのスケジュール空き状況を確認することができ、会議を作成する前にスケジュールの不一致を確認できる。オンラインのアドレス帳を使用すると、ユーザーは、連絡先を管理して、構成可能なカテゴリに従って連絡先を分類できる。Oracle CorporateTime は、Windows、Macintosh および Motif で使用できる。

## Oracle Email

ボイスメール、電子メールおよび FAX のメッセージ用に使用される単一のメッセージ・ストア。あらゆるタイプの情報を格納および管理し、それらの情報へのアクセスを提供する。このメッセージ・ストアは、配信、通話処理、ワイヤレス通知、ブラウザベースのクライアント（Web とワイヤレスの両方）および管理ユーティリティを提供する。Oracle Email は、任意のアクセス方法を使用して、すべてのタイプのメッセージにアクセスを提供する。ボイスメール、電子メール、FAX およびその他のメール・タイプは、ユーザーが選択したアクセス・チャンネルおよびデバイスで使用可能になる。

## Oracle Enterprise Manager Web Site

Oracle Collaboration Suite 用に特別に設計された管理ツールを提供する Web サイト。この Web サイトを使用すると、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のコンポーネントを監視および構成できる。アプリケーションの配置、セキュリティの管理および Oracle Collaboration Suite クラスターの作成および管理を実行できる。Oracle Enterprise Manager Web Site は、Oracle9iAS Infrastructure の一部としてすべてのホストにインストールされる。

## Oracle Enterprise Manager コンソール (Oracle Enterprise Manager Console)

Oracle Enterprise Manager のクライアント・インタフェース。Oracle 環境を詳細に表示する。Oracle Enterprise Manager コンソールを使用すると、ネットワーク全体で、Oracle データベース、アプリケーション・サーバーおよび Oracle アプリケーションを自動的に検出および管理できる。コンソールおよび関連ツールは、Oracle9iAS Infrastructure の一部としてインストールされる。

## Oracle Files

スケーラブルで信頼性の高い統合ファイル・サーバーを介した共同作業およびファイルの共有をサポートする、コンテンツ管理アプリケーション。Oracle Files は、高度な Web ベースのユーザー・インタフェースおよび業界標準のプロトコル・サポートを提供する。これによって、ユーザーは、1 つのワークスペース内または企業全体で様々なタイプのファイルを他のユーザーと簡単に共有できる。セルフサービスの管理機能によって、ユーザーはワークスペースを作成し、優先する生産性ツールおよびネットワーク・プロトコル・サーバーを使用して、コンテンツの安全性の確保、コンテンツの作成および公開を行うことができる。Oracle Files は、データ・センターとユーザーの両方のファイル・システムを管理できる。

## Oracle FileSync

Oracle FileSync は、すべてのファイルの変更をローカル・コンピュータと **Oracle Files** の間で同期化し、古いファイルを新しいファイルで置き換え、ローカル・コンピュータと Oracle Files のコンテンツが一致するようにする。

## Oracle Files ドメイン・コントローラ (Oracle Files Domain Controller)

**ドメイン**を作成する **ノード**を制御するためのプロセス。

## Oracle HTTP Server

Apache Web Server テクノロジーに基づいて構築された Oracle HTTP Server は、Oracle9iAS Infrastructure をサポートし、拡張性、安定性、高速な処理を提供する。Java Servlets、JavaServer Pages、Perl、PL/SQL および CGI アプリケーションもサポートする。

## Oracle Internet Directory

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) バージョン 3 の実装。散在するユーザーおよびネットワーク・リソースに関する情報の共有を可能にする。

### Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー (Oracle Internet Directory super user)

特別なディレクトリ管理者。IASAdmins グループのメンバーである必要があり、通常、ディレクトリ情報への完全なアクセス権を持つ。スーパー・ユーザーのデフォルトのユーザー名は orcladmin、デフォルトのパスワードは welcome。デフォルトのパスワードは、すぐに変更することをお薦めする。このユーザー名は、デフォルトで、IASAdmins のメンバーである。Oracle Internet Directory の管理者は、他のユーザーに orcladmin パスワードを使用しない場合、IASAdmins グループのメンバー用に異なるユーザー名とパスワードを作成することができる。

## Oracle Management Server

**Oracle Enterprise Manager コンソール** を使用して、システム管理タスクを処理し、ネットワーク間のこれらのタスクの分散を管理する。Oracle Enterprise Manager コンソールおよびその 3 層アーキテクチャを **Oracle Enterprise Manager Web Site** と併用すると、Oracle 環境全体を管理できる。

## Oracle Outlook Connector

Oracle Outlook Connector は、統合された Microsoft Outlook の見慣れたインタフェースを介して、電子メールおよびリアルタイムのカレンダーを提供する。Oracle Outlook Connector は、オンラインとオフラインの両方での情報へのアクセス機能、完全な電子メール機能および PDA 同期機能を備え、Microsoft Outlook の最もよく使用するすべての機能のメリットを最大限に活かす。さらに、ユーザーは、**Oracle Calendar** を使用した情報へのリアルタイム・アクセスおよび最新のスケジュール状況の参照を介して、高度なカレンダー機能のメリットを得ることができる。

## Oracle Ultra Search

Oracle Ultra Search は、Oracle データベース、その他の ODBC 対応データベース、IMAP メール・サーバー、Web サーバーが提供する HTML ドキュメント、ディスク上のファイルなどの複数のリポジトリにわたって、均一な検索機能を提供する。Oracle データベース・サーバーおよび Oracle Text テクノロジーに基づいて構築され、クローラを使用してドキュメントを索引付けする。ドキュメントは元のリポジトリ内に残り、クロールされた情報を使用して索引が構築される。この索引は、ファイアウォールの内側の、指定された Oracle データベース内に存在する。また、Ultra Search は、コンテンツ管理ソリューションを構築するための API を提供する。

## Oracle Voicemail & Fax

信頼性が高く、高スケーラブルなボイスメールおよび FAX システム。このシステムによって、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージの集中管理された安全な格納および取出しが可能になる。Oracle Voicemail & Fax は、高スケーラブルで信頼性の高い **Oracle Email** メッセージ・ストアを基礎として使用し、通話処理、配信、ブラウザベースのクライアントおよび管理ユーティリティを提供する。

## Oracle Wireless & Voice

情報およびアプリケーションをモバイル端末に配信するためのポータル・サービス。Oracle Wireless & Voice を使用すると、Web ページ、カスタム Java アプリケーション、XML ベースのアプリケーションなどの様々なコンテンツを使用するカスタム・ポータル・サイトを作成できる。Oracle Wireless & Voice サイトでは、各ターゲット端末のプラットフォーム用のコンテンツを再作成することなく、モバイル端末から多様な情報にアクセスできる。

## Oracle9iAS Containers for J2EE

Oracle9iAS Infrastructure が提供する、完全に Java で作成された、Java 2 Enterprise Edition (J2EE) コンテナの完全なセット。標準 Java Development Kit (JDK) の Java Virtual Machine (JVM) 上で実行する。Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) は、オペレーティング・システムに存在する標準 JDK 上で実行できる。

## Oracle9iAS Metadata Repository

Oracle Collaboration Suite インスタンスを実行するために必要なメタデータを含む事前作成済データベース。Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On の情報も格納できる。

## Oracle9iAS Portal

Oracle9iAS Portal は、Web データベース・アプリケーションおよびコンテンツ・ドリブン Web サイトを構築、配置および監視するための完全なソリューションである。Oracle9iAS Portal を使用すると、簡単に使用可能な HTML ベースのインタフェースを介して、データベース・オブジェクトを作成および表示できる。また、HTML ベースのインタフェースを作成するツールも提供する。また、パフォーマンス追跡機能を使用してパフォーマンスの問題を解決したり、インタフェースを介してデータベースのセキュリティを管理できる。

## Oracle9iAS Single Sign-On

複数のアカウントおよび Oracle Collaboration Suite アプリケーションへのアクセスを可能にする、企業規模のユーザー認証プロセス。

## Oracle9iAS Web Cache

サーバーのアクセス速度を向上するキャッシング・サービス。Oracle9iAS Infrastructure および Oracle データベース上で実行し、頻繁に使用される E-Business Web サイトのパフォーマンス、拡張性および可用性を向上する。Oracle9iAS Web Cache は、頻繁にアクセスされる URL を仮想メモリー内に格納することによって、これらの URL へのリクエストを Web

サーバー上で繰り返し処理する必要性を排除する。また、1つ以上の Web アプリケーションからの、静的および動的に生成された HTTP コンテンツをキャッシュする。

### Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名 `cn=OracleContext` を持つディレクトリ・サブツリーのルート。すべての Oracle ソフトウェア情報が格納される。ディレクトリには、1つ (または複数) の Oracle コンテキストが存在する。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストに関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- データベース接続のために Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングで使用する接続識別子
- Oracle Advanced Security で使用する Enterprise User Security

### インスタンス名 (instance name)

単一のホスト上の Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール・インスタンスを識別する名前。

### サブスクライバ (Subscriber)

Oracle Files では、サブスクライバはユーザーが共同作業を行う組織エンティティを示す。各サブスクライバには、それぞれ固有のサブスクライバ管理者が存在する。拡張ユーザーであるサブスクライバ管理者は、割当て制限の管理、サブスクライバ設定の指定、ユーザーの管理、ファイル、フォルダおよびワークスペースのリストア、カテゴリの管理を担当する。

サブスクライバは、サイト管理者が管理する。サイト管理者は、サブスクライバを作成、変更および削除する。サイト管理者は、1つ以上のサブスクライバを管理できる。

### スキーマ (schema)

データベース・オブジェクトのコレクション。表、ビュー、シーケンス、ストアド・プロシージャ、シノニム、索引、クラスタ、データベース・リンクなどの論理構造を含む。スキーマの名前は、そのスキーマを制御するユーザーの名前になる。

### ドメイン (domain)

**ドメイン・ネーム・システム** 名前空間内の任意のツリーまたはサブツリー。ドメインは、一般的に、同じ接尾辞 (ドメイン名) を含むホスト名を持つコンピュータのグループを意味する。

Oracle Files では、ドメインは Oracle Files ノードの論理グループ、**Oracle Files ドメイン・コントローラ**、およびすべての Oracle Files データを含む Oracle9i データベース・インスタンスである。

### ドメイン・ネーム・システム (Domain Name System: DNS)

ドメインの階層に編成されたコンピュータおよびネットワーク・サービスのネーミング・システム。DNS は、TCP/IP ネットワークで使用され、ユーザーが簡単に識別できる名前に

よってコンピュータの位置を示す。DNS は、ユーザーが識別できる名前を、コンピュータが理解する IP アドレスに解決する。

### **ノード (node)**

Oracle Files ノードは、ホスト・コンピュータで実行中のプロセスのセットである。1 つ以上のノード・プロセスをホスト・コンピュータで実行できる。Oracle Files ノードは、基本的に製品および基礎となるプロセス（実行時にソフトウェアをサポートする Java VM（仮想マシン）など）を構成するアプリケーション・ソフトウェアである。

### **ポート (port)**

送信データを特定のプログラム内外にルーティングするために使用される番号。

### **ホスト名 (host name)**

ドメイン内の各コンピュータを一意に識別する名前。



# 索引

## A

### AJP

ポート番号, C-4

## B

### Bourne/Korn シェル

環境変数 DISPLAY, 2-17

## C

### CD-ROM のマウント

HP, 4-4

Linux, 4-6

Solaris, 4-2

### Client

Oracle Collaboration Suite, 1-5

### Cluster Membership Monitor, 2-23

### CPU 要件, 2-2

### C シェル

環境変数 DISPLAY, 2-17

## D

### Database Configuration Assistant, 5-11, 5-13

### Database Upgrade Assistant, 5-11

## E

### eject コマンド

Linux, 4-7

Solaris, 4-3

### emtab ファイルの作成, 7-4

## H

### HMP

「Hyper Messaging Protocol」を参照

### HP

カーネル・パラメータ, 2-27, 2-34

サポートされるオペレーティング・システム, 2-4

必須パッチ, 2-8, 2-9

マウント・コマンド, 4-4

### Hyper Messaging Protocol (HMP), 2-3

## I

### ias\_admin パスワード, A-2, A-4

### ifsConfigOut.log, B-2

### Interoperability Patch

概要, 1-6

## J

### J2EE and Web Cache

概要, 1-3

カスタマ・アプリケーションの配置の制限, 1-3

### Java Message Service (JMS)

ポート番号, C-4

### Java Object Cache

ポート番号, C-4

### Java Runtime Environment (JRE)

パッチ, 2-11

必要なバージョン, 4-12

### JMS

「Java Message Service (JMS)」を参照

### JRE

「Java Runtime Environment (JRE)」を参照

## L

---

### Linux, 2-4

- カーネル・パラメータ, 2-29, 2-36
- マウント・コマンド, 4-6

## O

---

### OC4J

- ポート番号, C-4

### oinstall グループ

- UNIX グループ名, 2-18

### Oracle 9iFS

- ソフトウェアのインストール, 6-3

### Oracle Calendar

- 概要, 1-4
- トラブルシューティング, B-2
- 必要なインストール後のタスク, 5-19, 5-20
- ポート番号, C-6

### Oracle Collaboration Suite

- Client, 1-5
- Oracle Collaboration Suite Information Storage, 1-3
- Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール, 5-8
- Oracle Collaboration Suite Information Storage の多言語サポート, 3-3
- Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置, 3-3
- Search に必要なインストール後のタスク, 5-20
- Web Client, 1-4
- Web Client に必要なインストール後のタスク, 5-20
- アプリケーションのリスト, 1-4
- インストールの順序, 1-3
- 概要, 1-3
- クイック・ツアーに必要なインストール後のタスク, 5-20
- 中間層コンポーネント, 1-3
- 中間層のインストール, 5-15
- 中間層のインストール後のタスク, 5-19
- 中間層の多言語サポート, 3-5
- 中間層の配置, 3-4
- ドキュメント, 1-6

### Oracle Collaboration Suite Information Storage

- インストールの順序, 1-3
- 概要, 1-3
- 多言語サポート, 3-3
- 配置, 3-3

### Oracle CorporateSync for Palm (Macintosh Edition)

- インストール, D-24
- 削除, D-26
- システム要件, D-24

### Oracle CorporateSync for Palm (Windows Edition)

- インストール, D-21
- 削除, D-22
- システム要件, D-20

### Oracle CorporateTime for Macintosh

- インストール, D-16
- 削除, D-17
- システム要件, D-15

### Oracle CorporateTime for Motif

- インストール, D-19
- 削除, D-20
- システム要件, D-19

### Oracle CorporateTime for Windows

- インストール, D-14
- サイレント・インストール, D-15
- 削除, D-15
- システム要件, D-14

### Oracle Email

- IMAP4-SSL のポート番号, C-5
- IMAP4 のポート番号, C-5
- NNTP-SSL のポート番号, C-5
- NNTP のポート番号, C-5
- POP3-SSL のポート番号, C-5
- POP3 のポート番号, C-5
- SMTP のポート番号, C-5
- アップグレード, 3-17
- 概要, 1-4
- 削除手順, 8-2
- ダウングレード, 3-22
- データベースのインストール, 5-8
- データベースのチューニング, 3-24
- 配置, 3-6
- 必要なインストール後のタスク, 5-12, 5-20
- ポート番号, C-5

### Oracle Enterprise Manager

- ポート番号, C-6

### Oracle Files, 3-6

- Linux に対する要件, 3-7
- Solaris でサポートされるオペレーティング・システム, 2-4
- インストール後のタスク, 5-15
- 概要, 1-4
- 構成, 6-3

- 構成情報, A-5
- ソフトウェアのインストール, 6-3, 6-12
- ダウングレード, 3-22
- データベースのインストール, 5-8
- データベースのチューニング, 3-26
- トラブルシューティング, B-2
- 配置, 3-6
- 非インタラクティブ・モードでの Oracle Files Configuration Assistant の実行, 6-23
- 必要なインストール後のタスク, 5-21
- ポート番号, C-6
- ランタイムの設定, 6-24
- Oracle FileSync**
  - インストール, D-26
  - 削除, D-26
- Oracle HTTP Server**
  - ポート番号, C-4
- Oracle Intelligent Agent Configuration Assistant, 5-11**
- Oracle Internet Directory**
  - アップグレード, 3-13
  - 概要, 1-2
  - スーパー・ユーザーのパスワード, A-3, A-5
  - スーパー・ユーザー名, A-2, A-5
  - ダウングレード, 3-23
  - ポート番号, A-2, A-5, C-6
  - ホスト名, A-2, A-4
- Oracle Management Server**
  - 概要, 1-3
  - ポート番号, C-6
- Oracle Net**
  - 非インタラクティブ・インストール, 7-9
- Oracle Net Configuration Assistant, 5-10, 5-13**
- Oracle Outlook Connector**
  - インストール, D-3
  - インストール前の要件, D-3
  - サイレント・インストール, D-4
  - 削除, D-13
  - システム要件, D-2
- Oracle Pocket PC**
  - インストール, D-23
  - 削除, D-23
  - システム要件, D-22
- Oracle Real Application Clusters**
  - root.sh の実行, 5-10
  - インストール前のタスク, 2-20
  - インストール前のタスク (Linux), 2-24
  - インストール前の追加タスク (HP), 2-22
  - インストール前の追加タスク (Linux), 2-22
  - インストール前の追加タスク (Solaris), 2-22
  - トラブルシューティング, B-5
  - 必須バッチ, 2-10
- Oracle Text**
  - スピン, B-3
- Oracle Ultra Search**
  - アップグレード, 3-20
  - 概要, 1-4
  - ダウングレード, 3-22
  - 配置, 3-8
  - 必要なインストール後のタスク, 5-21
- Oracle Universal Installer, 4-10**
  - UNIX グループ名, 2-18
  - 「UNIX グループ名」画面, 4-14
  - 概要, 4-9
  - 起動, 4-12
  - 前提条件の確認, 4-9
  - 追加インストール, 4-11
- Oracle Voicemail & Fax**
  - アップグレード, 3-20
  - インストール, 1-5
  - 概要, 1-5
  - 配置, 3-10
  - 必要なインストール後のタスク, 5-21
- Oracle Wireless & Voice**
  - 概要, 1-4
  - ダウングレード, 3-22
  - 配置, 3-11
  - 必要なインストール後のタスク, 5-22
  - ポート番号, C-5
- Oracle Workflow**
  - Oracle Files の依存性, 3-6
  - ポート番号, C-7
  - 要件, 3-6
- Oracle9iAS Clickstream**
  - Collector Agent のポート番号, C-3
  - Collector Server のポート番号, C-3
  - Execution Engine のポート番号, C-3
  - Intelligence Viewer のポート番号, C-3
  - Intelligence のポート番号, C-3
  - Runtime Administrator のポート番号, C-3
- Oracle9iAS Forms Services**
  - ポート番号, C-4
- Oracle9iAS Infrastructure**
  - 9.0.2.0.0 のアップグレード, 3-13
  - 9.0.2.0.1 のアップグレード, 3-13, 3-12

インストールの順序, 1-2  
概要, 1-2  
コンポーネントのポート番号, C-2  
多言語サポート, 3-3  
配置, 3-2  
Oracle9iAS Metadata Repository  
概要, 1-2  
Oracle9iAS Portal, 1-5  
ポート番号, C-5  
Oracle9iAS Reports Services  
ポート番号, C-5  
Oracle9iAS Single Sign-On  
概要, 1-3  
サーバーのホスト名, A-2, A-4  
ポート番号, A-2, A-4, C-5  
Oracle9iAS Web Cache  
ポート番号, C-5  
oracle アカウント  
UNIX アカウント, 2-19  
Oracle のインベントリ・ディレクトリ, A-2, A-3,  
A-4  
Oracle ホームの位置, A-2, A-3, A-4  
oraInst.loc ファイルの作成, 7-4  
oraInstRoot.sh ファイル, 4-14  
ORAINVENTORY UNIX グループ, 4-14  
oraInventory ディレクトリ  
UNIX グループ名, 2-18  
位置, 4-10, A-2, A-3, A-4  
インストール・ログ・ファイル, 4-10  
oratab ファイルの作成, 7-4  
OSDBA および OSOPER グループ, 2-19, 5-8

## P

---

portlist.ini ファイル, 2-14  
ポート番号ファイル, C-2

## R

---

RMI  
ポート番号, C-4  
root.sh スクリプト, 5-6, 5-10, 5-18

## S

---

silentInstall.log ファイル, 7-6, 7-8

Solaris  
カーネル・パラメータ, 2-26, 2-32  
サポートされるオペレーティング・システム, 2-4  
必須バッチ, 2-6, 2-8  
マウント・コマンド, 4-2  
Solaris 用のフォント・パッケージ, 2-12  
SQL\*Net  
ポート番号, C-5

## U

---

Unicode キャラクタ・セット, 5-5  
「UNIX グループ名」画面, 4-14  
UNIX のアカウントおよびグループ, 2-18  
admintool ユーティリティ, 2-18  
groupadd ユーティリティ, 2-18  
oinstall グループ, 2-18  
oracle アカウント, 2-19  
oraInventory ディレクトリ, 2-18  
権限が付与されたグループ, 2-19  
作成, 2-19  
UTF8 キャラクタ・セット, 6-10

## V

---

/var/tmp の要件, 2-2  
Virtual Network Computing (VNC), 2-16  
Visigenics CORBA  
ポート番号, C-5

## X

---

X サーバー, 2-16

## あ

---

アカウントおよびグループ  
UNIX, 2-18  
アップグレード  
Oracle Email, 3-17  
Oracle Internet Directory, 3-13  
Oracle Ultra Search, 3-20  
Oracle Voicemail & Fax, 3-20  
Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0, 3-13  
Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1, 3-12, 3-13  
アンマウント・コマンド  
HP, 4-6

Linux, 4-8  
Solaris, 4-4  
必要な権限, 4-2

## い

---

インスタンス名, A-2, A-3, A-4  
インストール  
CD-ROM, 4-2  
Oracle 9iFS ソフトウェア, 6-3, 6-12  
Oracle Collaboration Suite Information Storage, 5-8  
Oracle Collaboration Suite Information Storage の  
チェックリスト, A-3  
Oracle Collaboration Suite 中間層, 5-15  
Oracle Collaboration Suite のチェックリスト, A-4  
Oracle CorporateSync for Palm (Macintosh  
Edition), D-24  
Oracle CorporateSync for Palm (Windows  
Edition), D-21  
Oracle CorporateSync for Pocket PC, D-23  
Oracle CorporateTime for Macintosh, D-16  
Oracle CorporateTime for Motif, D-19  
Oracle CorporateTime for Windows, D-14  
Oracle Email データベース, 5-8  
Oracle FileSync, D-26  
Oracle Files データベース, 5-8  
Oracle Outlook Connector, D-3  
Oracle Voicemail & Fax, 1-5  
Oracle9iAS Infrastructure, 5-2  
Oracle9iAS Infrastructure のチェックリスト, A-2  
エラー, B-2  
ハード・ドライブ, 4-8  
非インタラクティブ・インストールおよび Oracle  
Net, 7-9  
非インタラクティブのエラー処理, 7-10  
非インタラクティブ・ログ・ファイル, 7-6, 7-8  
マウント・オプション, 4-2  
問題, B-2  
リモート・コンピュータ, 2-17  
ログ・ファイルの位置, 4-10  
インストール後のタスク  
Oracle Calendar に必要なタスク, 5-19, 5-20  
Oracle Collaboration Suite Search に必要なタスク,  
5-20  
Oracle Collaboration Suite Web Client に必要なタス  
ク, 5-20

Oracle Collaboration Suite クイック・ツアーに必要  
なタスク, 5-20

Oracle Email に必要なタスク, 5-12, 5-20

Oracle Files, 5-15

Oracle Files に必要なタスク, 5-21

Oracle Ultra Search に必要なタスク, 5-21

Oracle Voicemail & Fax に必要なタスク, 5-21

Oracle Wireless & Voice に必要なタスク, 5-22

中間層, 5-19

追加のドキュメント, 5-8, 5-22

インストールの順序

Oracle Collaboration Suite, 1-3

Oracle Collaboration Suite Information Storage, 1-3

Oracle9iAS Infrastructure, 1-2

インストール前

Oracle Outlook Connector の要件, D-3

Oracle Real Application Clusters, 2-20

Oracle Real Application Clusters タスク (Linux),  
2-24

UNIX グループの作成, 2-18

環境変数, 2-16

環境変数 DISPLAY, 2-16

## え

---

エラー

インストール, B-2

## お

---

オペレーティング・システム

追加の要件, 2-13

パッチ, 2-5

要件, 2-4

オンライン・ドキュメント

オンライン・フォーマット, 2-14

ディスク領域, 2-14

要件, 2-14

## か

---

カーネル・パラメータ, 2-25 ~ 2-38

HP, 2-27, 2-34

Linux, 2-29, 2-36

Solaris, 2-26, 2-32

概要

Oracle Universal Installer, 4-9

## 確認

- Cluster Membership Monitor, 2-23
- データベース接続, 6-6, 6-21
- 環境変数 DISPLAY, 2-16
- Bourne/Korn シェル, 2-17
- C シェル, 2-17
- 設定, 2-16

## き

---

- 既存のデータベースのチューニング, 3-23
- 起動

- Oracle Universal Installer, 4-12

## く

---

### グループ

- ORAINVENTORY, 4-14
- OSDBA および OSOPER, 5-8
- 「UNIX グループ名」画面, 4-14

## け

---

- 権限が付与されたグループ, 2-19
- 言語サポート, 2-13

## こ

---

### 構成

- Database Configuration Assistant, 5-11
- Oracle Cluster Configuration Assistant, 5-10
- Oracle Files Configuration Assistant, 6-3
- Oracle Files 用の情報, A-5
- Oracle Intelligent Agent Configuration Assistant, 5-11
- Oracle Net Configuration Assistant, 5-10
- ログ・ファイル, 6-4
- コンポーネントのポート番号, C-2

## さ

---

### サーバー

- 障害, B-3
- サイレント・インストール, 7-2
- Oracle CorporateTime for Windows, D-15
- Oracle Outlook Connector, D-4

## 削除

- Oracle CorporateSync for Palm (Macintosh Edition), D-26
- Oracle CorporateSync for Palm (Windows Edition), D-22
- Oracle CorporateSync for Pocket PC, D-23
- Oracle CorporateTime for Macintosh, D-17
- Oracle CorporateTime for Motif, D-20
- Oracle CorporateTime for Windows, D-15
- Oracle Email, 8-2
- Oracle FileSync, D-26
- Oracle Outlook Connector, D-13
- Oracle コンポーネント, 8-2

## 作成

- OSDBA および OSOPER グループ, 5-8
- UNIX グループ名, 2-19
- UNIX のアカウントおよびグループ, 2-18
- 新規の Oracle Files ドメイン, 6-4

## サポート

- オペレーティング・システム, 2-4
- 言語, 2-13

## し

---

### システム要件

- Oracle CorporateSync for Palm (Macintosh Edition), D-24
- Oracle CorporateSync for Palm (Windows Edition), D-20
- Oracle CorporateSync for Pocket PC, D-22
- Oracle CorporateTime for Macintosh, D-15
- Oracle CorporateTime for Motif, D-19
- Oracle CorporateTime for Windows, D-14
- Oracle Outlook Connector, D-2

## 実行

- Database Configuration Assistant, 5-13
- Oracle Net Configuration Assistant, 5-13
- root.sh, 5-6, 5-10, 5-18

## 指定

- レスポンス・ファイル, 7-6

## す

---

### スクリプト

- root.sh, 5-6, 5-10, 5-18

### スピン

- Oracle Text, B-3

スワップ領域, 2-2

## せ

---

設定

環境変数 (Bourne/Korn シェル), 2-16

環境変数 (C シェル), 2-16

## た

---

ダウングレード

Oracle Email, 3-22

Oracle Files, 3-22

Oracle Internet Directory, 3-23

Oracle Ultra Search, 3-22

Oracle Wireless & Voice, 3-22

多言語サポート

Oracle Collaboration Suite Information Storage, 3-3

Oracle9iAS Infrastructure, 3-3

言語のリスト, 2-13

中間層, 3-5

## て

---

ディスク領域

オンライン・ドキュメント, 2-14

要件, 2-2, 2-3

データベース

オペレータ・グループ, 2-19

カーソル, B-4

管理者グループ, 2-19

既存のデータベースの使用, 3-23

キャラクタ・セット, 5-5, 6-10, A-3

実行していない, B-3

接続, 6-6, 6-21

デフォルトのキャラクタ・セット, 5-5, 6-10

## と

---

ドキュメント

追加, 5-8, 5-22

ドキュメント・ライブラリ

Oracle Collaboration Suite, 1-6

表示, E-2

トラブルシューティング

Oracle Calendar, B-2

Oracle Files, B-2

Oracle Real Application Clusters, B-5

レスポンス・ファイル, 7-8

## に

---

認証ソフトウェア要件, 2-14

## は

---

ハードウェア要件, 2-2 ~ 2-3

CPU, 2-2

ディスク領域, 2-2 ~ 2-3

配置

Oracle Collaboration Suite Information Storage, 3-3

Oracle Collaboration Suite 中間層, 3-4

Oracle Email, 3-6

Oracle Files, 3-6

Oracle Ultra Search, 3-8

Oracle Voicemail & Fax, 3-10

Oracle Wireless & Voice, 3-11

Oracle9iAS Infrastructure, 3-2

推奨項目, 3-11

パッチ

ダウンロード場所, 2-5

## ひ

---

非インタラクティブ・インストール

Oracle Files Configuration Assistant, 6-23

エラー処理, 7-8

概要, 7-2, 7-3

要件, 7-3

必須

HP パッチ, 2-8, 2-9

Oracle Real Application Clusters 用のパッチ, 2-10

Solaris パッチ, 2-6, 2-8

表示

ドキュメント・ライブラリ, E-2

表領域, 6-8

## ふ

---

ファイル

emtab, 7-4

oraInst.loc, 7-4

oraInstRoot.sh, 4-14

oratab, 7-4

silentInstall.log, 7-6, 7-8  
インストール・ログ, 7-6  
インストール・ログ、非インタラクティブ, 7-8

## ほ

---

ポートの割当て, 2-14

ポート番号

OC4J, C-4

AJP, C-4

HTTP リスナー, C-4

RMI, C-4

Oracle Calendar, C-6

Oracle Email, C-5

IMAP4, C-5

IMAP4-SSL, C-5

NNTP, C-5

NNTP-SSL, C-5

POP3, C-5

POP3-SSL, C-5

SMTP, C-5

Oracle Enterprise Manager, C-6

Intelligent Agent, C-6

管理, C-6

Oracle Files, C-6

AFP, C-6

FTP, C-6

HTTP ノード, C-6

LDAP-SSL, C-6

LDAP-非 SSL, C-6

NFS, C-6

SMB, C-6

ドメイン・コントローラ, C-6

メイン・ノード, C-6

Oracle HTTP Server, C-4

Java Object Cache, C-4

JServ サブレット, C-4

Oracle Notification Service のリクエスト・ポート, C-4

Oracle Notification Service のリモート・ポート, C-4

Oracle Notification Service のレポート・ポート, C-4

Oracle Notification Service のローカル・ポート, C-4

SSL, C-4

非 SSL, C-4

Oracle Internet Directory, C-6

SSL, C-6

非 SSL, C-6

Oracle Management Server, C-6

Oracle Wireless & Voice, C-5

Oracle Workflow, C-7

TNS, C-7

Oracle9iAS Clickstream

Collector Agent, C-3

Collector Server, C-3

Execution Engine, C-3

Intelligence, C-3

Intelligence Viewer, C-3

Runtime Administrator, C-3

Oracle9iAS Containers for J2EE

Java Message Service (JMS), C-4

Oracle9iAS Forms Services, C-4

Oracle9iAS Portal, C-5

Oracle9iAS Reports Services, C-5

Visigenics CORBA, C-5

Oracle9iAS Single Sign-On, C-5

Oracle9iAS Web Cache, C-5

HTTP Listen - SSL, C-5

HTTP Listen - 非 SSL, C-5

管理, C-5

SQL\*Net, C-5

コンポーネントの番号, C-2

コンポーネント別, C-3

デフォルトの番号, 6-11

デフォルトの変更, 6-11

ポート番号別, C-7

ホスト名ファイルの構成, 2-17

## ま

---

マウント・オプション

インストール, 4-2

マウント・コマンド

HP, 4-4

Linux, 4-6

Solaris, 4-2, 4-3

必要な権限, 4-2

マウント・ポイント

各インストール, 4-13

サーバー, 6-11

## め

---

メモリー要件, 2-2

## も

---

問題

インストール, B-2

## よ

---

要件

CPU, 2-2

Oracle CorporateSync for Palm (Macintosh Edition), D-24

Oracle CorporateSync for Palm (Windows Edition), D-20

Oracle CorporateTime for Macintosh, D-15

Oracle CorporateTime for Motif, D-19

Oracle CorporateTime for Windows, D-14

Oracle Outlook Connector, D-2

Oracle Pocket PC, D-22

Oracle Workflow, 3-6

/var/tmp, 2-2

オンライン・ドキュメント, 2-14

クラスタの相互接続, 2-3

スワップ領域, 2-2

追加, 2-13

ディスク領域, 2-2, 2-3

認証ソフトウェア, 2-14

ハードウェア, 2-2, 2-3

メモリー, 2-2

## り

---

リスナー

実行していない, B-3

領域要件

/var/tmp, 2-2

スワップ, 2-2

リリース・ノート, 2-15

## れ

---

レスポンス・ファイル, 7-2, 7-5

指定, 7-6

## ろ

---

ログ・ファイル

ifsConfigOut.log, B-2

Oracle 9iFS の構成プロセス, 6-4

